

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、京都国立博物館の平常展示館建て替えに伴う法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

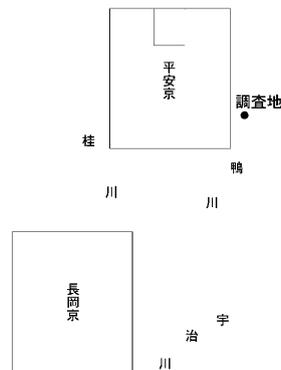
平成 22 年 1 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区茶屋町 527 |
| 3 委 託 者 | 独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館 分任契約担当役
副館長 太田和良幸 |
| 4 調査期間 | 10次調査：2008年12月8日～2009年3月31日
11次調査：2009年9月7日～2009年11月13日 |
| 5 調査面積 | 10次調査：910 m ²
11次調査：260 m ² |
| 6 調査担当者 | 10次調査：網 伸也・加納敬二・辻 純一
11次調査：網 伸也・田中利津子 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、
作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 網 伸也・加納敬二・田中利津子 |
| 14 執筆分担 | 網 伸也：1～3、4-(1)・(6)、5-(1)・(2)
加納敬二：4-(1)・(2)
田中利津子：4-(2)～(5)
長宗繁一：5-(3)
付章1：パリノ・サーヴェイ株
式会社
付章2：北野信彦 |
| 15 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、資料業務職員お
よび調査業務職員があたった。 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	5
3. 遺 構	8
(1) 基本層序	8
(2) 平安時代後期の遺構	12
(3) 鎌倉時代から室町時代の遺構	14
(4) 桃山時代から江戸時代初頭の遺構	22
(5) 江戸時代後期から明治時代の遺構	28
4. 遺 物	30
(1) 土器類	30
(2) 瓦類	36
(3) 金属製品	39
(4) 石製品	40
(5) 木製品	44
(6) 鑄造関係遺物	49
5. ま と め	51
(1) 方広寺造営以前の遺構変遷について	51
(2) 方広寺南回廊周辺における造営過程	54
(3) 方広寺大仏殿復元試案	55
付章1 方広寺跡出土遺物の自然科学分析	75
付章2 方広寺跡出土の赤色顔料に関する分析調査	87

図 版 目 次

巻頭図版1 遺構	10- 1・4区	方広寺南門および北端地業（北西から）
巻頭図版2 遺構	1 10- 4区	方広寺南回廊（東から）
	2 11- 1区	第5面全景（西から）
図版1 遺構	1 11- 1区	第5面全景（北西から）
	2	路面120a下層溝299（北から）

- 3 門1柱穴 282 (北から)
- 図版2 遺構 1 11-1区 第4面全景 (西から)
2 門2柱穴 142 (北西から)
3 土坑 147 (北西から)
- 図版3 遺構 1 埋納遺構 193 および溝 156 (北東から)
2 埋納遺構 193 および柱穴 160 断割 (南西から)
3 11-1区 第3面全景 路面 120c および溝 140 (南から)
- 図版4 遺構 1 11-1区 第2面全景 (南から)
2 路面 120d (北から)
3 11-1区 第1面および基礎攪乱北壁断面 (南東から)
- 図版5 遺構 1 10-3・4区 旧谷地形全景 (南西から)
2 井戸 91 検出状況 (東から)
3 井戸 93 (北から)
- 図版6 遺構 1 10-3・4区 全景 (北東から)
2 10-1・4区 方広寺南門および南回廊全景 (北西から)
- 図版7 遺構 1 10-4区 方広寺南回廊 (北から)
2 10-4区 方広寺南回廊 (北西から)
- 図版8 遺構 1 10-1区 方広寺南門および北端地業 (北から)
2 10-3区 土坑 28 および溝 43 (東から)
3 10-4区 溝 92 検出状況 (南から)
- 図版9 遺構 1 10-3区 窯 41 および土坑 42 (東から)
2 窯 41 (東から)
- 図版10 遺構 1 10-2・5区 全景 (東から)
2 10-5区 南面石塁地業 (南西から)
- 図版11 遺構 1 11-2区 全景 (北から)
2 堀 322 北端石積み (南から)
3 11-2区 方広寺整地面全景 (南西から)
- 図版12 遺物 溝 150・溝 270・井戸 93 出土土器
- 図版13 遺物 土坑 173・土坑 147・中世包含層出土土器
- 図版14 遺物 1 埋納遺構 193 出土瓦質土器鍋
2 堀 322 出土土器
- 図版15 遺物 1 輸入白磁・青白磁
2 輸入青磁・褐釉陶器
- 図版16 遺物 平安時代軒瓦
- 図版17 遺物 方広寺期軒瓦

- 図版 18 遺物 1 青銅製品・鉄製品
 2 錢貨
 3 石製品
- 図版 19 遺物 石造物
- 図版 20 遺物 1 独楽
 2 井戸 93 横棧
 3 井戸 93 縦板
- 図版 21 遺物 1 鞆羽口・坩堝
 2 鑄型・炉壁
- 図版 22 遺物 鉄滓群
- 図版 23 史料 「中井家旧蔵絵図」[3]-14 大仏惣指図（京都府立総合資料館蔵）

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：5,000）	1
図 2	10・11 次調査区と既調査区との位置関係（1：2500）	2
図 3	平常展示館周辺調査区配置図（1：800）	3
図 4	11- 2 区配置図（1：500）	4
図 5	10- 1・3・4 区調査前全景（南西から）	4
図 6	10- 1・4 区遺構面保護状況（北東から）	4
図 7	11- 2 区調査前全景（南から）	4
図 8	11- 2 区遺構面保護状況（南から）	4
図 9	洛中洛外図 右隻 1・2 扇部分（京都国立博物館蔵）	6
図 10	10- 1～3 区東壁断面図（1：50）	9
図 11	11- 1 区南壁断面図（1：50）	10
図 12	11- 2 区北壁断面図（1：50）	11
図 13	11- 1 区基礎攪乱北壁 路面 120 断面図（1：50）	12
図 14	11- 1 区第 5 面平面図（1：100）	13
図 15	門 1 実測図（1：50）	14
図 16	11- 1 区第 3・4 面平面図（1：100）	15
図 17	土坑 147・埋納遺構 193 実測図（1：20）	16
図 18	10- 3 区下層遺構平面図（1：150）	17

図 19	10- 3区 A-A'ラインおよび B-B'ライン整地層断面図 (1 : 50)	18
図 20	10- 3区 C-C'ラインおよび D-D'ライン整地層断面図 (1 : 50)	19
図 21	井戸 91・93 実測図 (1 : 50)	20
図 22	11- 2区 実測図 (1 : 50)	21
図 23	10- 1・3・4区、11- 1区 遺構配置図 (1 : 250)	23
図 24	南門周辺遺構平面図 (1 : 100)	24
図 25	南回廊実測図 (1 : 100)	25
図 26	11- 1区第2面 路面 120 d 平面図 (1 : 100)	26
図 27	10- 2・5区 平面図 (1 : 100)	27
図 28	窯 41 実測図 (1 : 20)	29
図 29	溝 150・270 出土土器実測図 (1 : 4)	31
図 30	井戸 91・93 出土土器実測図 (1 : 4)	32
図 31	土坑 173・147、埋納遺構 193 出土土器実測図 (1 : 4)	33
図 32	中世包含層出土土器 (1 : 4)	34
図 33	堀 322 出土土器実測図 (1 : 4)	34
図 34	土坑 321 土器実測図 (1 : 4)	35
図 35	溝 63・64 出土土器実測図 (1 : 4)	35
図 36	方広寺造営以前軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	37
図 37	方広寺期軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)、刻印瓦拓影 (1 : 2)	38
図 38	金属製品実測図 (1 : 2)、銭貨拓影 (2 : 3)	40
図 39	石製品実測図 (1 : 4)	40
図 40	石造物画像・拓影・実測図 1 (1 : 8)	41
図 41	石造物画像・拓影・実測図 2 (1 : 8)	42
図 42	石造物画像・拓影・実測図 3 (1 : 8)	43
図 43	木製品実測図 (1 : 2)	45
図 44	縦板金型印拓影 (1 : 4)	45
図 45	井戸 93 枿材実測図 1 (1 : 8)	46
図 46	井戸 93 枿材実測図 2 (1 : 8)	47
図 47	井戸 93 枿材実測図 3 (1 : 8)	48
図 48	鋳型・炉壁実測図 (1 : 4)	49
図 49	平安時代後期路面全体図 (1 : 200)	52
図 50	室町時代路面全体図 (1 : 200)	53
図 51	検出遺構配置図	56
図 52	(イ)「洛陽大佛殿」(『諸堂図』所載図より作図)	59
図 53	(ロ)「京大仏」(『愚子見記四』所収大仏殿図より作図)	60

図 54 (ロ)「京大仏」(『愚子見記四』所収「京大仏総構」より作図)	60
図 55 (ハ)「大仏惣指図」記載内容図(『中井家旧蔵指図』より作図)	62
図 56 (ハ)「大仏惣指図」記載寸尺関係図(『中井家旧蔵指図』より作図)	63
図 57 大仏殿院復元寸尺関係図 (ハ)「大仏惣指図」『中井家旧蔵指図』を元に作図	65
図 58 大仏殿復元図	66
図 59 大仏台座復元図	67
図 60 仁王門復元図	68
図 61 南門復元図	68
図 62 大仏殿院復元位置図	70
図 63 方広寺位置図	72
図 64 暦年較正結果	77
図 65 鉄釘の顕微鏡組織	80
図 66 鉄釘の EPMA 調査結果	81
図 67 椀型鍛冶滓の顕微鏡組織	83
図 68 試料 1 が付着した軒平瓦	88
図 69 試料 1 の付着状況	88
図 70 試料 2 の検出状況	88
図 71 三十三間堂内における試料 3 の残存状況	88
図 72 試料 1 の色相と集合状況の金属顕微鏡観察	90
図 73 試料 2 の色相と集合状況の金属顕微鏡観察	90
図 74 試料 3 の色相と集合状況の金属顕微鏡観察	90
図 75 試料 1 の顔料粒子の電子顕微鏡観察 (50,000 倍)	90
図 76 試料 2 の顔料粒子の電子顕微鏡観察 (50,000 倍)	90
図 77 試料 3 の顔料粒子の電子顕微鏡観察 (50,000 倍)	90
図 78 試料 1 の蛍光 X 線分析結果	91
図 79 試料 2 の蛍光 X 線分析結果	91
図 80 試料 3 の蛍光 X 線分析結果	91
図 81 試料 1 の X 線回折分析結果	92
図 82 試料 2 の X 線回折分析結果	92
図 83 試料 3 の X 線回折分析結果	92

表 目 次

表 1	遺構概要表	8
表 2	遺物概要表	30
表 3	(イ)「洛陽大佛殿」記載主要寸尺	59
表 4	『愚子見記四』記載主要寸尺	61
表 5	各史料記載主要建物寸尺比較表	65
表 6	各建物復元寸尺一覧表	71
表 7	放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果	76
表 8	試料および調査項目	78
表 9	椀型鍛冶滓の化学組成	84

付 表 目 次

附表 1	掲載土器一覧表	96
附表 2	掲載軒瓦一覧表	98
附表 3	掲載刻印瓦一覧表	99
附表 4	掲載石造物一覧表	99

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都国立博物館の平常展示館建て替えに伴って継続的に実施している発掘調査で、10次調査と11次調査にあたる。調査対象地は、豊臣秀吉が創建した方広寺大仏殿旧境内の南端部に相当し、現在でも大仏殿石塁が南辺西端から西辺および北辺にかけて遺存しており、「史跡方広寺石塁および石塔」として国の史跡指定を受けている。また、平安時代後期では後白河法皇の御在所であった法住寺殿、中世では六波羅政庁跡に推定される。

調査地は南辺石塁を東へ延長した地点で、9次までの発掘調査では平常展示館の南面から南東にかけて方広寺南門および南回廊、南面石塁などを確認し、下層では中世の遺構も良好に検出している。10次調査は、南門基壇の北辺の実態と、南門から東方に延長する回廊遺構の遺存範囲を明らかにするとともに、南面石塁の造成地業や回廊内の遺構の確認を目的として調査を行った。11次調査では、南門北方の大仏殿境内の遺構の有無と、下層で検出していた中世遺構の確認を目的とした。また、東大路通に面する事務棟東側における、遺構の遺存状況の確認を目的とした。なお、9次調査までの調査区との位置関係は図2のとおりである。

2008年度に実施した10次調査は、調査対象面積が約910㎡で、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という。）の指導のもと京都国立博物館との

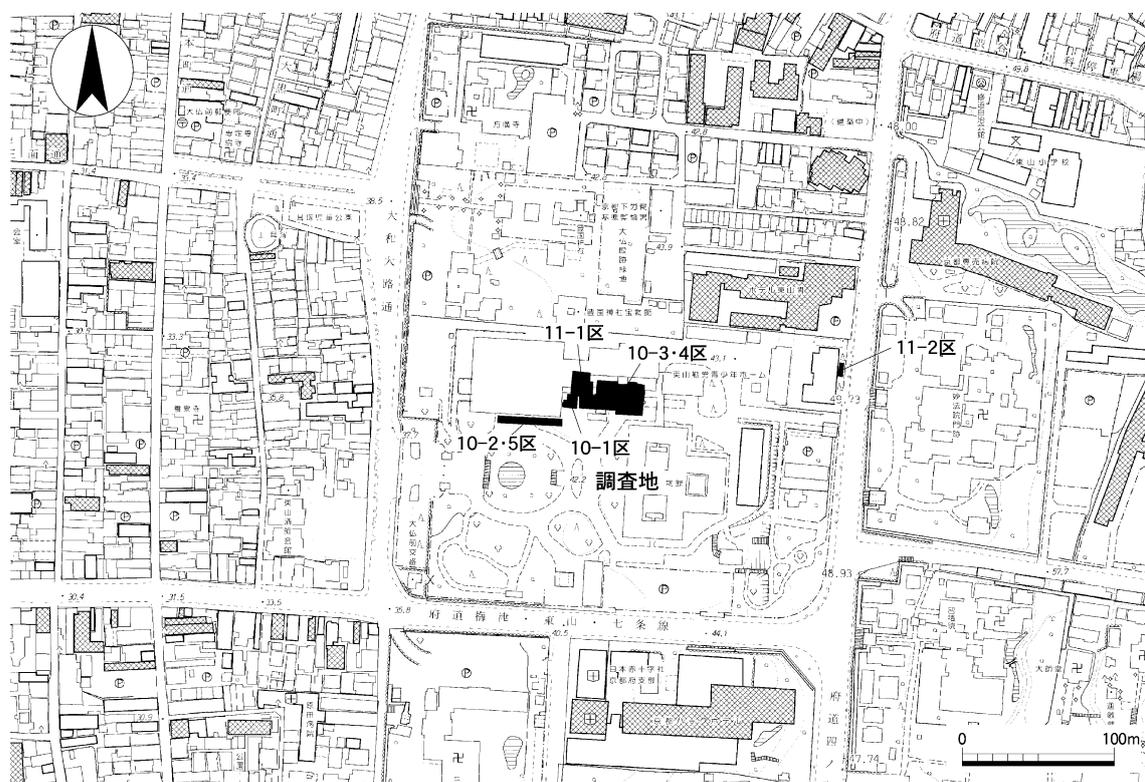


図1 調査位置図（1：5,000）

協議を行い、10-1～5区の5箇所の調査区を設定した。10-1区は平常展示館と東西渡廊下の南東隅に設けた調査区で、方広寺南門西半の北辺を示す東西方向の布掘り地業痕跡を新たに確認した。10-2区は平常展示館の南階段部の調査で、埋設管に壊されながらも遺存する石畳裏込め石を広い範囲で確認した。10-3区は渡廊下の下を含む旧事務棟南の中庭部の調査で、方広寺造営に伴う整地層や造成時の湧水を処理する水切り溝などを検出した。また、整地層下層では室町時代の井戸や土坑を確認したが、中世の遺構面は削平を受けており、遺構密度は非常に低い。10-4区は10-1区の東側、10-3区の南に隣接して設定した調査区で、南門北辺東半の布掘り地業と、南回廊東側の遺存範囲を確定することができた。また、基盤層と整地層との変換点を確認するとともに、南門周辺の盛土造成が最も早く行われた実態を明らかにした。10-5区は10-2区の東延長部での調査で、石畳裏込めと南門周辺の盛土造成の境界を検出した。

2009年度に実施した11次調査は、旧小講堂部を11-1区、現事務棟東に設定した調査区を11-2区として調査を行った。11-1区の調査面積は小講堂の基礎による攪乱部分も含めて230㎡、11-2区の調査面積は当初51㎡の予定であったが南半部に大規模な攪乱が存在したため北半30㎡に縮小して調査した。11-1区では方広寺期の遺構は検出できなかったが、整地層を確認し、整地層下では南北方向の道路遺構や、道に面して建てられた西側宅地の多数の柱穴群などを検出した。遺構面は全部で5面に及び、上層路面では石敷きが施されていることを確認し、最下層の平安時代後期の遺構面では路面に面する大規模な門遺構を検出した。とくに最下層の遺構は、法住寺殿に関わる遺構として注目できる。また、11-2区では方広寺期の整地面や土坑を検出するとともに、下層では方広寺造営直前に埋められた南北方向の堀を検出した。遺構を保護するために、その下層は北壁部の断ち割り調査のみにとどめたが、中世の包含層が存在することを確認した。

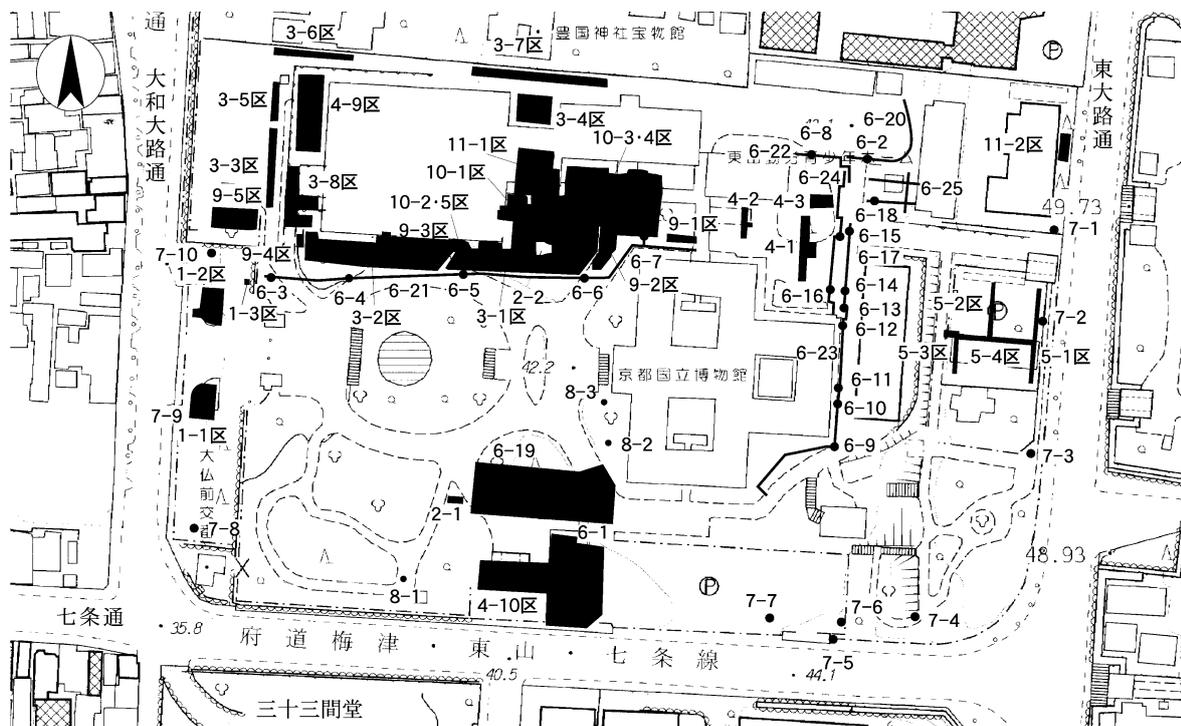


図2 10・11次調査区と既調査区との位置関係 (1:2,500)

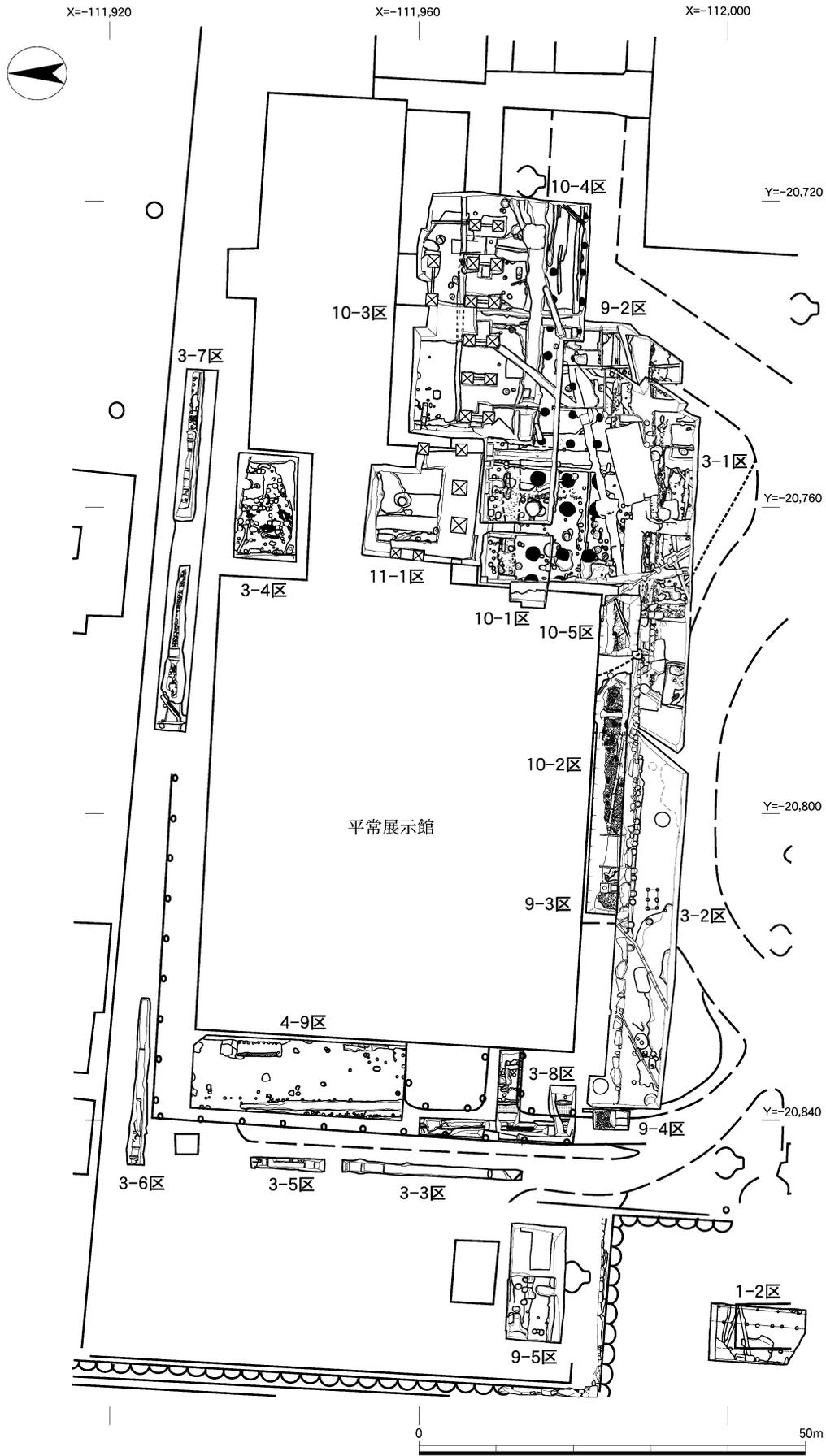


図3 平常展示館周辺調査区配置図 (1 : 800)

これら検出遺構については、各調査区で京都市文化財保護課の検査指導を受けて記録作業を行っており、10-1・4区で検出した南門および回廊関係の遺構と、10-2・5区の石塁裏込めについては写真測量を行った。また、遺構の現地公開については、2009年3月7日に京都国立博物館と共催で現地説明会を実施し、500名を超える参加者を得た。

なお、10次調査は方広寺関連遺構の保存範囲の確定を主目的としており、南門基壇および回廊・石塁地業の遺構に関しては、一部の断ち割り調査を除き下層の調査は行っていない。保存範囲の遺構面については、文化庁・京都府教育庁指導部文化財保護課・京都市文化財保護課の指導に従い、真砂土によって保護養生を行い、その後埋め戻している。また、11次調査2区についても、京都市文化財保護課の指導のもと京都国立博物館との協議のうえで、同様の保存処置を行い調査を終了した。



図4 11-2区配置図(1:500)



図5 10-1・3・4区調査前全景(南西から)



図6 10-1・4区遺構面保護状況(北東から)



図7 11-2区調査前全景(南から)



図8 11-2区遺構面保護状況(南から)

2. 位置と環境

東山三十六峰の一つ、標高 196 m の阿弥陀ヶ峯の西麓から鴨川にかけての地域は、扇状に開けた緩やかな傾斜地を形成しており、その山裾部は古くから鳥部野と呼ばれた。平安遷都以来、この地域は京近郊の葬送地として利用されており、『日本紀略』天長 3 年（827）5 月 10 日条には鳥部寺の南に恒世親王を葬したことが記されている。

また、阿弥陀ヶ峯と北方の清水山との間の谷筋は、京と山科を結ぶ交通の要衝であり、東山丘陵の西には現在の大和大路に踏襲される南北古道が通っていた。平安時代後期には、後白河法皇の院御所である法住寺殿が造営されているが、院御所造営の背景にこのような立地的環境が意識された可能性がある。

法住寺殿は、藤原為光が永延 2 年（988）に建立した法住寺を母体とし、その後、永暦 2 年（1161）に後白河法皇の御所として造営された。法住寺殿には南殿や北殿をはじめ多くの新造御所が建てられ、蓮華王院や最勝光院などの御堂も付随した広大な御所であったことが知られている¹⁾。博物館敷地は北殿に推定されているが、北殿の遺構は当調査地を含め周辺の発掘調査でもまだ発見されていない。法住寺殿に関する建築遺構は、建長元年（1249）焼失後に再建された蓮華王院御堂（三十三間堂）が残されており、その南西で玉石敷き雨落ち溝をもつ 3 棟の礎石建物を検出している²⁾。また、博物館南の南殿推定地の発掘調査で、寿永 2 年（1183）の木曾義仲による法住寺殿焼き打ちに関わる武将の墓壙が検出されており、甲冑・弓矢・馬具など豊富な副葬品が出土したことは注目に値する³⁾。

その後、法住寺殿は源頼朝によって再建され、建久 2 年（1191）には後白河法皇の渡御が行われたが、翌年法皇が崩御すると法住寺法華堂に葬られ、蓮華王院ともども法住寺殿は陵寺としての性格を強く帯びるようになった。一方、法住寺殿の北方、六波羅の地には承久乱後に鎌倉幕府によって六波羅探題が置かれた。六波羅正庁は北方（北殿）と南方（南殿）があり、南殿は六条末大和大路東周辺に推定されている。また、当地北方の東山渋谷の地には、元徳 2 年（1330）年に真宗本山の興正寺が山科から移され、仏光寺と改められた。仏光寺は六波羅探題の滅亡後、室町時代に寺勢を拡大したが、応仁 2 年（1468）年に御影堂をはじめとする坊舎が兵火で焼亡し、急速に衰退していった。当地周辺での発掘調査成果をみると、博物館敷地内で鎌倉・室町時代に遡る遺構・遺物を多く発見しており、大和大路沿いでも博物館の西に隣接した調査において館の門と塀を検出している⁴⁾。これらの事実は、当地が六波羅正庁と蓮華王院・後白河天皇法住寺陵を含む中世法住寺殿の間に位置する場所として、また急速に発展した仏光寺の膝元として、中世においても栄えていたことを暗示するものである。

そして、豊臣秀吉が関白となり豊臣姓を賜った翌年の天正 14 年（1586）、東福寺周辺において大仏殿の建立が計画される。ただ、実際には聚楽第の造営などと重なったために工事が遅れ、三十三間堂の北側に場所を替えて、天正 16 年から本格的に開始される。5 年間で東大寺大仏殿よりも大きな仏殿と大仏を建立するという強行スケジュールで、大仏殿の部材は諸大名によって全



図9 洛中洛外図 右隻1・2扇部分（京都国立博物館蔵）

国から集められた。例えば、徳川家康は富士山から材木の提供を命じられており、現在世界遺産となっている屋久島の杉も島津義弘によって切り出されたと伝えている。全国の良材を使って造営された大仏殿は、正面桁行が約90 m、高さが50 mに達する堅牢壮大な建造物であった。

これに対し、大仏は工期短縮のため鑄造の金銅仏ではなく、中国明の漆喰仏の技術を採用した高さ20 m近い大仏であった。そして、大仏供養会を間近に控えた文禄5年（1596）閏7月、大地震が京を襲い（慶長大地震）、大仏殿はほとんど無傷であったにも関わらず、漆喰の大仏は崩れ落ちてしまう。結局、秀吉は大仏の完成をみることなく、慶長3年（1598）年8月に伏見城で波乱万丈の生涯を終える。

年が明けた慶長4年4月に秀吉は遺言とおり阿弥陀ヶ峰に埋葬され、豊国大明神として豊国社に祀られるが、豊国社の造営と同時に秀頼によって方広寺大仏の再建も計画される。大仏は新たに金銅仏として再興され、慶長大地震で倒壊した大仏殿築地は回廊に建て替えられた。また、三十三間堂を修理するとともに、南大門・西大門・太閤塀を新たに築いて蓮華王院を方広寺の寺院地内に取り込み、七重塔と講堂の縄張りも行うなど伽藍の整備も進められた。現在残る蓮華王院南門と太閤塀はこの時のものである。

しかし、慶長5年の関ヶ原の戦い以後は、豊臣家の孤立化と対応するかのようには伽藍再建に暗雲の兆しが見えはじめる。七重塔と講堂の建立計画は頓挫し、慶長7年暮れには鑄造中の大仏本体より火が出て、不運にも堅牢壮大を誇った大仏殿は焼け落ちてしまう。その後、慶長13年には秀頼による2度目の再建が企画されるが、ようやく大仏殿が完成し開眼供養を翌月にひかえた慶

長 19 年 7 月、「国家安康」「君臣豊楽」の梵鐘銘文が問題となって開眼供養は再び延期となる。そして、この事件を契機として徳川方と豊臣方の対立は深まり、大阪冬の陣・夏の陣が勃発して豊臣家は滅亡してしまう。

これら方広寺に関連する遺構は、博物館北側の調査において大仏殿基壇・礎石据付穴・大仏台座の遺構を良好に検出し、壮大強固な大仏殿の一端を知ることができた⁵⁾。また、博物館敷地内の 9 次にあたる発掘調査では、南回廊と南門の礎石据付痕跡を良好な状態で検出し、洛中洛外図などには回廊は単廊として描かれているが、調査で確認した回廊は複廊であり、より格式の高い建造物であったことを明らかにした⁶⁾。さらに以前、西辺石塁の修復工事に伴う調査を実施して裏込め地業の構造を明らかにしていたが⁷⁾、南辺石塁の東延長部を新たに検出し、西辺石塁と同様に五輪塔などの石造物が裏込め石として多量に使用されている事実も再確認している。

方広寺大仏殿は江戸時代になっても洛東を代表する名所として、『洛中洛外図』などに多く描かれるが、寛政 10 年（1789）に落雷のため全焼してしまう。その後は幕末に半身像が仮堂に安置されるだけとなり、明治時代には境内跡地の大部分が収公される。そして、境内南部は皇室の宝物を管理する恭明宮となり、明治 30 年に帝国博物館として生まれ変わる。

註

- 1) 杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981 年
- 2) 『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
- 3) 『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第 13 輯 財団法人古代学協会 1984 年
- 4) 『平成 2 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994 年
- 5) 『平成 12 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 6) 『京都国立博物館構内発掘調査報告書－法住寺殿・六波羅正庁跡・方広寺跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 23 冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009 年
- 7) 『史跡方広寺石塁修復工事報告書』京都国立博物館 1987 年

3. 遺 構

(1) 基本層序

博物館敷地は北東から南西へ緩やかに下がる傾斜地で、調査地周辺の敷地北半では西側の石塁に向かって平坦面を形成する。この平坦面は方広寺造成によるものであるが、敷地東端は博物館建設に伴う削平のため著しく旧地形が改変されていると予測できる。

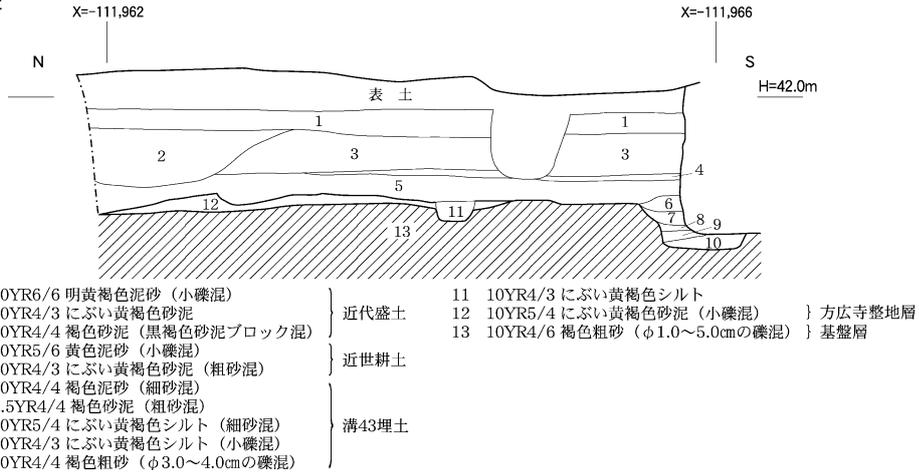
まず、南回廊周辺の基本層序を地点別に東からみると、10-3区東壁では地表下0.7mまでが博物館造成の盛土、その下層に約0.2mの近世土壌化層があり、地表下約0.9mで方広寺整地層上面あるいは基盤層の褐色粗砂を確認した。方広寺整地層上面の標高は41.3mである。10-3区北壁西半部では、地表下約1.1mで方広寺整地層の上面を確認しており、標高はやはり41.3mである。整地層の厚さは0.2mほどで、その下層が基盤層のにぶい黄褐色粘質土となる。

南門北辺部にあたる10-1区東壁では、地表下0.9mまでが博物館の盛土、その下層に近世土

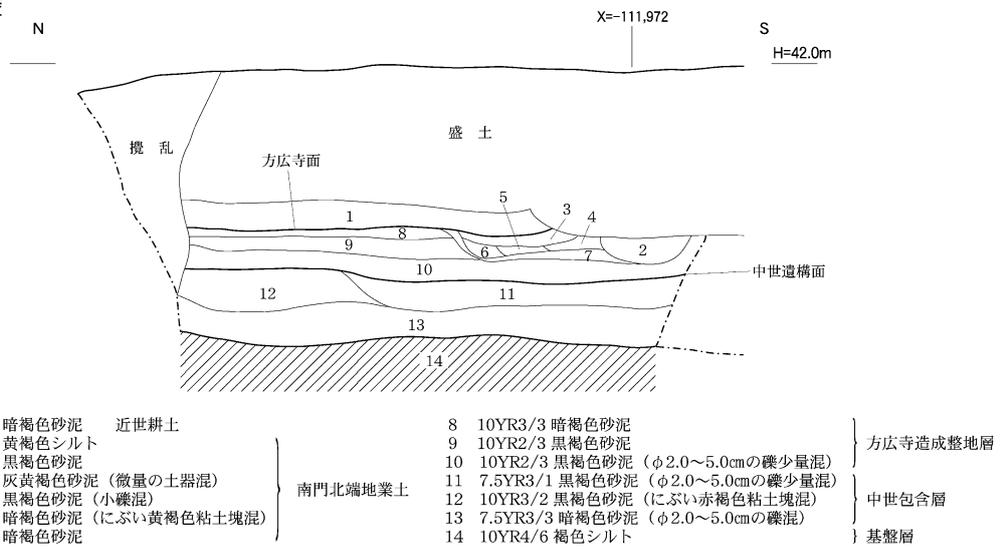
表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代後期	路面120a	最下層路面。
	溝150・270	道路の東西側溝。
	門1	道路西側邸宅の棟門。
鎌倉時代～ 室町時代	路面120b	路面120aをやや東へずらした南北道路。
	溝195・223	道路の東西側溝。
	柱列3	道路西側敷地を南北に分割した北側宅地の南限。
	溝156	道路西側敷地を南北に分割した南側宅地の北限。
	門2	北側宅地の棟門。
	埋納遺構193	柱列3の柱間に埋納された瓦質土器鍋による地鎮。
	土坑28	路面120bの東で検出した東西方向の土坑。
	土坑147	瓦質土器鍋を埋納した路面120b内の土坑。
	土坑173	15世紀の土器類が大量に出土。
	井戸91	路面120bの東側の宅地に付属する円形素掘り井戸。
	井戸93	井戸91に東肩を壊された方形縦板横棧組井戸。
	堀322	東大路通沿いで検出した南北方向の堀。
桃山時代～ 江戸時代前期	南門北端地業	南門の北側雨落ち溝の地業か？
	南回廊根石	既調査成果からさらに東へ4間分検出。
	伽藍造成整地	伽藍地を平坦に造成するための整地層。旧谷地形を埋め立てる。
	溝43・92	造成整地に伴う排水溝。整地後に埋め立てられる。
	路面120c・d	路面120bの位置を踏襲して設置された礫敷きの資材搬入路。
	溝110・140	路面120cに伴う東西側溝。路面拡張のためすぐに埋められる。
	土坑42	井戸91上で検出した不整土坑。鑄造関係遺物を包含。
	土坑321	東大路通り沿いで検出した不整土坑。
南面石塁地業	南門石塁の裏込め地業。石仏などの石造物を多量に包含。	
江戸時代後期～ 明治時代	柵4・5	方広寺跡を区画する柵。恭明宮関係か？
	溝6・7	恭明宮関係の柵か？
	溝82	方広寺跡を区画する溝。恭明宮関係か？
	溝63・64	旧帝国博物館時代の溝か？
	溝103	恭明宮関係の柵か？
	窯41	京焼関係の窯。
	井戸104	近代の漆喰井戸。
	土坑86	窯41関係の炭廃棄土坑。
土坑107	近代の不整土坑。	

10-3 区東壁



10-1 区東壁



10-2 区東壁

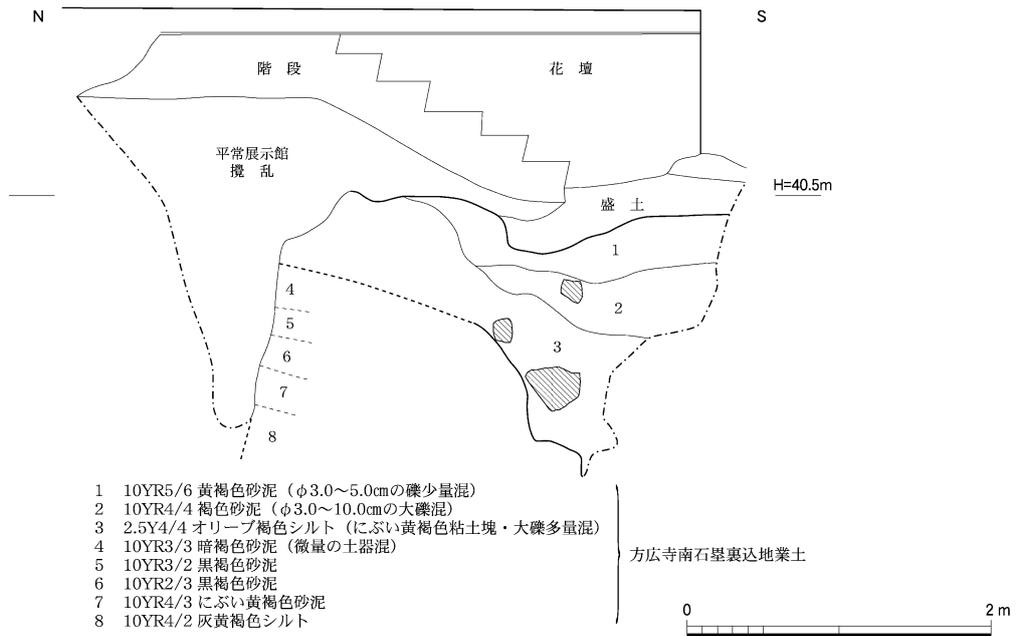


図 10 10-1~3 区東壁断面図 (1:50)

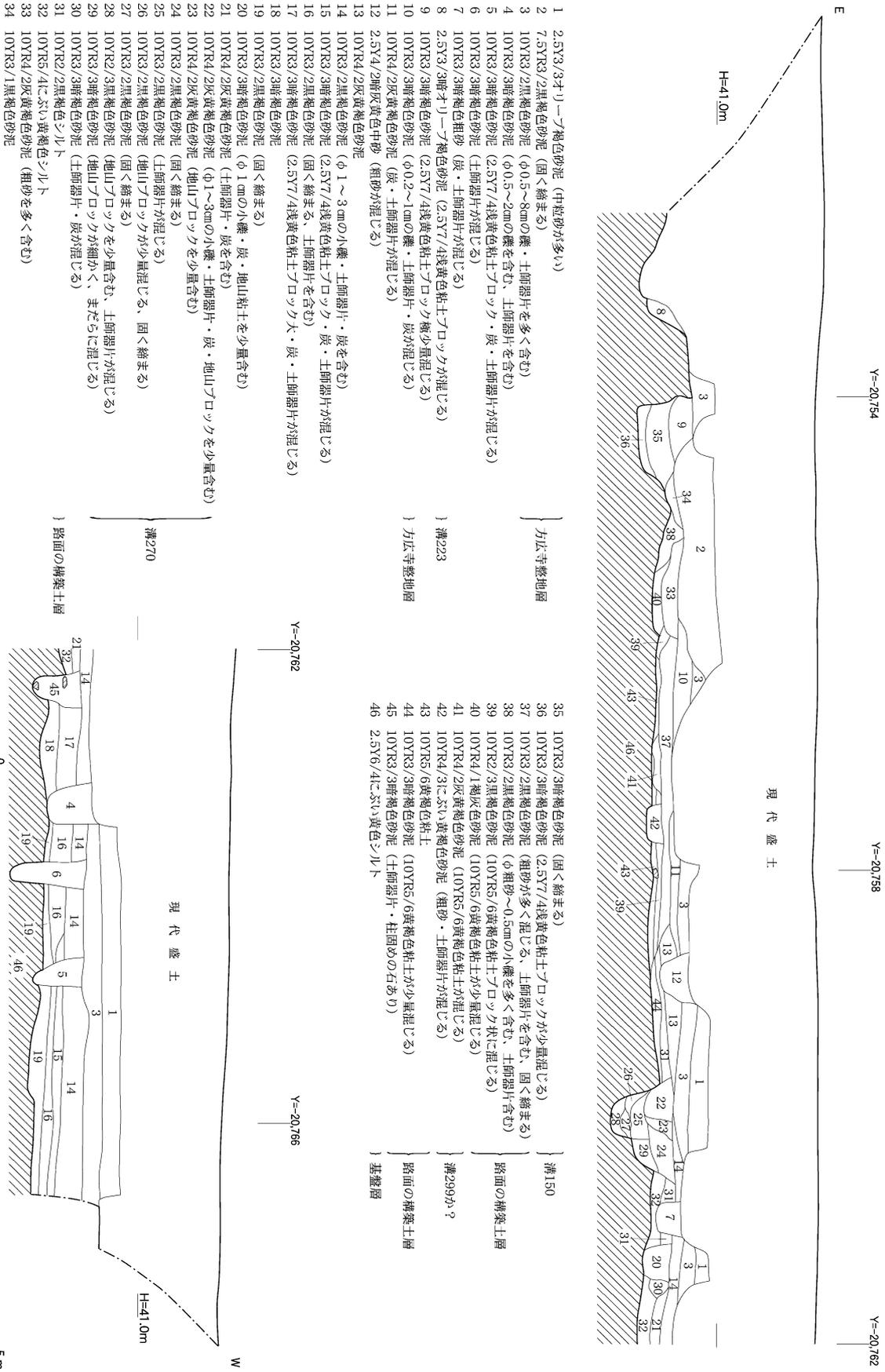


図 11 11-1 区 区画図 (1:50)

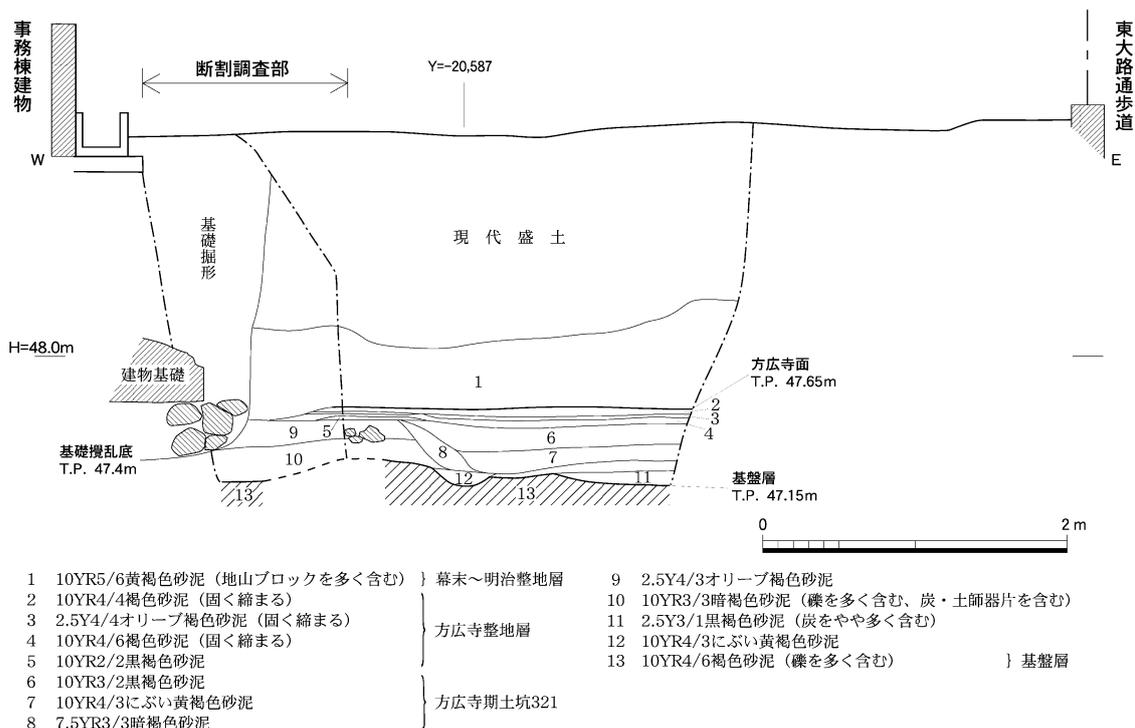


図 12 11- 2区北壁断面図 (1 : 50)

壤化層が約 0.2 m 堆積しており、方広寺整地層上面は地表下で約 1.1 m、標高 40.9 m で確認した。この地点では方広寺造成による整地層が厚さ約 0.3 m、中世包含層が約 0.4 m 堆積しており、基盤層である褐色粘質土の標高は 40.2 m であった。また、11- 1 区南壁では東西方向の堆積状況を観察でき、方広寺整地層（オリーブ褐色～黒褐色砂泥）は 10- 1 区東壁と同様に 0.2 ～ 0.3 m の厚さで堆積していた。基盤層であるにぶい黄褐色粘質土は東から西へ緩やかに傾斜しており、調査区東端部では整地層直下で基盤層もしくは下層路面構築土となり、調査区西半では方広寺整地層下に中世の遺物包含層（褐色～暗褐色砂泥）が遺構面をもって 0.3 ～ 0.4 m の厚さで堆積する。基盤層の標高は、11- 1 区東端部で 40.8 m、11- 1 区西端部で 40.1 m である。

これに対し、石塁裏込めにあたる 10-5 区中央部では、標高 40.7m で裏込め上面を確認しているが、盛土が厚く基盤層は確認できていない。西に隣接する 10-2 区東壁の断面でも裏込め上面は標高 40.5m で、北側攪乱部を標高 39.0m まで掘り下げたが基盤層を確認できなかった。これらの地点は南面回廊の中心部やや西寄りに相当し、当地点では石塁裏込め地業が 1.5 m 以上の厚さで行われたと想定できる。ちなみに、平成 10 年度の 3 次調査において、当地点から西へ約 50m の地点で石塁裏込めの断ち割り調査を行い、裏込め地業の厚さが約 2.5m であることを明らかにしている。

次に、東大路沿いの 11- 2 区の基本層序と遺構を概観したい。11- 2 区では現代盛土が 1.3 m 前後で、その下に博物館造成に関わる整地土が約 0.5 m 堆積しており、方広寺期と考えられる堅く締まった面を地表下約 1.8 m、標高 47.65 m で検出した。この整地面は 3 ～ 4 層に分かれる薄い水平堆積層で形成されており、その下に約 0.15 m の厚さでオリーブ褐色砂泥（整地土）が堆積し、標高 47.4 ～ 47.45 m で室町時代後期の遺構面となる。この遺構面は保存することとなったため調査はここまでとなったが、調査区北端の断ち割り調査によって、整地土下に中世包含層である暗

褐色砂泥が0.1～0.2mの厚さで堆積し、標高47.2mで礫を多く含む褐色砂泥の基盤層となることを確認した。

(2) 平安時代後期の遺構

平安時代後期の遺構は、11-1区の最下層(第5面)において南北方向の道路および両側溝、道路の西側に接して建てられた門などを検出した。なお、後述する中世の遺構も含めて、下層遺構は10-1・3区まで拡がると想定できるが、方広寺期の遺構保存のため調査を行っていない。

路面120a(図13、図版1) 11-1区の最下層で検出した道路遺構である。路幅は4.5～4.8mで、西に傾斜する基盤層上に黒褐色砂泥や暗褐色砂泥などを叩き締めて平坦な路面を形成する。路面上には一部礫が面を揃えて敷かれた痕跡が残されており、礫敷き道路であった可能性がある。また、路面中央では構築土下で幅約0.3m、深さ約0.2mの小溝(溝299)を検出した。北半部では直線的で道路施工の計画溝とも考えられるが、調査区南端では2条に分かれ若干湾曲する。

溝270 道路の西側溝と考えられる南北溝である。幅0.6～0.8m、深さ0.4～0.5mで、溝底部の標高は40.1mで、北端と南端の標高差がほとんどない。

溝150 11-1区南東部で検出した南北溝である。幅約0.8m、深さは0.45～0.55mで、規模や埋土が溝270と類似している。埋土中より12世紀の土師器皿が完形で出土しており、当期の道路東側溝と考えられる。溝底部の標高は南端で40.35mである。

門1(図15、図版1) 溝270の西で検出した南北に並ぶ2基の柱穴(柱穴281・282)である。柱掘形の形状は長径約0.7mの不整円形で、柱穴281には南側に、柱穴282は北側に段を設ける。柱の深さは柱穴281で約1m、柱穴282で約0.9mと規模が等しく、柱281の底部に直径約0.25mの柱当たり痕跡が残る。また、柱穴282の底部には東西方向の礎板が据えられており、柱当たり痕跡から礎板までの距離は約4.2mである。埋土は灰白色粘土を細かいブロック状に包含した黒褐色砂泥で、固く締まっていた。

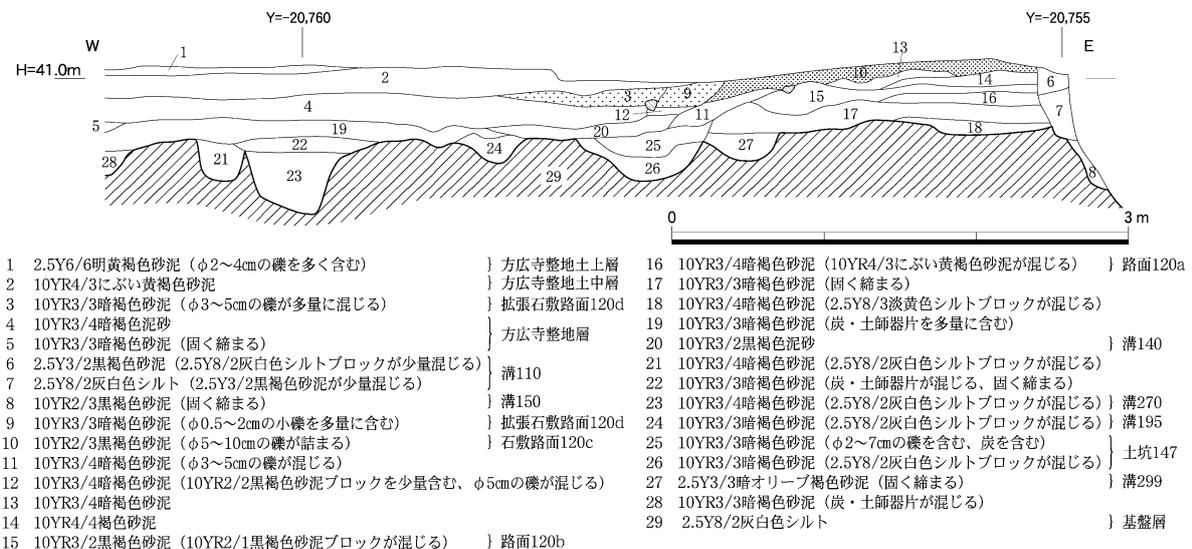


図13 11-1区基礎攪乱北壁 路面120断面図(1:50)

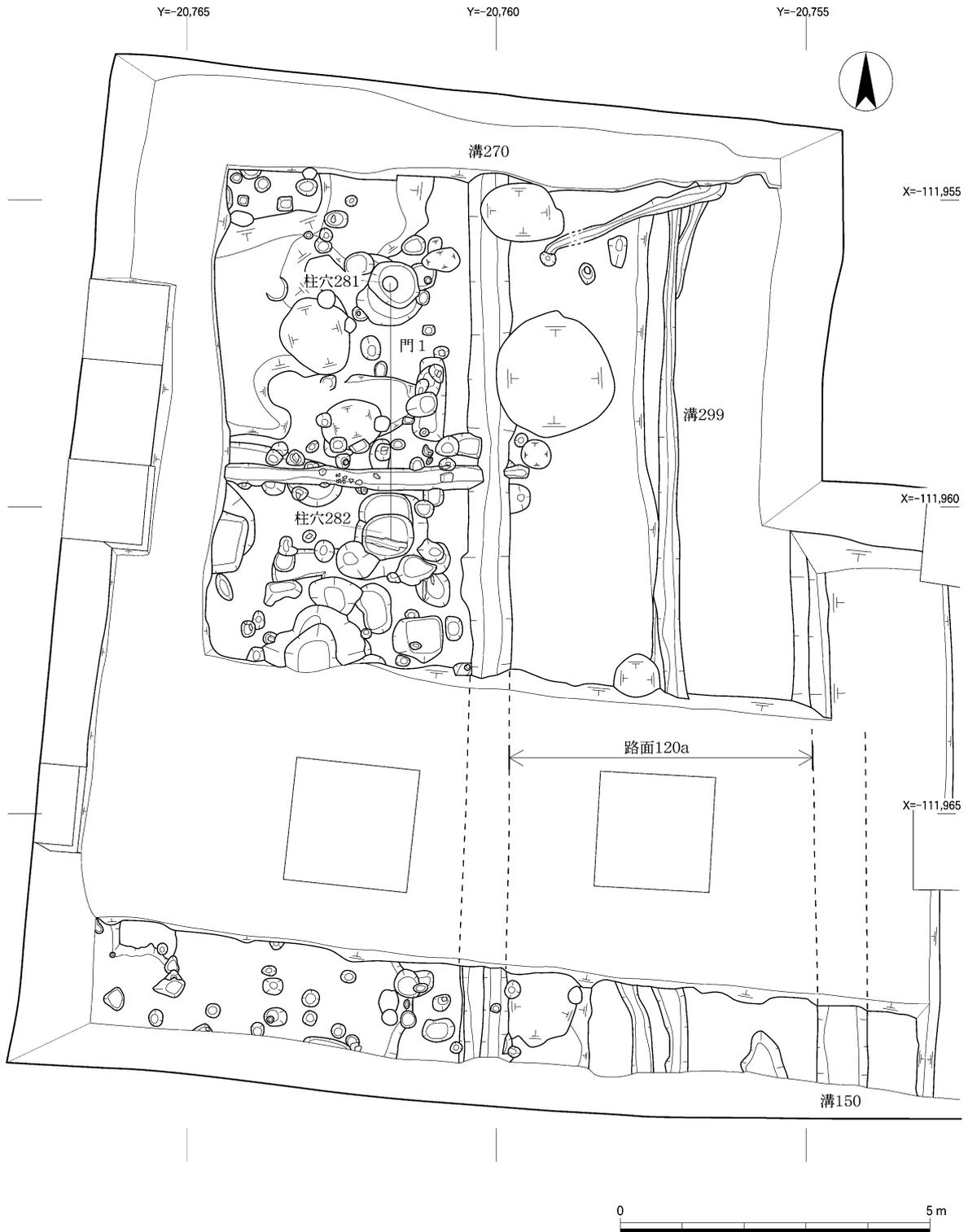


图 14 11-1区第5面平面图 (1:100)

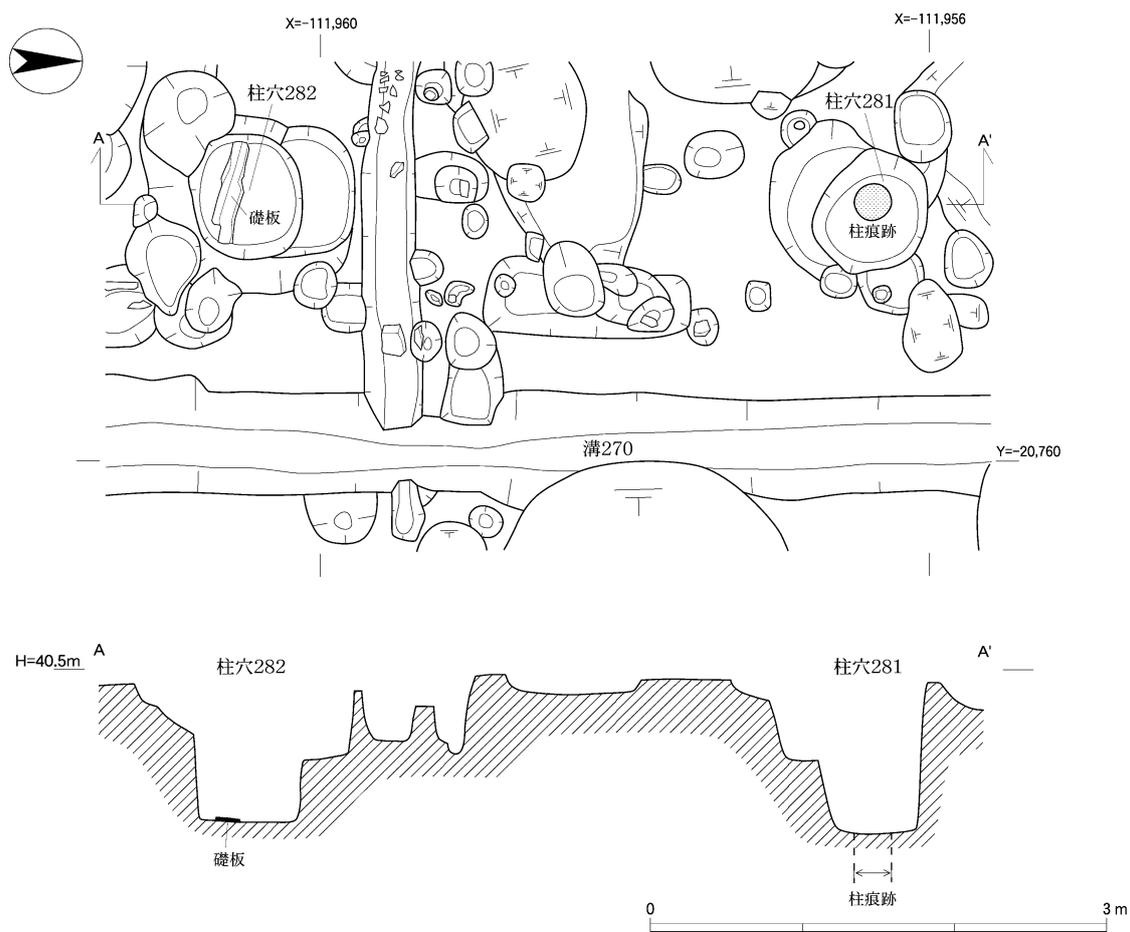


図 15 門1実測図 (1:50)

(3) 鎌倉時代から室町時代の遺構

当該期の遺構は、11-1区の第4面で平安時代後期から継続する道路遺構とその西側に展開する柱穴群や土坑などを検出した。道路遺構の西側では、第5面で検出した掘り残しの遺構も含めて根石をもつ柱穴などを多く確認したが、土取穴と考えられる西側への攪乱が激しく建物として復元できる状況ではなかった。また、道路遺構の東では10-3区の方広寺整地層下で井戸2基と土坑を1基検出した。なお、11-2区では南北方向の堀を検出している。

路面 120b (図 13) 11-1区で検出した道路遺構である。溝 270 の東約 0.8 m の地点で新たに西側溝 (溝 195) が掘削され、路面が若干東に移動したと考えられる。路面 120a の上に黒褐色砂泥や暗褐色砂泥を約 0.1 m ほど盛り上げて路面を構成していた。東側溝は明らかでないが、溝 195 と埋土・規模が類似する南北溝 (溝 223) を調査区南東隅で検出しており、この溝 223 を東側溝とするなら路面幅は約 5.2 m となる。

溝 195・223 溝 195 は 11-1区中央で検出した、幅 0.4 m 前後、深さ約 0.2 m の浅い南北溝である。北に対して東へ若干振っており、底部標高は 40.45 m 前後で、傾斜はほとんどない。埋土は暗褐色砂泥である。溝 223 は 11-1区南東隅で検出した南北溝の西肩部である。東半が攪乱で壊されているため不明だが、底部の標高は 40.4 m であり溝 195 と同規模程度であろう。埋土

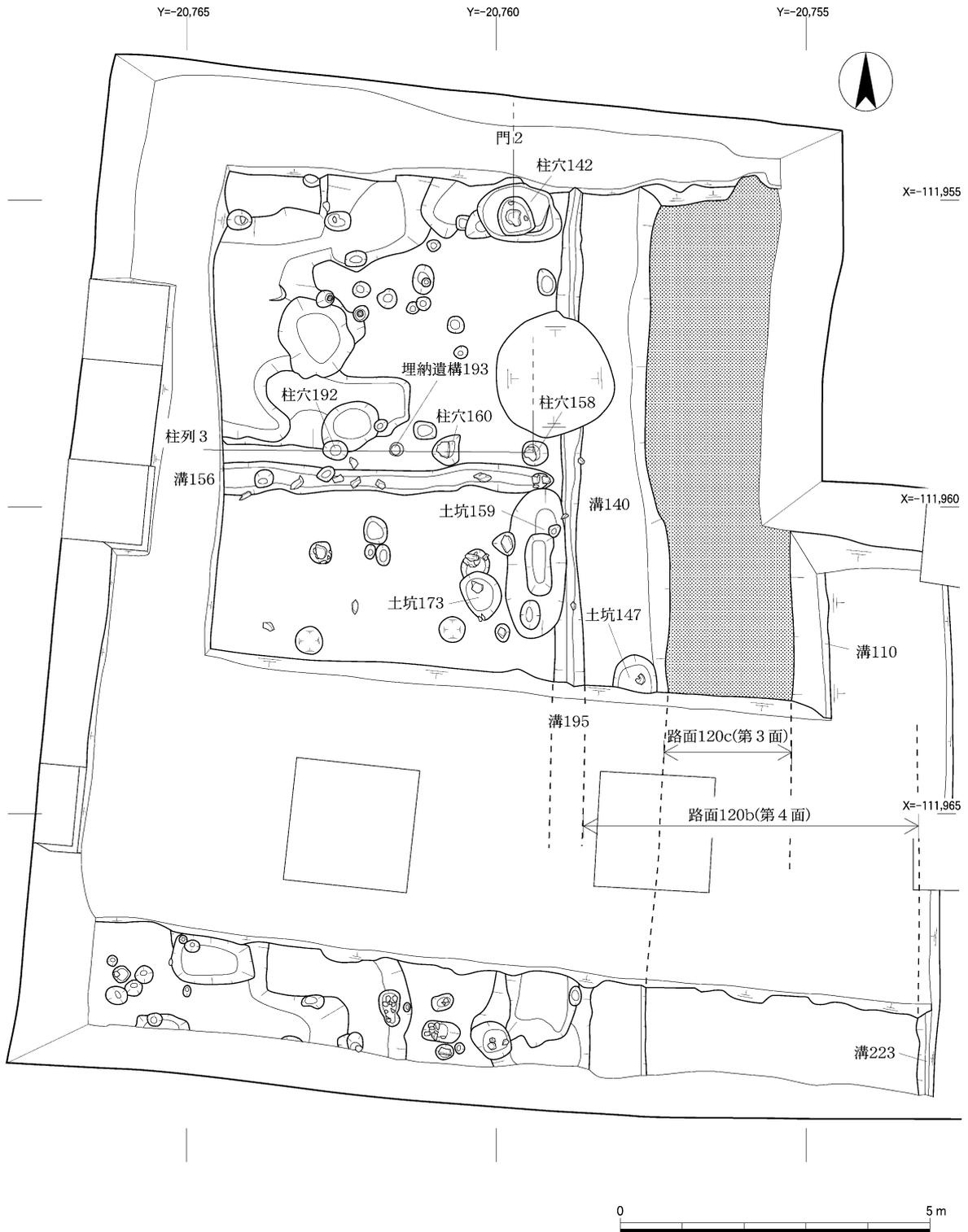


図16 11-1区第3・4面平面図(1:100)

の土質も溝 195 と類似するが、位置的に 10- 4 区で検出した溝 64 の下層溝の可能性はある。

柱列 3 (図版 3) 溝 195 に直交して西へ延長する東西方向の柱列である。直径約 0.4m のピットを 3 基(柱穴 158・160・192)検出しており、柱穴 158 と柱穴 160 の底部には長辺 0.25 ～ 0.3m の根石を据えていた。柱間は柱穴 158・160 間が約 1.5m、柱穴 160・198 間が約 1.8m と同一でない。また、柱穴 160 と柱穴 198 の中間には、後述する埋納遺構 193 が設けられていた。柱列の位置は X=-111,959 ライン上で、柱穴 158 で北に曲がって宅地の南東隅を区画する施設と考えている。

溝 156・土坑 159 (図版 3) 溝 156 は柱列 3 の南に接して検出した東西方向の布掘り遺構である。幅は 0.4 m 前後で、底部に据えられた根石が一部残存していた。柱列 3 と溝 156 は第 5 面で検出した門 1 の柱間南寄りに位置しており、平安時代後期の邸宅が門 1 の場所で、この時期に南北の宅地に 2 分割されたことを示している。また、東端部の南に接して、南北約 2.3 m、幅約 1 m の南北方向に長い土坑 159 を検出しており、南の宅地の北東隅を意識して掘削された土坑と考えられる。ただ、土坑 159 は道路西側溝である溝 195 を切っており、宅地東限がやや道路側に拡がった段階に形成された遺構である。

門 2 (図版 2) 11- 1 区北端で検出した根石をもつ大型の柱穴である。東西約 1.3 m、南北約 1 m の掘形底部を、長径約 0.6 m の不整形円形に掘り下げ、長辺約 0.3 m の根石を据えていた。検出面からの深さは約 0.6 m である。対応する柱穴が調査区内で検出できないため、北側対になる柱穴が存在すると考えられる。道路西側溝と想定する溝 195 に接して設置されていることから、北側宅地の棟門の南側柱であろう。

埋納遺構 193 (図 17、図版 3) 柱列 3 の柱穴 160・192 間で検出した、宅地内整地に伴う地鎮遺構である。瓦質土器の鍋を合わせ口で埋納した遺構で、掘形がなく整地と同時に埋納された

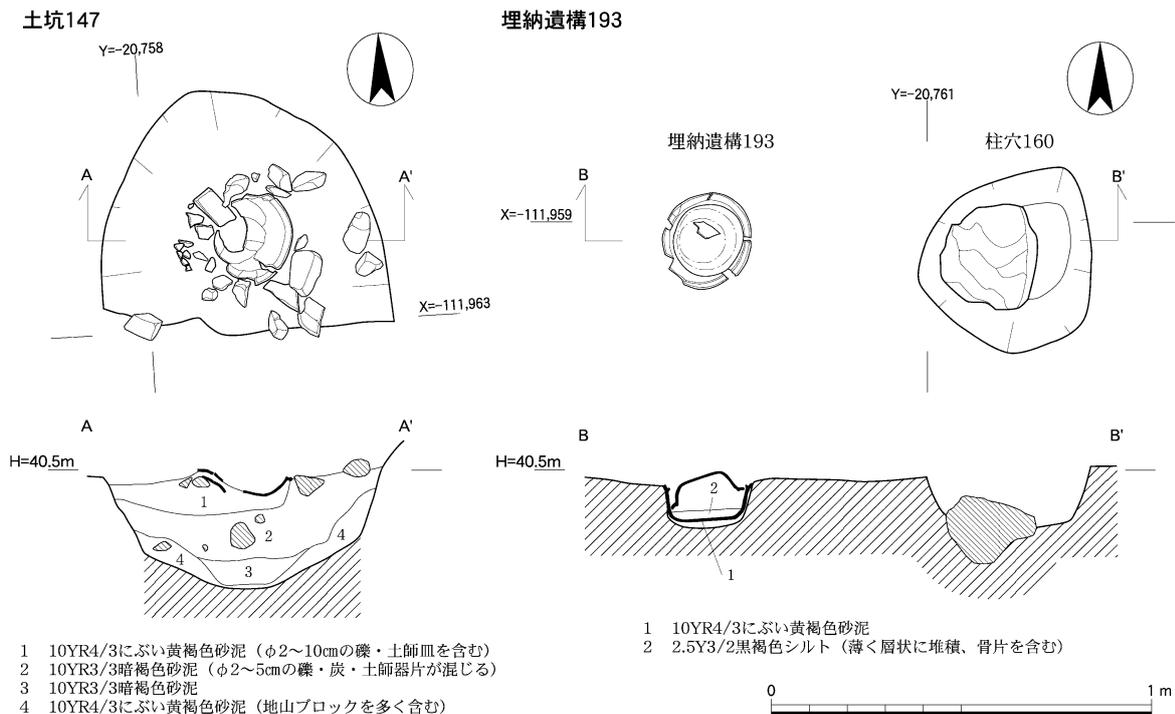


図 17 土坑 147・埋納遺構 193 実測図 (1 : 20)

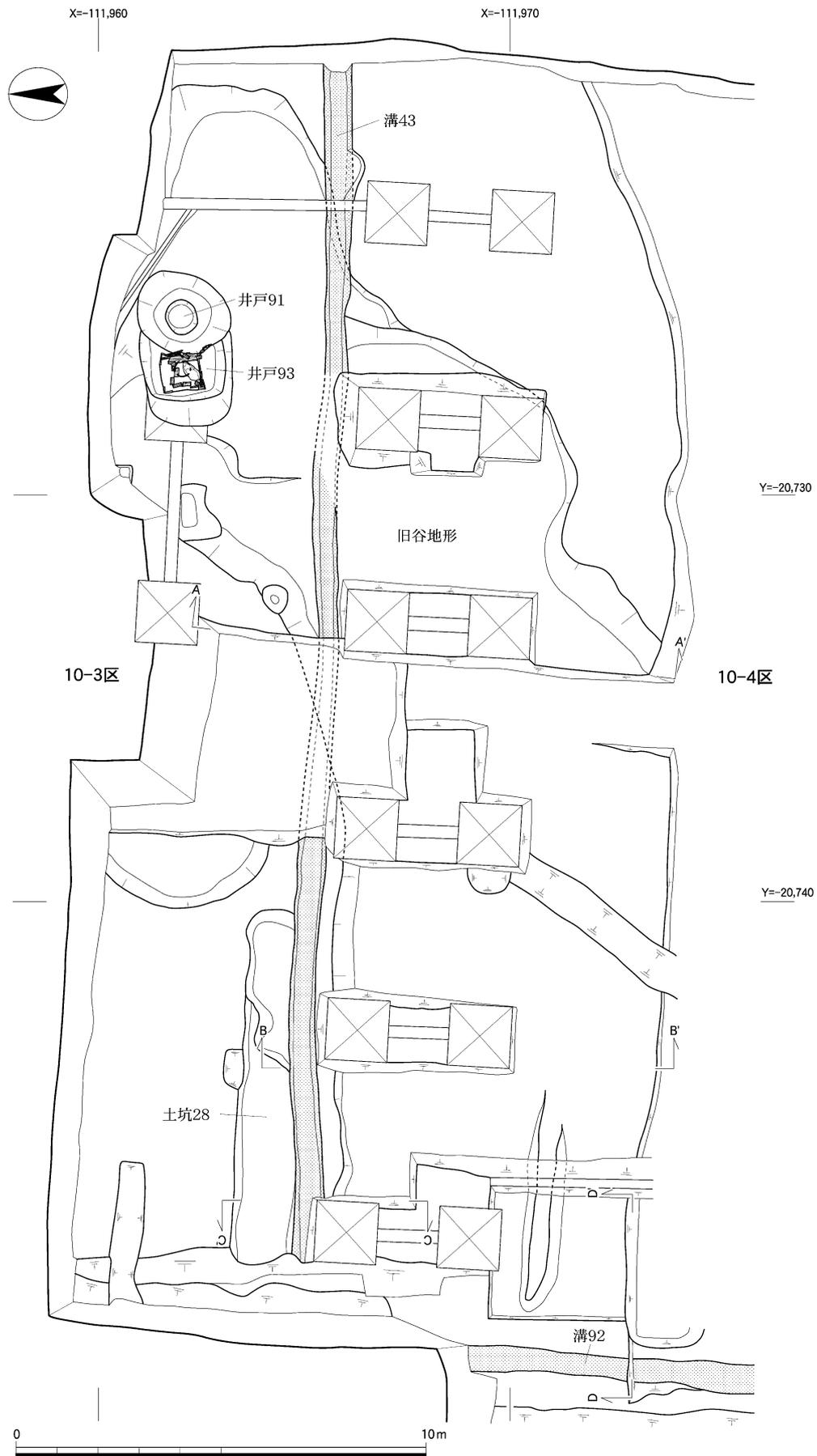


图 18 10-3区下層遺構平面图 (1 : 150)

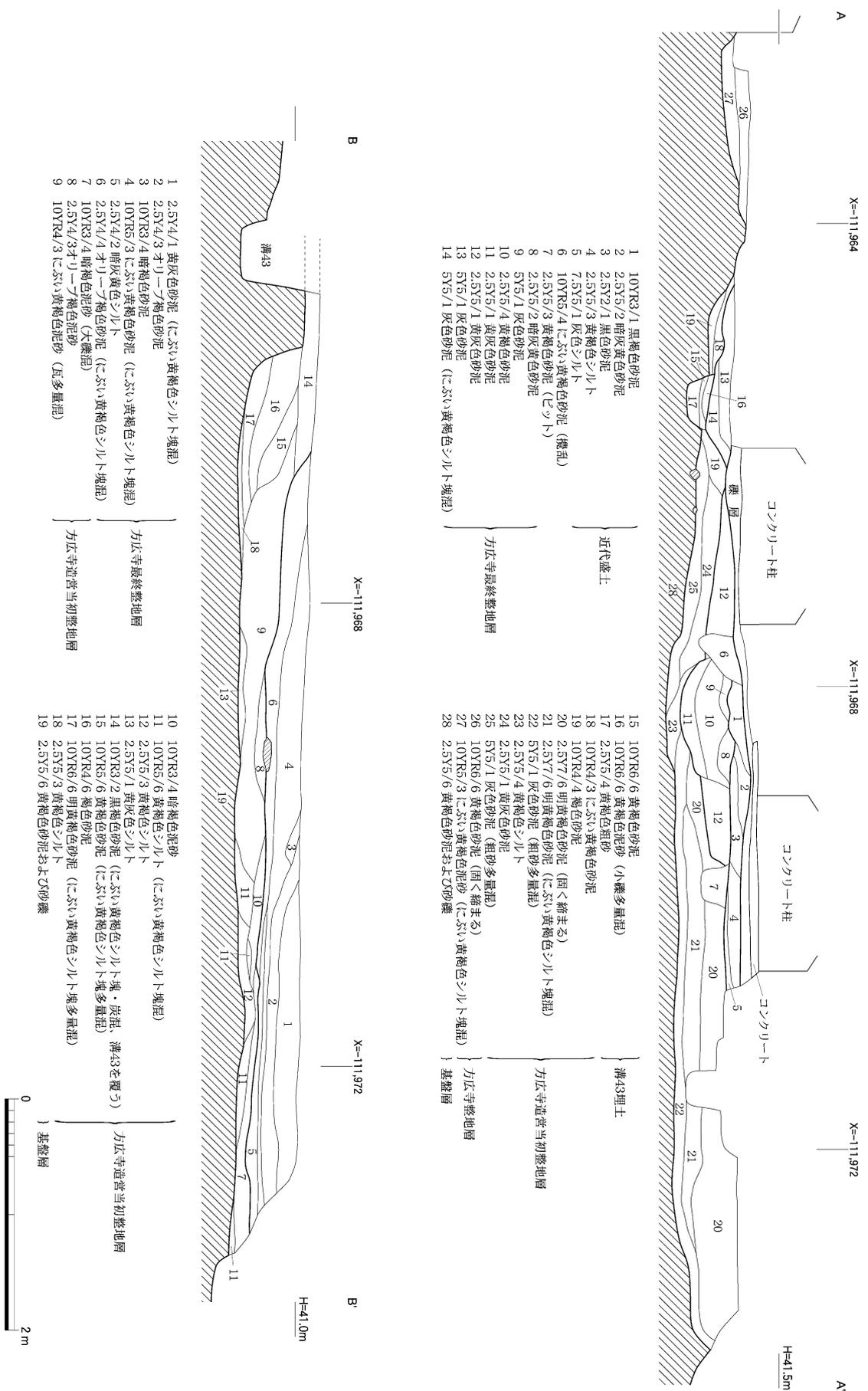


図19 10-3区 A-A'ラインおよびB-B'ライン整地層断面図 (1:50)

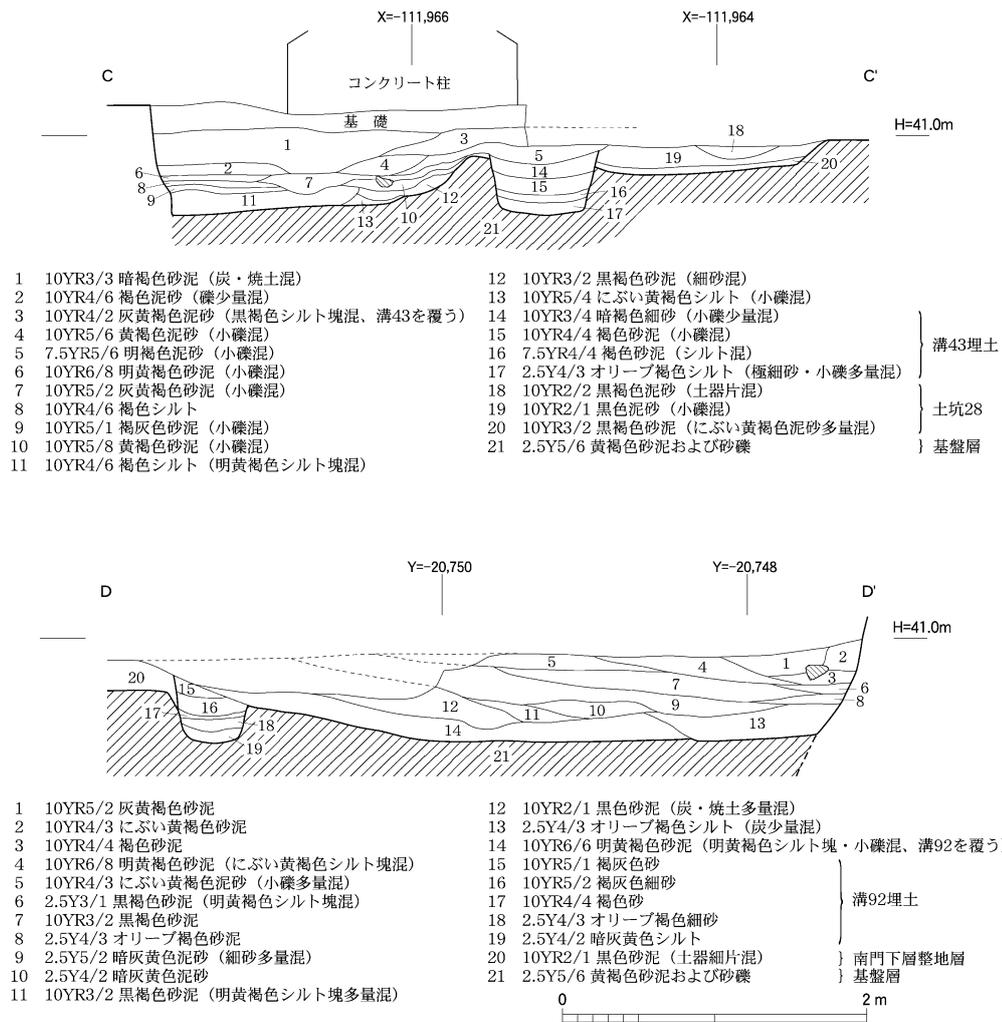


図20 10-3区 C-C'ラインおよびD-D'ライン整地層断面図 (1:50)

ようである。中は空洞になっており黒褐色シルトが底に薄く層状に堆積していた。黒褐色シルト内からは遺物は出土しなかったが、細かい骨片が出土している。

土坑28 (図版8) 10-3区西半で検出した東西方向の浅い溝状の土坑である。東は Y=-20,740 ラインで途切れ、西は調査区外に延長する。南肩部は方広寺整地に伴う水切溝43に壊されているが、最大で1.5mほどに復元でき、深さは0.2m弱である。埋土は炭を多く含む暗褐色砂泥で、底部に灰黄褐色泥砂が薄く堆積する。出土土器は小片化したものが多い。

土坑147 (図17、図版2) 11-1区溝195東の路面側で検出した土坑である。南半部は基礎の攪乱で壊されているが、直径約0.8mの不整円形で、深さは検出面から約0.3mである。上層の中心部には、礫群とともに瓦質土器鍋がやや傾きながらも正置に据えられていた。地鎮に関連する遺構と考えられるが、上層は後述する溝140によって削られており、位置的に路面120bに伴う遺構となる。あるいは、土坑159が道路西側南半の宅地が道路側に拡がった段階の土坑と考えられることから、この宅地との関係も十分想定できる。

土坑173 11-1区土坑159の南西で検出した土坑である。南北約0.8m、東西約0.6m、深さ0.1m弱の浅い土坑であるが、土師器皿が多量に出土した。埋土は炭を多量に含む黒褐色砂泥である。

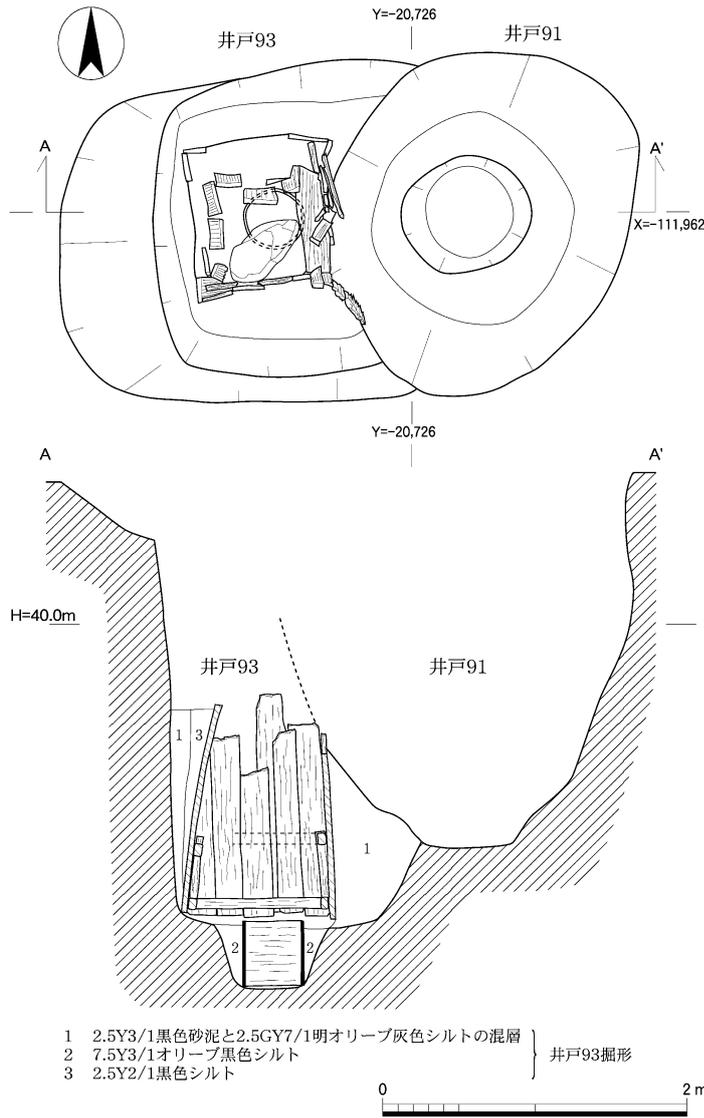


図 21 井戸 91・93 実測図 (1 : 50)

井戸 91 (図 21、図版 5) 10- 3 区東半で検出した円形素掘り井戸である。南北道路の東側溝と考えられる溝 223 から、東へ約 28 m の位置にある。検出面での直径は約 2.2 m で、遺構面からの深さ約 2.5 m、底部に直径 0.8 m 前後の窪みを設ける。底部標高は 38.5 m であった。後述する井戸 93 を切って成立する。なお、井戸内から鳥類と考えられる骨片とヒユ属の種実が出土している。

井戸 93 (図 21、図版 5) 井戸 91 に東辺を壊された方形縦板組井戸である。廃棄時に大きな石を 2 個井戸枠内に沈めている。掘形は方形で一辺約 2 m、井戸枠の一辺は約 0.9 m で、横棧を組み上げて縦板を止める構造をもつが、横棧は最下部を残して崩壊し縦板が内側に倒れ込んでいた。底部には高さ約 0.45 m の曲物を据えており、底部標高は 37.6 m である。最下層から

二枚貝と巻貝が出土したが、細破片化しており種類は判定できなかった。なお、井戸枠材は板葺き屋根材などの建築部材を再利用しており、屋根組に固定するための釘が板材に打ち込まれた状態で残されていた。溝 223 から東へ約 26 m の位置にある。

堀 322 (図版 11) 11- 2 区西端で検出した南北方向の堀である。検出したのは東肩のみで、西肩は調査区外となるため規模は明らかでない。X=-111,952 ラインから北には延びず、北端上半部には長辺 0.2 ~ 0.4 m の石を積んで護岸しており、石積みの下層には堀の埋土とは異なるにぶい黄褐色~褐色砂混シルトが堆積していた。また、埋土中からも東から流れ落ちたと考えられる同規模の石が数個出土したが、東肩には護岸は伴わない。堀底部の標高は南端で 46.85 m、北端で 46.75 m で北へ緩やかに傾斜しており、北端部で西へ曲がると推定できる。北端の護岸石積みは水の流れによる浸食を防ぐため、砂混シルト堆積後に新たに設置されたと考えられる。ただ、遺構保存のため断ち割り調査を行っておらず、石積み護岸の構築過程は不明である。

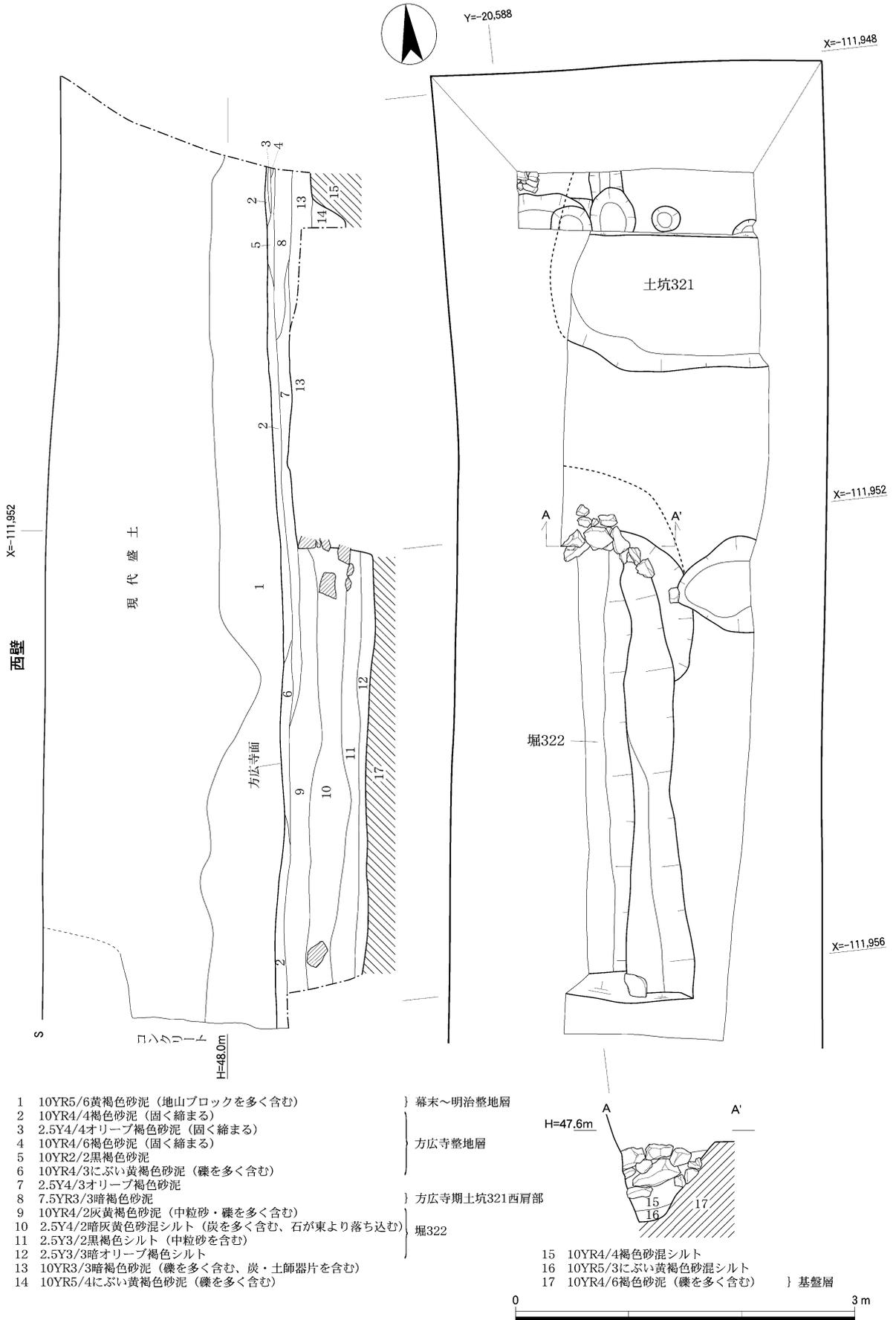


図 22 11- 2 区実測図 (1 : 50)

(4) 桃山時代から江戸時代初頭の遺構

10次調査区において、方広寺南門の北辺布掘り地業と南回廊の東延長部を検出し、石塁裏込め地業の遺存範囲を確認した。また、南門・回廊の基盤となる整地層の堆積状況を検討し、方広寺南端部における盛土造成の実態を明らかにするとともに、11-1区の第2・3面において造営時の資材搬入路と想定できる道路を検出した。なお、過去の調査で検出した南門や回廊との位置関係を確認するため、3-1区および9-2区と重複して調査区を設定し、南門と南回廊の北側柱の根石群を再発掘している。東大路通沿いでは、11-2区で固く締まった方広寺整地面を良好な状態で確認した。

南門(図24、巻頭図版1、図版6・8) 3次調査で全面発掘していた八脚門構造の南門の北柱列を再検出している。礎石は残存しないが、礫を多量に充填した直径約1.8mの壺掘り地業を行っており、従来の所見とおり桁行柱間は中央一間が約6m、両脇が3.8m前後に復元できる。

南門北端地業(図24、巻頭図版1、図版8) 10-1区と10-4区西端部において東西方向の浅い溝状の地業痕跡を確認した。幅約1.5mで、南門北側柱の壺掘り地業から約1.5m離れている。埋土は暗褐色から黒褐色の砂泥で、南肩部には意図的に黄褐色粘質土が埋められた部分も確認できる。地業内および周囲には帯状に花崗岩が分布しており、南門北端の雨落溝の石を据えた布掘り地業の痕跡と考えている。

南回廊(図25、巻頭図版2、図版6・7) 以前の調査で複廊だったことが判明しているが、10-4区東端部で新たに北側柱根石群を2箇所、中央柱根石群を4箇所で見出した。礎石根石は直径約1m、深いもので約0.3mしか遺存しておらず、中央柱列の東端2箇所の根石は最下層の痕跡しか残っていなかった。上部を大きく削られているが、拳大の礫群を多く含む灰黄褐色砂泥やオリブ褐色泥砂などで、版築状に突き詰めた構造である。桁行の柱間は以前の調査所見と同様に3.75mで割り付けられていることが確認できるが、梁間は今回総合的に計測し直した結果、柱間は3.6～3.7mとなる可能性が高い。

伽藍造成整地(図18～20) 回廊内における土地造成の痕跡を10-1・3・4区と11-1区で検出した。とくに、10-3区東端から南西にかけて基盤層と整地層との境界を確認し、ここから西側は広く整地を施して平坦地を形成する。整地層は小さな谷地形となる窪み部分を、基盤土を含む黄灰色～黄褐色砂泥あるいは黒褐色砂泥などによって固く締めている。旧谷地形の北肩部では立ち上がり直線的で急になっていることから、意図的に脆弱な土を取り除いて整地を行ったようである。また、後述する溝92の東西で整地土が全く異なっており、堆積状況から溝92の西側を先に造成し、後に東側の整地を行っていることが判明した。これは南門部分の下層に後述する路面120c・dがあり、大仏殿への資材搬入路を確保するために先に造成が行われたためと考えられる。南門周辺の整地層は黒褐色砂泥が主で中世の土器片を多く包含するが、東の谷部整地層内では瓦がまとまって廃棄される層や、焼土・炭・鉄滓を多量に含む層が混在している。なお、整地には新旧2時期の画期があり、上層整地では検出時に方形区画を呈する整地層が認められた。

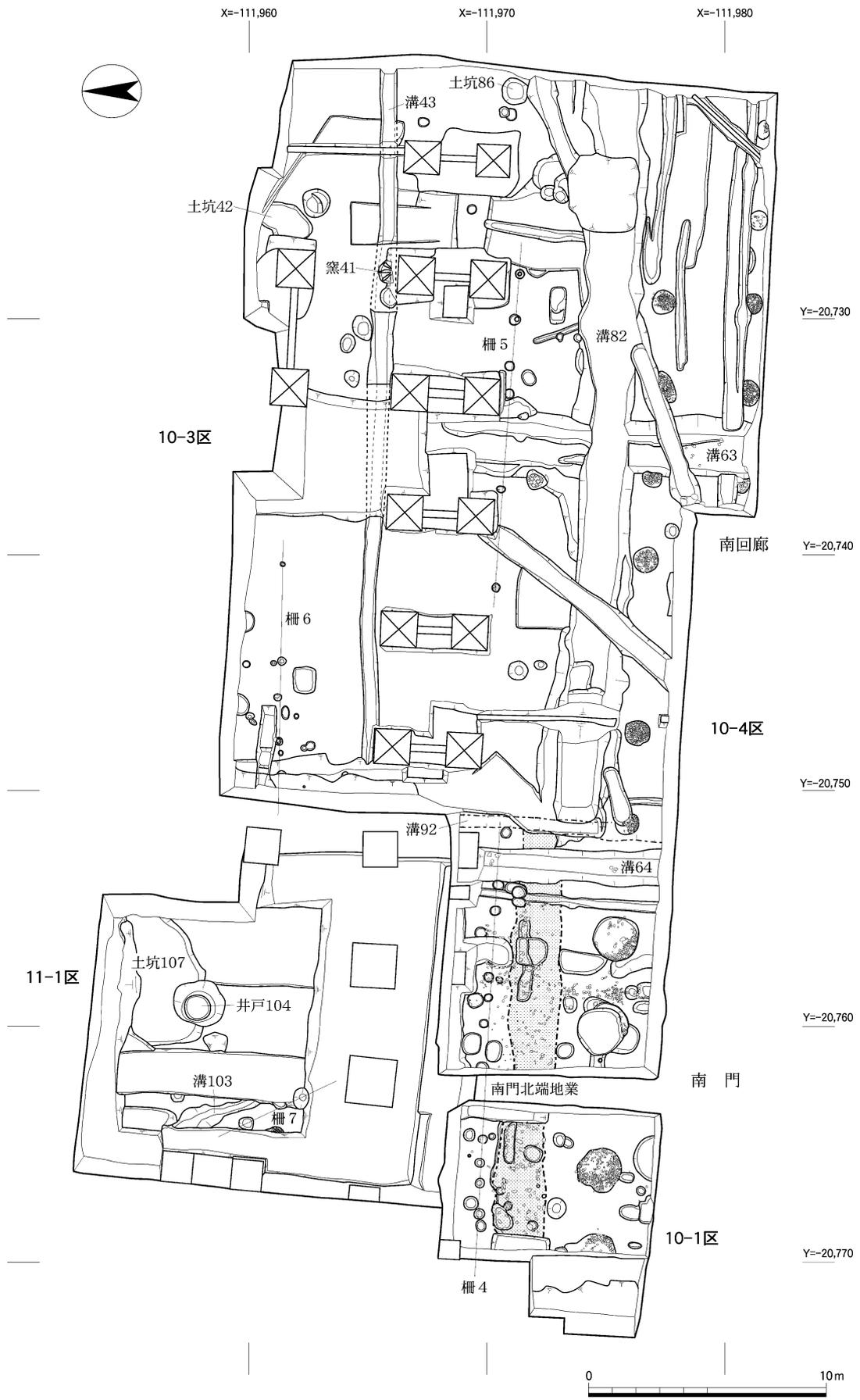


図 23 10-1・3・4区、11-1区遺構配置図 (1 : 250)

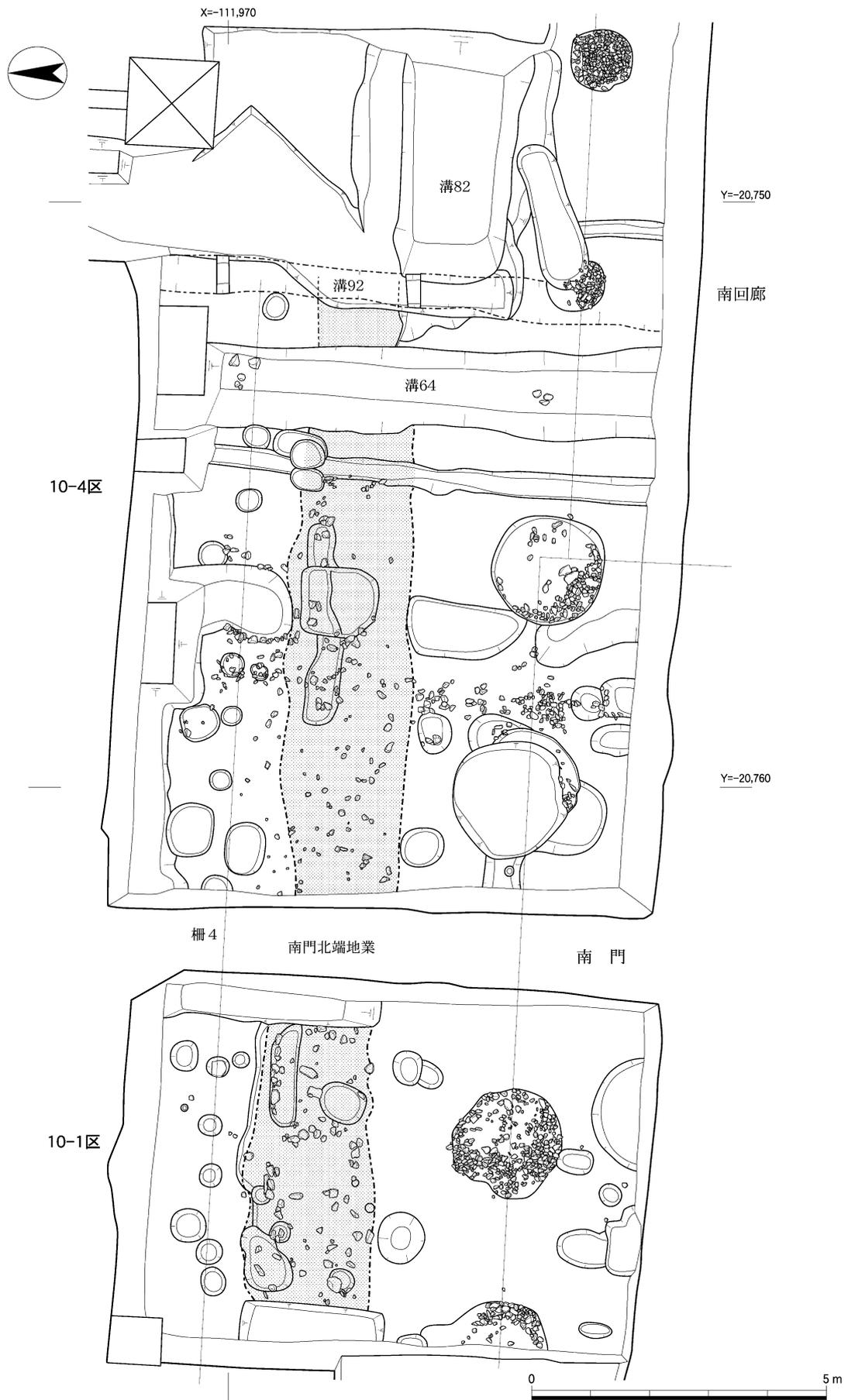


图 24 南門周辺遺構平面図 (1 : 100)

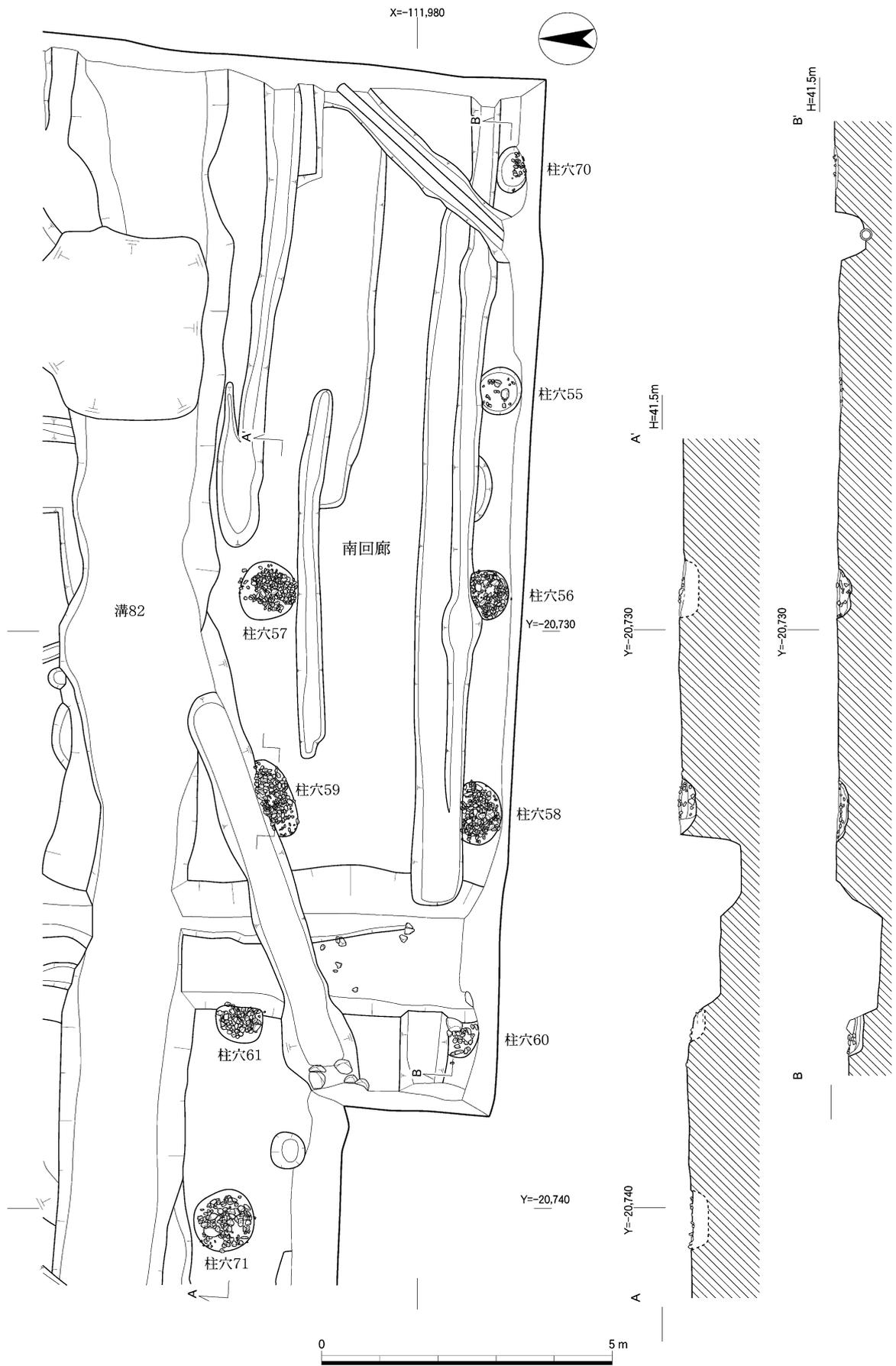


图 25 南回廊实测图 (1 : 100)

溝 43・92 (図 18～20、図版 8) 南門東の整地にあたって、谷部の湧水进行处理するために一時的に穿たれた溝である。溝 43・92 とともに幅 0.5～0.7 m で、断面形態はしっかりした台形を呈する。底部標高をみると、溝 43 の東端で標高 41.0 m、西端で標高 40.5 m、溝 92 は回廊遺構の保存のため一部の断ち割り調査しか行っていないが、北端で標高 40.4 m、中央部で 40.3 m となっている。底部の傾斜から想定して、10-3 区では東西溝 43 を掘って東からの湧水を西へ流し、10-4 区で検出した南北溝 92 に合流させて南へ排水したと考えられる。両溝の下層では、流水の多さを示す砂礫の堆積が認められる。層位的に南門通路部の整地層を切って穿たれ、回廊部の整地層は溝の上層を覆っており、溝の堆積状況からも前述した整地造成の順序を裏付けている。

路面 120c・d・溝 110・140 (図 13・26、図版 3・4) 11-1 区で検出した礫敷き道路遺構である。中世までの道路遺構 120a・b の位置を踏襲するが、第 3 面の路面 120c では路面幅は約 2 m に縮小し、路面上は粗い礫敷き舗装が施される。東側溝は溝 150 とほぼ同じ位置に溝 110 が掘られ、西側溝は幅 1.2～1.3 m、深さ約 0.1 m の浅い溝 140 が溝 195 の東に設けられる。この段階で路面西側ではピットを数基検出しただけで明確な遺構は検出できていないことから、第 4・5 面で確認した宅地は廃絶し、路面の機能だけが強化されたと考えられる。同様に、第 2 面では溝 140 も含めて道路西側が大規模に整地され、石敷き道路が細かい礫で西へ 1.5～2 m 広げられる。第 3 面から第 2 面にかけての路面の石敷き事業は一連の作業工程の中で捉えることが可能であり、方広寺造営に際して従来の道路を利用し大仏殿に向かう南からの資材搬入路とした可能性が高い。

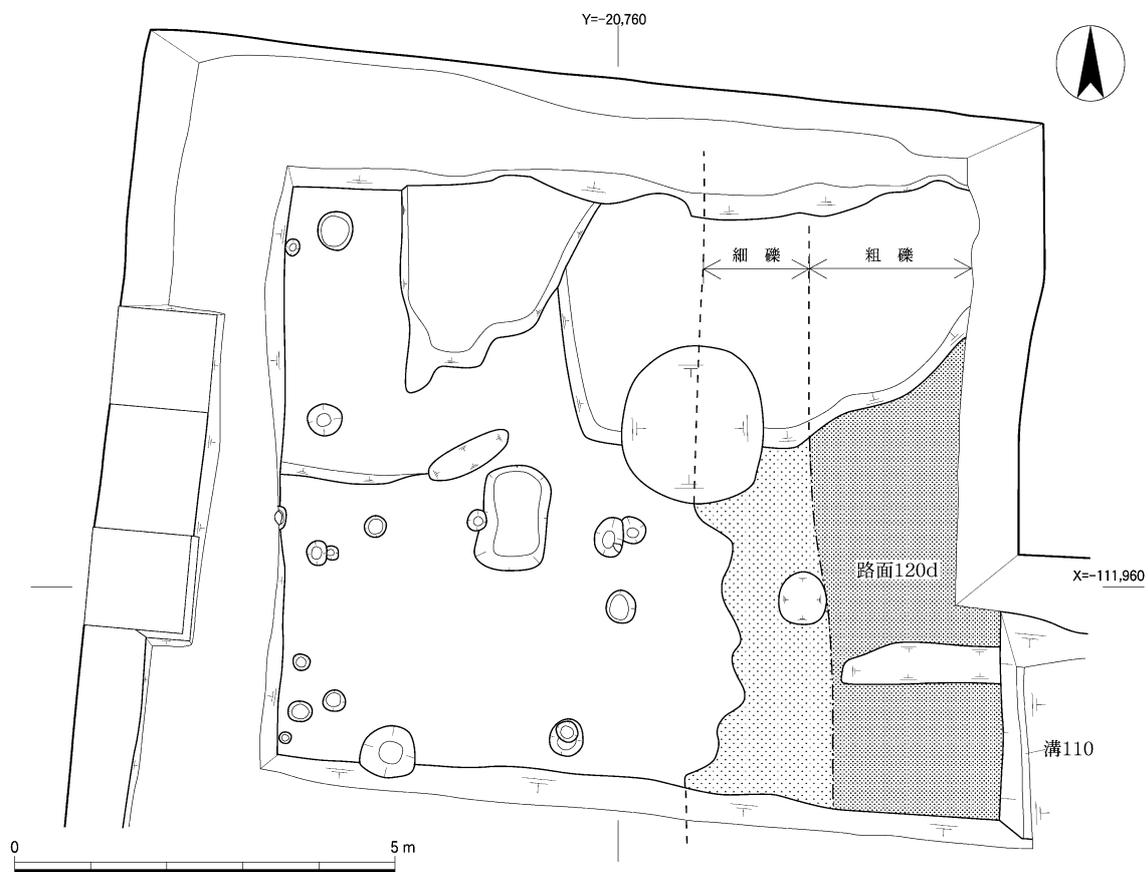


図 26 11-1 区第 2 面 路面 120d 平面図 (1 : 100)



図 27 10- 2 ・ 5 区平面図 (1 : 100)

土坑 42 (図版 9) 10- 3 区東半部で検出した、深さ 0.1 mほどの浅い不整形な落ち込み遺構である。東西約 1.5 m、南北約 2 mの範囲で石とともに大型の炉壁や鋳型片が分布していた。埋土は褐色泥砂で、基盤となる周囲の造成整地層とあまり差が認められず、井戸 91 の直上に位置することから、井戸による窪みを補修造成した可能性が高い。

土坑 321 11- 2 区北端で検出した土坑である。確認したのは土坑の南肩と西肩で深さは約 0.3 m、東および北は調査区外に展開する。堅く締まった方広寺整地面の下層で検出しており、方広寺期の遺物を若干包含する。

南面石塁地業 (図版 10) 10- 2・5 区で検出した南面石塁北側の裏込め地業である。地業は小礫層と大礫層を交互に入れて強固に造成しており、1.5 m以上の盛土を行っている。10- 5 区東端部では南門下層の盛土と裏込め地業の境界を検出し、南門下層の整地の後に石塁裏込め地業を行っている事実を層位的に確認した。なお、礫層の中には石仏や五輪塔などの石造物が多数含まれており、方広寺造営時における石材調達の一側面を示唆している。

(5) 江戸時代後期から明治時代の遺構

幕末から明治時代の遺構は、10- 3・4 区で東西柵、東西溝、南北溝、円形窯を検出している。また、11- 1 区で漆喰井戸や土坑、柵、溝を検出した。

柵 4 10- 1・4 区南門跡の北側で検出した東西柵列である。東端は Y=-20,752 ラインで途切れ、西は 10- 1 区の調査区外へ延長する。柱穴は径 0.4 m前後の円形で、柱間は 1 m前後だが一定ではない。南門北端地業の北側に沿ってほぼ平行しており、東端は推定南門基壇の北東隅にあたる。方広寺の造営の振れと共通していることから、廃絶後の南門基壇跡を避けて設けられた閉鎖施設と考えられる。柱穴内からは棧瓦が出土する。

柵 5 後述する溝 82 の北肩ラインから北へ約 3 mの位置で検出した東西柵列である。総長約 13.5 m分を検出し、東端は Y=-20,728 ライン、西端は Y=-20,741.5 ラインで途切れる。柱穴は径 0.3 ~ 0.4 mの円形で、柱間は一部 1 mだが 2 mに復元できる。柵 1 と同じく方広寺の造営の振れと共通し、柵 2 の西への延長ラインは柵 1 から北側へ 1 mずれている。柱穴内からは棧瓦が出土する。

柵 6 10- 3 区西半で検出した東西柵列である。東端は Y=-20,740 ラインの西側で途切れ、西は調査区外へ延長する。柱穴は径 0.2 ~ 0.3 mの円形で、柱間は一定ではない。柱内に石と棧瓦で柱を固定した痕跡が残るものがある。柵 1・2 と比較して振れは小さく、時期が若干異なる可能性がある。

柵 7 11- 1 区西端で検出した斜行する柵である。柱穴は 2 箇所のみを検出であるが、後述する斜行溝 103 と並行することから柵の一部と認識した。

溝 82 10- 4 区中央部で検出した、幅 2 ~ 3 mの東西方向の溝である。約 32 mにわたって検出し、東は調査区外に延長するが、西は Y=-20,752 ラインで途切れる。底部標高は東端部で約 40.9 m、西端部で約 39.9 mと、1 mの比高差をもって西へ傾斜するが、西端部に溜まった水の排

水方法は不明である。方広寺南回廊の北側に平行して穿たれており、西端部は南門基壇の推定東端に相当する。明らかに南門・回廊遺構に規制されて穿たれており、柵4・5と同様に方広寺廃絶後の伽藍地を閉鎖するための施設と考えられる。溝内から近代陶磁器が出土する。

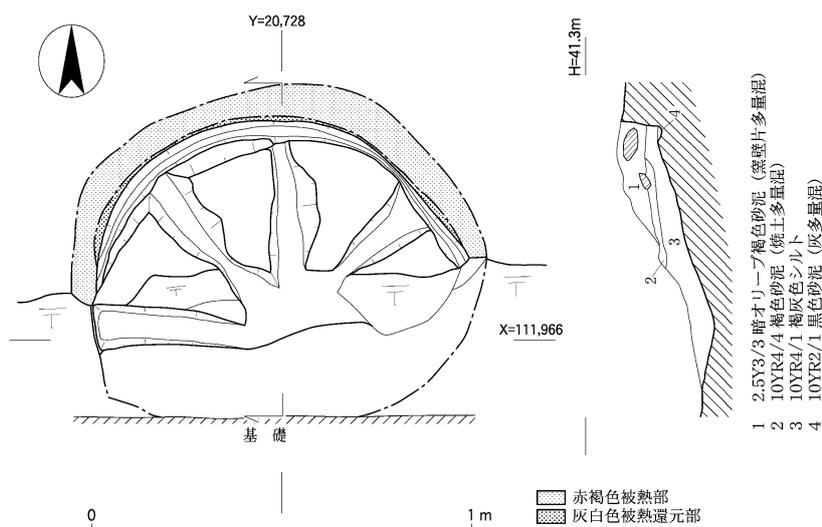


図 28 窯 41 実測図 (1 : 20)

溝 63 10- 4 区中央部で検出した、幅 2.5 m 前後の南北溝である。深さ 0.6 m 前後で、底部の標高差はほとんどなく、わずかに南へ傾斜する程度である。底部東よりでは人頭大の石が据えられて、幅 0.5 m ほどの溝状になっていた。埋土中層に多量の炭と近代陶磁器が廃棄されており、これらの遺物から明治時代末から昭和時代初頭の旧帝国博物館に関連する溝と考えられる。

溝 64 10- 4 区西半部で検出した、幅約 1.5 m の南北溝である。底部標高は北端で 40.4 m、南端で 40.3 m で、わずかに南へ傾斜する。深さは 0.6 m ほどで、下層の暗オリーブ褐色砂泥からは遺物がほとんど出土しないが、上層からは多量の近代陶磁器が出土した。上層は溝 63 と同様に旧帝国博物館時代の溝と考えられるが、下層溝は埋土からみて中世まで遡る可能性がある。なお、この下層溝は、11- 1 区の溝 233 と同一溝と思われる。

溝 103 11- 1 区西端で検出した斜行溝である。幅 0.5 ~ 1 m、深さは 0.1 m ほどと非常に浅い。柵 7 とともに恭明宮に関わる遺構と考えられるが、北に対して西へ大きく振っている。

窯 41 (図 28、図版 9) 10- 3 区東半で検出した円形窯である。窯の南半は基礎で壊されており焚口の状況は不明だが、直径約 1 m で焼成部の床面に矢車状の通焰溝を設けている。炉壁の立ち上がりは現状で 0.1 m ほどで、壁面は高熱のため淡黄色の還元色を呈し、その周囲はにぶい橙色に変色していた。遺物はまったく出土していないが、幕末から明治時代初頭にかけてこの地域で生産された京焼関係の窯と考えられる。

井戸 104 11- 1 区北端部で検出した円形漆喰井戸である。掘形の長径は約 2 m、漆喰井戸枠は直径約 1 m の円形である。

土坑 86 10- 3・4 区東端で検出した直径約 1 m、深さ約 0.2 m の円形土坑である。埋土は炭を多量に含む黒色砂泥で、窯 41 と関連する炭廃棄土坑と考えられる。

土坑 107 11- 1 区北端で検出した不整形な土坑である。北半は基礎の攪乱によって壊されているが、東西幅は約 5.5 m、深さ約 0.4 m である。

4. 遺 物

出土遺物は、10次調査で整理箱にして90箱分、11次調査で64箱分出土している。その内訳をみると、10次調査では全体の約3分の1が10-2・5区の石畳裏込め地業から出土した石仏や墓標などの石造物で、残りの大半も方広寺で使用されたいわゆる大仏瓦と、近世以降の陶磁器、棧瓦である。回廊部分の遺構保存のため下層遺構はほとんど調査しておらず、中世の遺物は井戸91と方広寺整地層内からまとまって出土したにすぎない。

これに対し、下層遺構の調査を行った11次調査では瓦類の出土が非常に少なく、大半が中世を中心とする土器類であった。方広寺期の土器類は10・11次調査を通じてほとんど出土していないが、それは調査地点が南回廊および回廊内の空閑地にあたるためと考えられる。

なお、整地層内でも炭を多く包含する土層から、後述するように鉄釘や鋸などの鉄製品のほか、鑄造関係の鑄型・鞆羽口・銅滓・鉄滓などが出土しており、大仏殿の造営との関係で注目できる。また、金箔を施した漆膜の断欠片も出土したが、細片化しており製品としては把握できていない。

以下に10・11次調査で出土した、土器類、瓦類、金属製品、石製品、木製品、鑄造関係遺物について詳細を述べる。

(1) 土器類

土器類は、方広寺下層の調査で多く出土しているが、一括資料としての良好な資料は少なく、明瞭な遺構に伴う土器群も破片での出土が多い。ここでは遺構に伴って出土した土器類のうち、図示できるものを中心に報告する。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類		土師器14点、須恵器1点、輸入陶磁器2点、軒瓦17点：計34点	2箱	0箱
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、山茶碗、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、銭貨、砥石、木製品、井戸枳材		土師器50点、須恵器1点、山茶碗1点、瓦器1点、瓦質土器6点、施釉陶器2点、焼締陶器5点、輸入陶磁器27点、鉄皿1点、鉄釘1点、銭貨3点、砥石5点、独楽1点、漆器1点、井戸枳材15点：計120点	30箱	35箱
桃山時代～江戸時代前期	土師器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、漆膜断片、石造物、金属製品、銭貨		土師器2点、焼締陶器2点、軒瓦9点、刻印瓦18点、金具2点、鋸6点、銭貨2点、石造物19点、鞆羽口5点、坩堝1点、鑄型2点、炉壁3点、鉄滓一括：計72点	32箱	35箱
江戸時代後期～明治時代	染付、磁器、施釉陶器、瓦類、銭貨		近代陶磁器17点、銭貨1点：計18点	0箱	19箱
合 計		184箱	244点 (31箱)	64箱	89箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より30箱多くなっている。

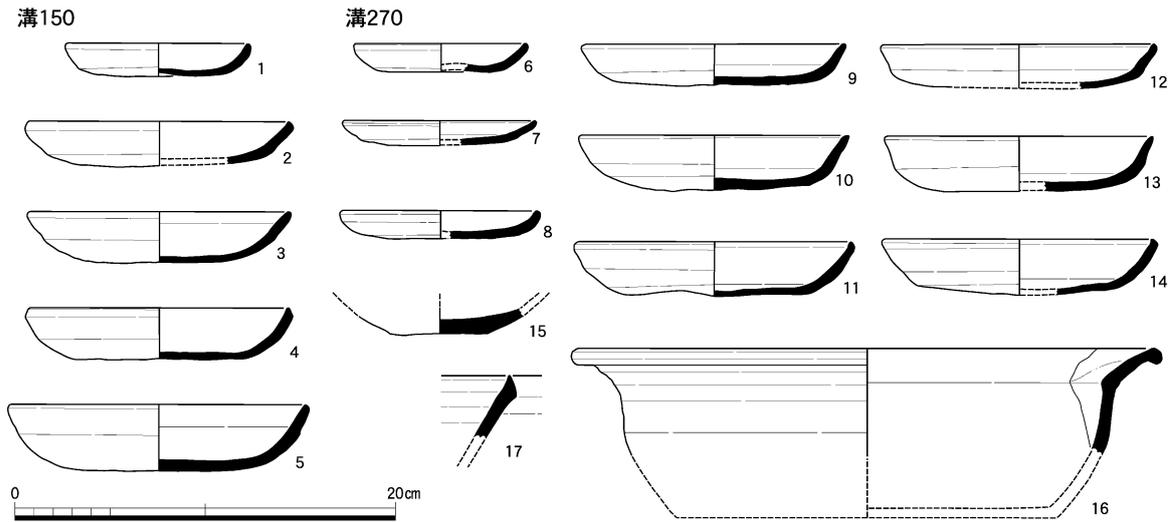


図 29 溝 150・270 出土土器実測図 (1 : 4)

1) 平安時代後期

溝 150・270 出土土器 (図 29、図版 12) 最下層路面 120a の両側溝から出土した土器群で、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などが出土した。土師器は口径 10 cm 前後の小皿 (1・6～8) と、口径 14 cm 前後の大皿 (2～4・9～14) に分かれ、大皿でも資料 5 は口径が 15.8 cm とやや大きい。小皿は底部外面にオサエ成形痕跡を残し、短く内弯して立ち上がる口縁から内面にかけては横ナデ調整を施す。大皿も基本的には同じ成形・調整で仕上げるが、口縁部立ち上がりが外反ぎみの資料もある。輸入陶磁器は白磁皿と褐釉陶器盤を図示した。白磁皿 (15) は平底の破片で、丁寧に仕上げられた底部以外は白釉が施される。胎土の焼成がやや甘く、釉調が灰黄色ぎみになる。華南産の褐釉陶器盤 (16) は口縁部の破片で、外側へ「く」の字状に屈曲し端部をやや肥厚させる。内面を施釉するが口縁部から外面にかけては露胎である。このほか、資料 17 は東播系須恵器鉢の口縁部片である。これらの土器群は平安京・京都編年における V 期新段階から VI 期古段階に位置づけることができ、12 世紀末から 13 世紀初頭の法住寺殿期に相当する¹⁾。

2) 鎌倉時代から室町時代

井戸 91・93 出土土器 (図 30、図版 12) 10-3 区で検出した 2 基の井戸から出土した土器群である。土師器 (赤系・白系)、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器が出土した。井戸 93 を壊して井戸 91 が成立しているが、出土した土師器の型式差はほとんどなく時期差を土器群から決めるのは困難である。赤系土師器は、口径 8～9 cm 前後の小皿 (18～21・28) と、口径 10 cm 前後 (22・29) および 12 cm 前後 (23・30・31) の大皿に分かれる。このうち、口縁部が内弯ぎみに立ち上がる小皿 (18～20・28) は古相の土師器である。多くの赤系土師器は平坦な底部から外反ぎみに口縁部が立ち上がるタイプで、内面から口縁部外面にかけて横ナデを施すが、外面の底部から体部下半部にかけてはオサエの痕跡が明瞭に残る。白系土師器はへそ皿 (32) が成立しており、大皿は 12 cm 前後が主流で、やや浅いもの (25・33・36) と深いもの (24・26・34・35) がある。口径 14 cm のもの (37) もみられる。白系土師器も内面から口縁部外面ま

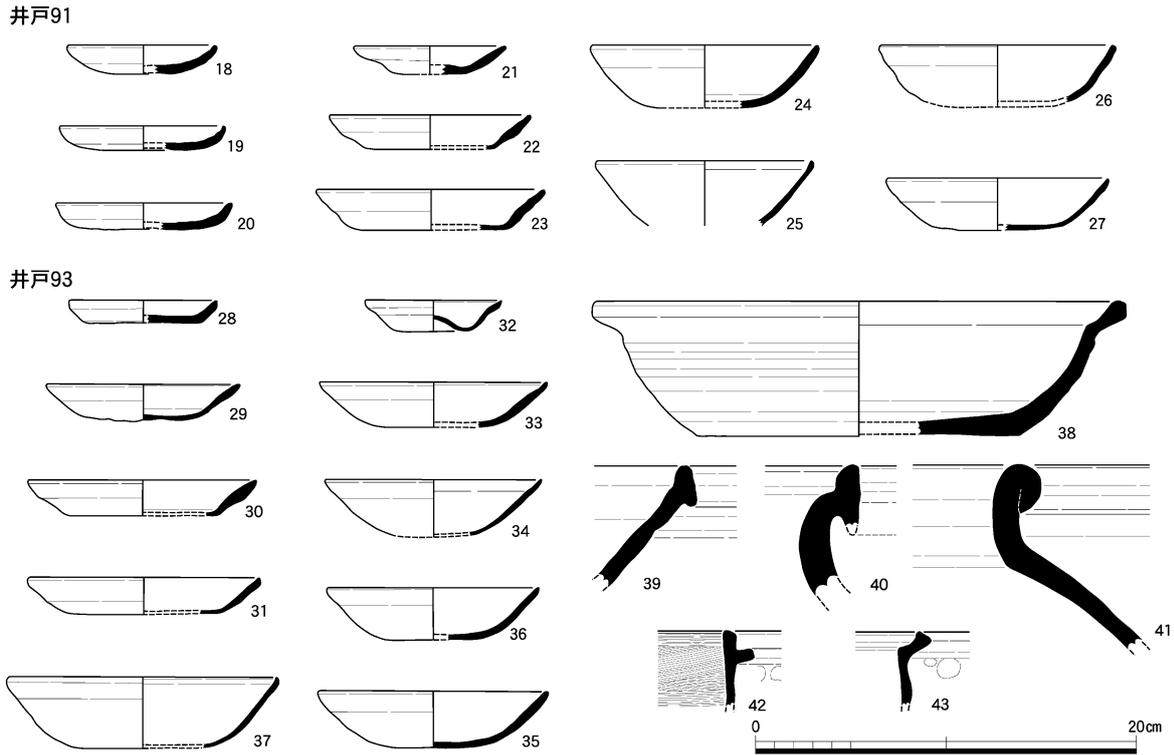


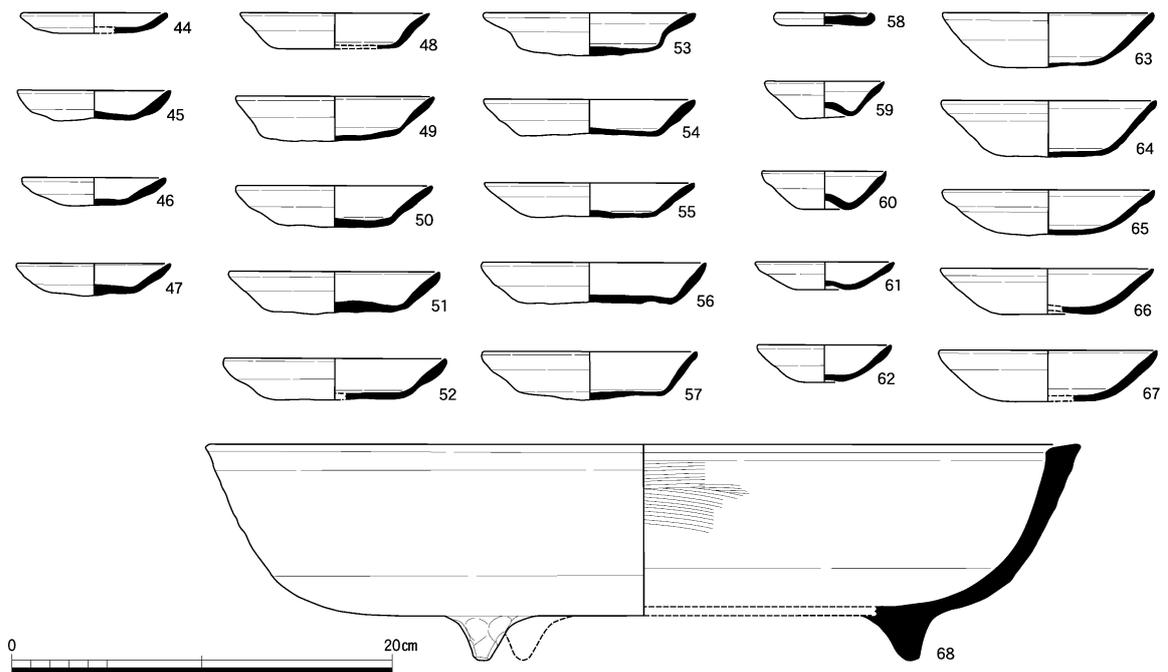
図 30 井戸 91・93 出土土器実測図 (1 : 4)

で横ナデ調整で底部外面は未調整であるが、赤系土師器と異なり胎土が緻密で丁寧に仕上げられる。土師器以外の土器では、井戸 91 から美濃産系の山茶椀 (27) が出土している。調整は内外面ともに回転ナデで、自然釉は認められない。井戸 93 からは焼締陶器では口縁端部の肥厚が進行した常滑産甕 (40) と備前産甕 (41) が出土しており、施釉陶器には瀬戸産の深皿 (38) が見られる。これらの土器群は古相を残すものの京都Ⅷ期中段階から新段階に位置づけることができ、井戸 91・93 とともに 14 世紀末から 15 世紀前半の年代を与えるのが妥当であろう。

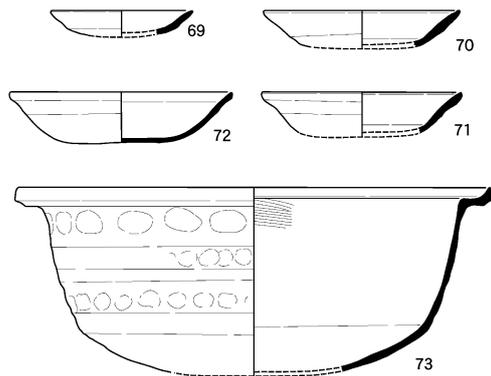
土坑 173 出土土器 (図 31 上段、図版 13) 11-1 区第 4 面路面 120b の西で検出した小土坑からの一括資料である。土師器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土しており、今回の調査で出土した遺物の中で最もまとまった土器群といえる。赤系土師器は、口径 8 cm 弱の小皿 (44 ~ 47) と口径 10 ~ 11 cm 前後の大皿がある。とくに、資料 50 の口縁部には灯明心の痕跡が明瞭に残されていた。白系土師器は小皿として口径 7 cm 前後のヘソ皿 (59 ~ 62) とコースター型土器 (58) があり、大皿は口径が 11 cm 強にまとまっている。また、三足の瓦質土器盤も出土している。土師器の製作技法や胎土の特徴は井戸 91・93 出土土器と同じであり、時期的には京都Ⅷ期中段階、14 世紀末から 15 世紀初頭に比定できる。

土坑 147・埋納遺構 193 出土土器 (図 31 下段、図版 13・14-1) 土坑 147 は前述したように瓦質土器鍋を埋納した土坑である。瓦質土器鍋 (73) は口縁端部を外側に屈曲させ、端部をやや上方に持ち上げるタイプで、口径 24.8 cm とやや大振りである。外面には被熱による煤が付着していた。共伴する土器類は非常に少なく、赤系土師器は口径 7.6 cm ほどの小皿 (69) と、口径 10.5 cm 前後の大皿 (70・71) をかろうじて図示できたにすぎない。白系土師器は口径 11.8 cm の

土坑173



土坑147



埋納遺構193

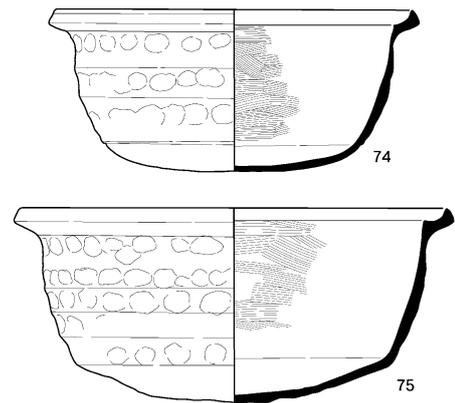


図31 土坑173・147、埋納遺構193出土土器実測図(1:4)

大皿で、これらの土器群の様相から土坑173よりも若干時期が下がって15世紀前半になる可能性がある。埋納遺構193は、資料73と同型式の瓦質土器鍋を合わせ口にして埋納した遺構である。埋納主体となった鍋(75)は口径22.2cmの大きなもので、蓋として利用された鍋(74)は口径18.8cmと一回り小さい。これらの鍋には資料73と異なり被熱痕跡が認められず、当初から埋納容器として使用されたと考えられる。

中世包含層出土土器(図32、図版13・15) 11-1区において中世包含層を掘り下げた時に多くの土器類が出土した。とくに、第4面を検出するために掘り下げた包含層(第3面掘り下げ層)からは、鎌倉時代から室町時代にかけての土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器など多くの土器が混在して出土している。これらの土器群のうち注目すべき資料として、回転土師器皿、瓦器椀、輸入陶磁器について報告する。土師器皿(76・77)は口径7cm前後の小皿だが、底部外面を回転ヘラ切り後にナデ調整で仕上げられており、明らかに京都産土師器と異なっ

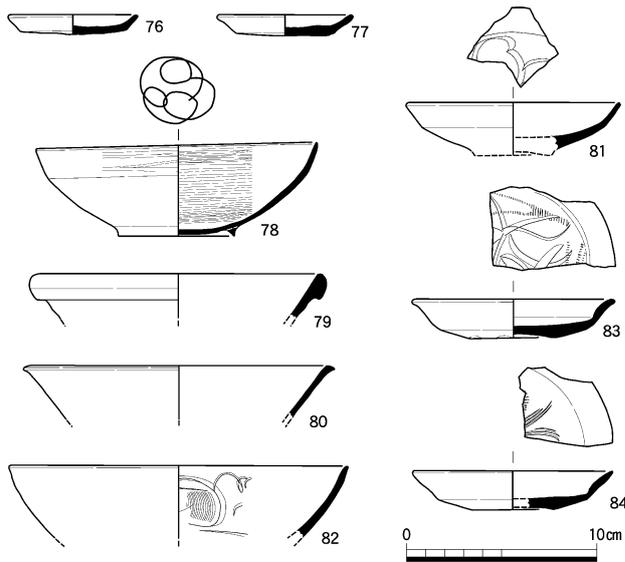


図 32 中世包含層出土土器実測図 (1 : 4)

が外反するV類碗(80)、内面見込みに篋描き草花文を施すⅧ類皿(81)、水差しと考えられる壺の破片(116～119)がある。青磁には内面に草花文を施す龍泉窯系Ⅰ類碗(91・126)、外面に鎬文をもつ龍泉窯系Ⅲ類碗(124・125)、龍泉窯系小碗(130)、内面見込みに篋描き文と櫛点描文などを施す同安窯系Ⅰ類皿(83・84)がある。青白磁は合子の体部と考えられる破片(120)が出土した。褐釉陶器には華南産の壺口縁部(131)がみられる。

このほか、第4面の溝156からⅥ類の白磁皿底部が、中世土坑や柱穴から龍泉窯系Ⅰ類碗(123・129)、内面に櫛描き文を施す同安窯系Ⅰ類碗(127)が出土した。また、上層の方広寺整地層あるいは第2面掘り下げ中に、内面に篋描き草花文を施す白磁類碗(114)、体部に唐草文を描く青白磁壺(121)、龍泉窯系と考えられる小碗(128)が出土している。

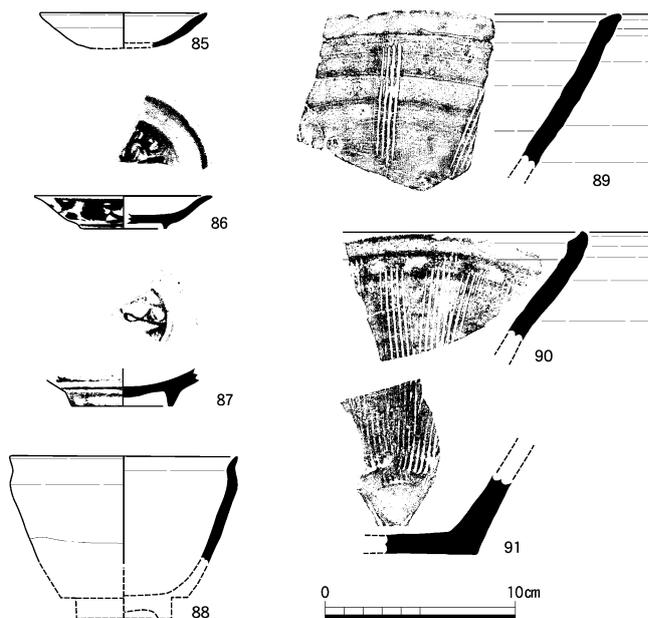


図 33 堀 322 出土土器実測図 (1 : 4)

いる。胎土の差も明瞭で、おそらく地方からの搬入土器と考えられる。瓦器碗(78)は楠葉型瓦器碗で、包含層内から非常に残りの良い状態で出土した。高台の断面はしっかりとした逆三角形で器高も高く、口縁端部には沈線が巡る。内面は丁寧なミガキで、見込み部には螺旋状暗文を施す。ミガキは口縁部外面にも粗く及んでいる。輸入陶磁器は白磁、青白磁、青磁、褐釉陶器が出土している。白磁には口縁部が玉縁状を呈するⅣ類碗(79・113)、口縁部

堀 322 出土土器(図 33、図版 14-2) 11-2区で検出した南北方向の堀から出土した土器群で、土師器、須恵器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。ただ、土師器の出土量が極端に少なく、口縁端部が外反ぎみになる土師器小皿(85)が唯一図示できた資料である。輸入陶磁器は明染付の小皿(86・87)が出土している。施釉陶器は瀬戸の天目茶碗(88)がみられ、焼締陶器には甕片のほか信楽産播鉢(89)と丹波産播鉢(90・91)がある。土器群の様相から、方広寺造営直前の16世紀後半に比定している。

3) 桃山時代

土坑 321 出土土器 (図 34) 11- 2 区北端で検出した方
 広寺期整地層直下の土坑 321 から出土した土器で、土師
 器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器がある。土師器は
 口径 8.2 cm の小皿 (92) と口径 12.2 cm の大皿がみられる。
 平坦な底部から直線的な口縁部が上外方に立ち上がるタ
 イプで、大皿の口縁部と底部内面との変換部には強いナ
 デが巡る。焼締陶器には備前産播鉢 (94・95) がみられ、
 青白磁壺の破片 (122) も出土している。京都 X 期新段階
 に相当する。

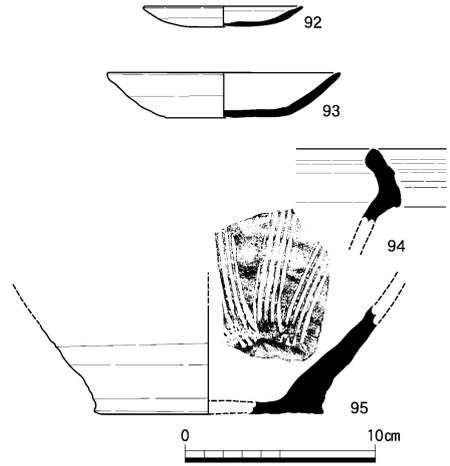
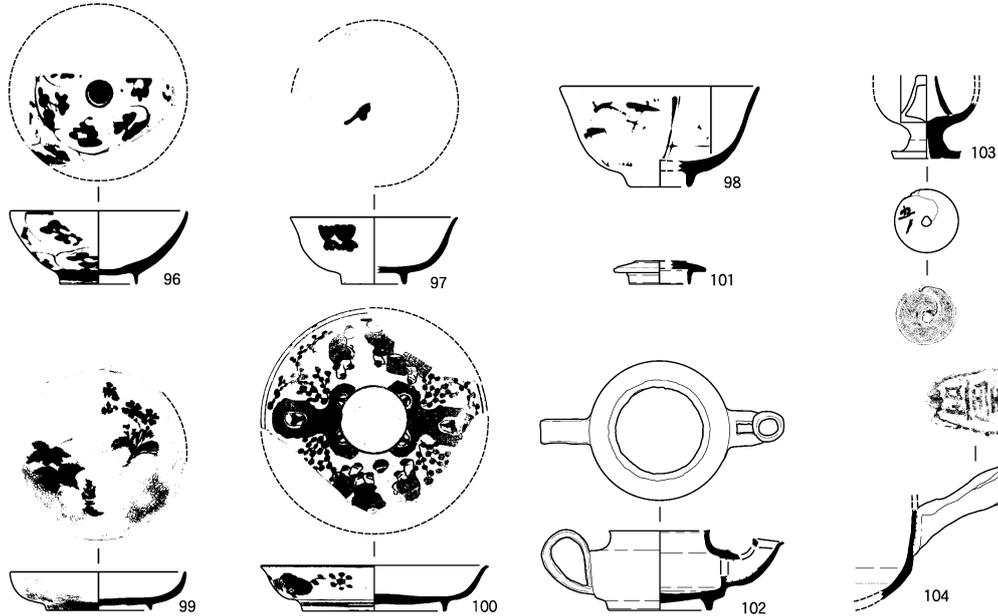


図 34 土坑 321 出土土器実測図 (1 : 4)

溝 63



溝 64

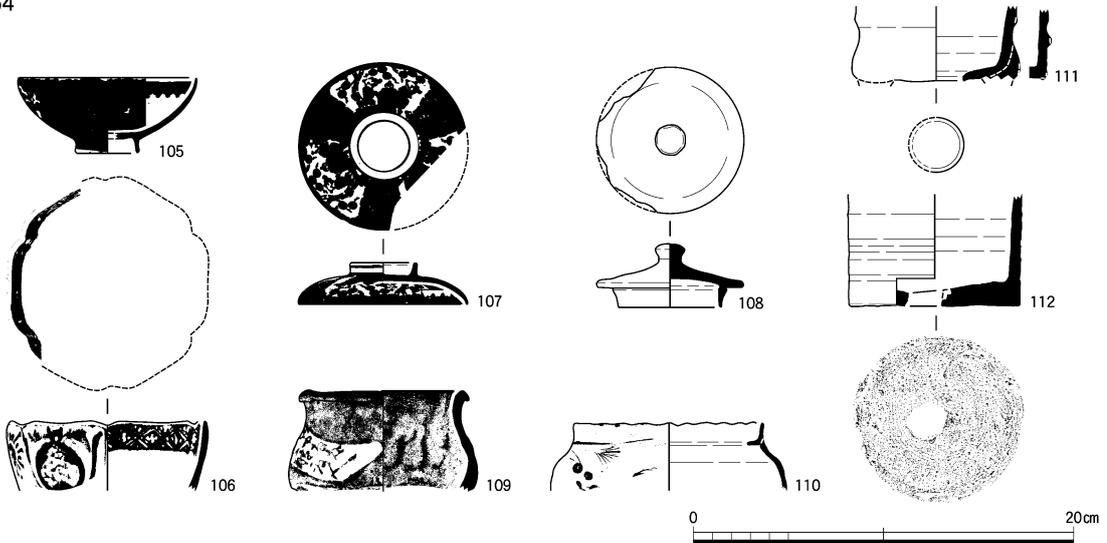


図 35 溝 63・64 出土土器実測図 (1 : 4)

4) 江戸時代後期から明治時代

溝 63・64 出土土器(図 35) 溝 63 から出土した土器には、染付碗・皿, 乗燭, 行平がある。96～98 の染付碗は瀬戸・美濃系磁器である。99 の皿は京焼, 100 の皿は肥前系である。101～103 は乗燭とよばれる京・信楽系の灯火具である。101 は 102 の蓋とみられる。103 の底部のほぼ中央に小孔があり, 底部外面には糸切り痕がみられ, 墨書が残存する。104 は京・信楽焼系の行平で, 把手部分に「壽」の刻印がみられる。溝 64 から出土した土器には, 染付碗・鉢・蓋, 青磁蓋, 施釉陶器鉢・壺がある。105 は京・信楽系の染付碗である。106 は肥前系の染付輪花鉢である。107 は京・信楽系の染付蓋である。108 は信楽系の青磁で, 土瓶の蓋である。109 は京焼系の鉢である。110 は京焼系の輪花壺である。111 は京焼系の楽茶碗, 112 は窯道具とみられる信楽系のサヤ鉢で, 底部外面は糸切り痕跡が明瞭にみられる。いずれも底部のほぼ中央に穿孔がみられることから, 植木鉢に転用されたとみられる。これらの土器群は、江戸時代末期から明治時代とみられる。

(2) 瓦類

調査地からは奈良時代から明治時代の瓦が出土しており、主に平安時代後期を中心とする瓦と桃山時代から江戸時代の方広寺に関連する瓦に 2 分される。

方広寺造営以前の軒瓦(図 36、図版 16) 11-1 区の中世包含層や土坑などから平安時代後期を中心とする軒瓦が出土しているが、遺構に共伴する資料ではなく混入した状態であった。これらの瓦は後白河法皇が整備した法住寺殿に関係する瓦と想定でき、播磨産、京都産、南都産などに分類できる。

瓦 1 は平城宮 6301B 型式に属する複弁蓮華文軒丸瓦で、平安時代前期に平安京へ搬入された軒丸瓦である。間弁は T 字形、外区に珠文が巡り、傾斜縁で鋸歯文を配する。瓦当裏面には丸瓦接合前に押圧された布目がつく。平安時代後期の軒丸瓦には蓮華文と巴文がある。瓦 2 は南都産の複弁蓮華文である。凸形中房、外区に珠文を持たない。燻されて表面が黒く仕上げられている。瓦 3 は右巻きの三巴文で尾は離れる。珠文は小粒で密に配する。播磨産で堅緻に焼き上がり、瓦当面には灰白色の灰を被る。瓦 4 は京都産の右巻きの巴文で、外区に珠文を持たない。瓦当裏面に丸瓦を差し込み、粘土を付加して接合した後、オサエ成形で調整する。

平安時代後期の軒平瓦には唐草文、半截宝相華文、剣頭文、鋸歯文などがある。産地は播磨産が大半を占める。瓦 5～瓦 14 は、平瓦を瓦当に接合して成形する播磨産軒平瓦である。瓦 5～瓦 9 は唐草文、瓦 10・瓦 11 は鋸歯文、瓦 12～瓦 14 は半截宝相華文である。瓦 6・瓦 7・瓦 9・瓦 13 は平瓦を比較的上方に接合し、接合後に丁寧にナデ調整する。瓦 10・瓦 12 も平瓦部がはずれているが、接合位置は上方である。瓦 5・瓦 8・瓦 11・瓦 14 は瓦当裏面中心部に平瓦を接合する包み込み技法である。瓦 5・瓦 6 は堅緻に焼き上がり瓦当面に灰が被る。瓦 12・瓦 14 は燻しを施す。瓦 15～瓦 17 は折曲げ技法の京都産軒平瓦である。平瓦部凹面は布目、凸面はタタキを施す。瓦 15・瓦 16 は右巻き三巴文と剣頭文を交互に配置する。周縁上部はヘラ削りを施す。瓦 17 は巴文と斜格子文を配置する。瓦 15・瓦 17 は凸面にヘラ記号がある。

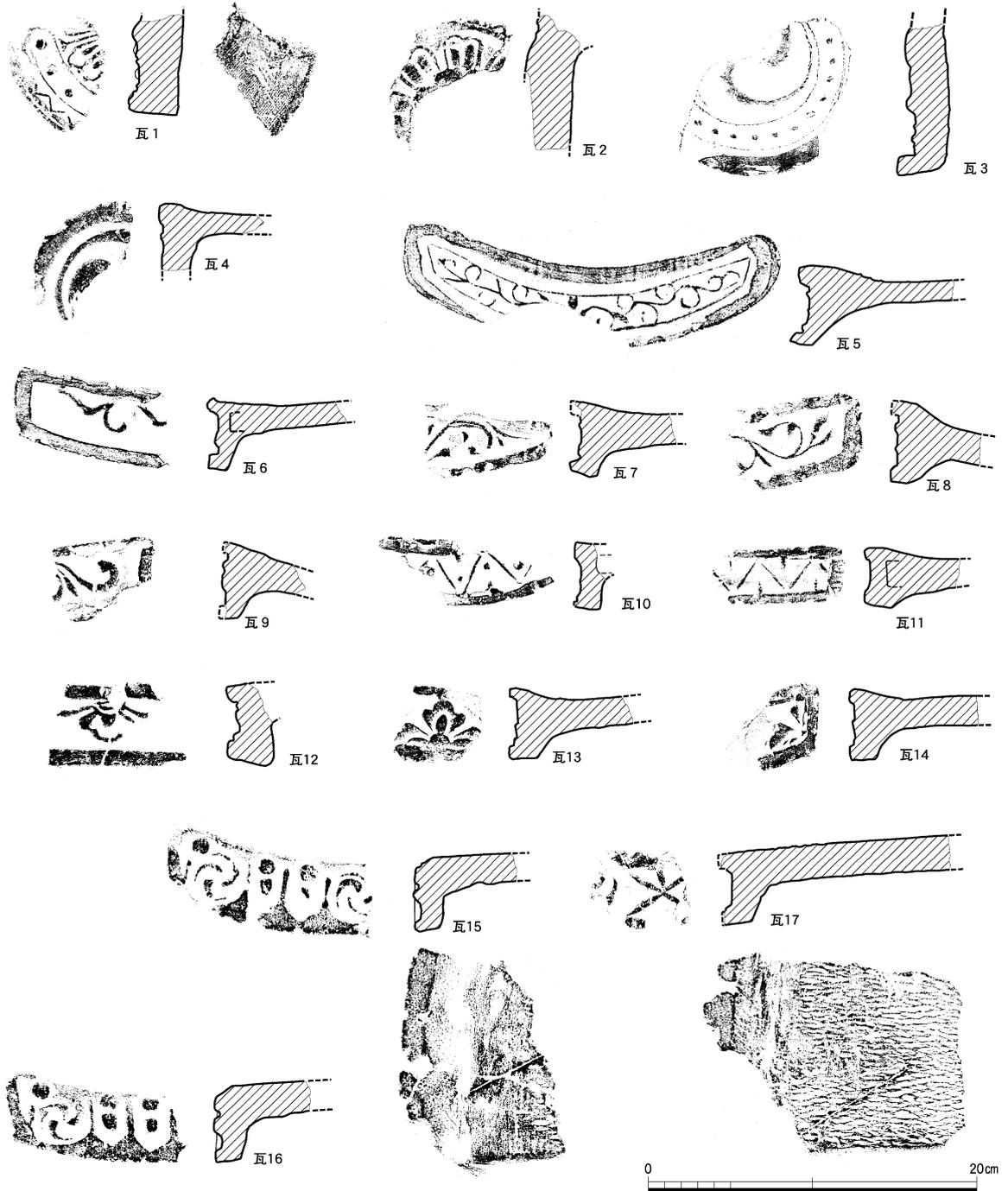


図 36 方広寺造営以前軒瓦拓影・実測図（1：4）

方広寺期の軒瓦（図 37、図版 17） 当該期の軒瓦は、方広寺整地層内や盛土などから出土している。

軒丸瓦は桐文軒丸瓦と巴文軒丸瓦に分かれる。瓦 18・瓦 19 は大型桐文軒丸瓦で、瓦 18 は五三の桐文の花部、瓦 19 は葉部である。葉に切り込みがみられる。瓦当部裏面は平坦、不定方向のナデを施す。周縁部は横ナデ。表面は燻され黒灰色を呈する。瓦 20～瓦 22 は大型三巴文軒丸瓦。瓦 20 は瓦当面はほぼ完形である。右巻きの巴文で互いに頭部も尾も離れる。珠文は密に配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の先端に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部裏面は平坦

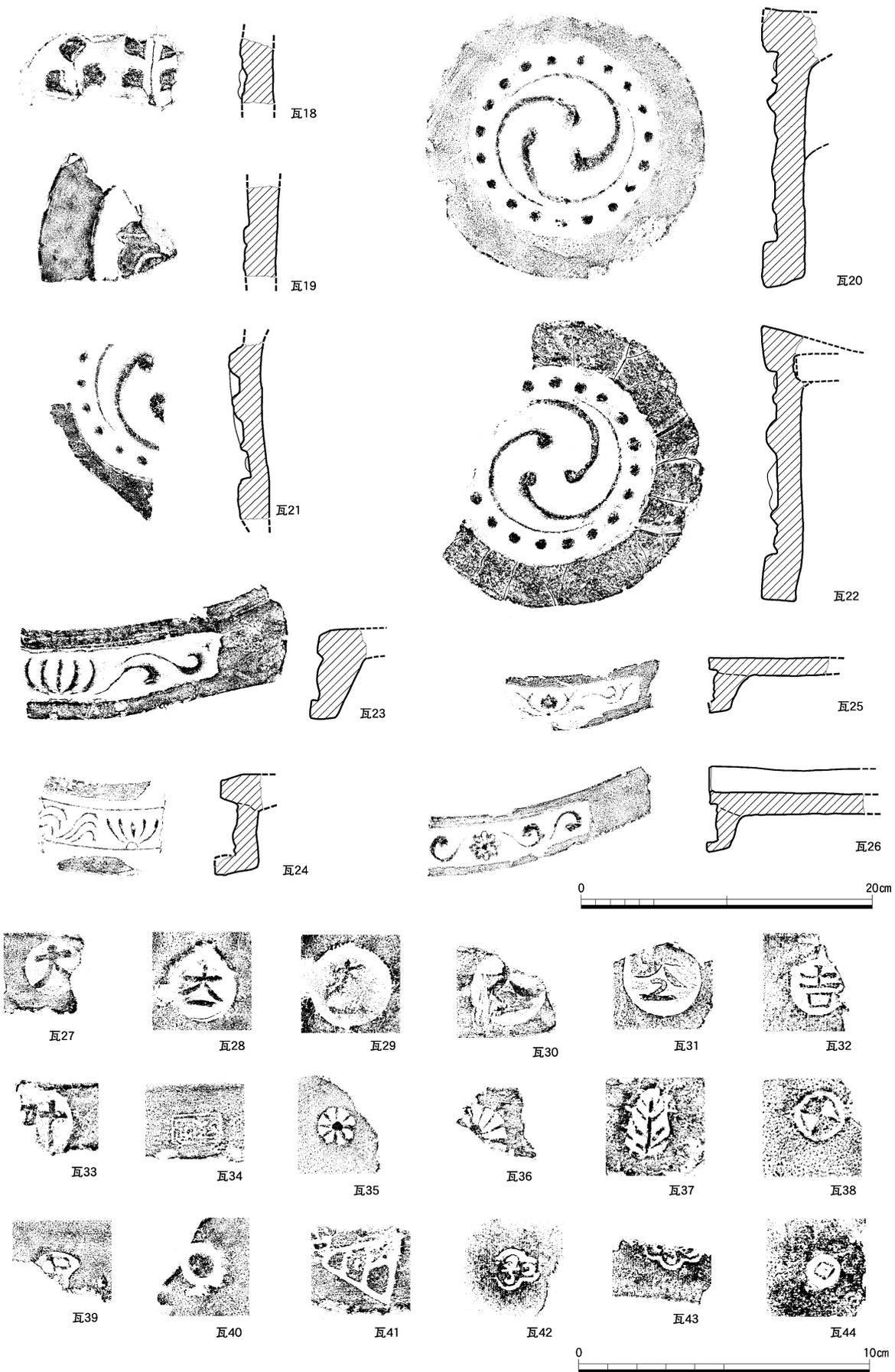


图 37 方広寺期軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)、刻印瓦拓影 (1 : 2)

で不定方向のナデ、側面は縦ナデを施す。これらは桃山時代と考えられる。

軒平瓦は唐草文軒平瓦が中心である。瓦 23 は中心に上向き五葉を配し、唐草が 2 回反転する。瓦 24 は中心に菊水文を配置し、左右に簡略化された唐草文がみられる。瓦当部成形は粘土貼付けによる。瓦当部外区や顎部裏面をケズリにより面取りしている。ともに桃山時代。瓦 25 は宝珠唐草文軒平瓦で、中心に宝珠文を配置し簡略化された唐草文が左右に展開する。瓦当周縁の内外面を面取り、顎部裏面と凸面は横ナデを施す。瓦 26 は中心飾りを簡略化した花文とする外向唐草文軒平瓦である。瓦当面にキラコ、瓦当周縁上端・下端は面取り、顎部凸面・裏面は横ナデを施す。瓦 25 と瓦 26 は江戸時代と考えられる。

刻印瓦は 26 点で、丸瓦、平瓦がある。図示した瓦は、丸瓦が瓦 28・瓦 35・瓦 39・瓦 40・瓦 42・瓦 44 の 6 点で、他 12 点は平瓦である。他に平瓦 6 点、丸瓦 2 点がある。刻印の位置は、丸瓦は狭端部凸面、平瓦は端面が大半である。刻印は瓦 27 が「大」、瓦 28～瓦 30 が「大」、瓦 31 は「大工」、瓦 32 は「吉」、瓦 33 は「叶」の文字や、瓦 34～瓦 44 の記号など 13 種ある。多くが 10-4 区の方広寺整地層内から出土した。

(3) 金属製品

出土した金属製品には青銅製品、鉄製品がある。青銅製品には甲冑の留具と考えられる資料があり、銭貨も出土している。鉄製品には主に 10-4 区整地層から出土した釘や鋸がある。

青銅製品(図 38、図版 18-1) 金 3 は甲冑の止め金具の鞋(コハゼ)で、平面形は紡錘形をしており、紐を通す穴が 2 箇所開けられている。11-1 区方広寺整地層から出土した。金 4 は平面形が隅丸方形で、上部 3 分の 1 ほどが割れて口が開いたように開く。その両側の 2 箇所を穿孔し、長さ 4mm・太さ 1mm のピンを通す。また、片面下部には突起がある。布や革などの止め金具と考える。10-3 区整地層から出土した。

鉄製品(図 38、図版 18-2～4) 金 1 は鉄製の皿、金 2 は鉄釘である。皿は錆化による損傷が激しく脆いが、かろうじて原形を留める。鉄釘の断面は方形である。ともに 11-1 区第 3 面掘り下げ時の包含層から出土した。金 5～金 10 は鋸である。金 5～金 7 は小型の鋸で断面は方形である。金 9・金 10 は大型の鋸で、錆で断面は不明瞭である。金 8 は爪の部分にあたる。10-4 区の方広寺整地層(炭層)からまとめて出土した。

銭貨(図 38、図版 18-5) 銭貨は全部で 10 点出土している。金 11～金 13 は北宋銭である。金 11 は「天聖元寶」で、初鑄年は天聖元年(1023)である。11-1 区の石敷路面 120b の検出中に出土した。金 12 は「元豊通寶」で、初鑄年は元豊元年(1078)である。10-4 区の方広寺整地層から出土した。金 13 は「元祐通寶」で、初鑄年は元祐元年(1086)である。11-1 区の石敷路面 120b の検出中に出土した。金 14 は慶長 11 年(1606)に徳川家康が銭座で作らせたという「慶長通寶」である。11-1 区の第 2 面上面で出土した。金 15 は「寛永通寶」で、初鑄年は寛永 13 年(1636)である。10-4 区の方広寺整地層上面から出土した。金 16 は楷書体の「文久永寶」で、初鑄年は文久 3 年(1863)である。背面には波紋がみられる。10-5 区の盛土から出土した。

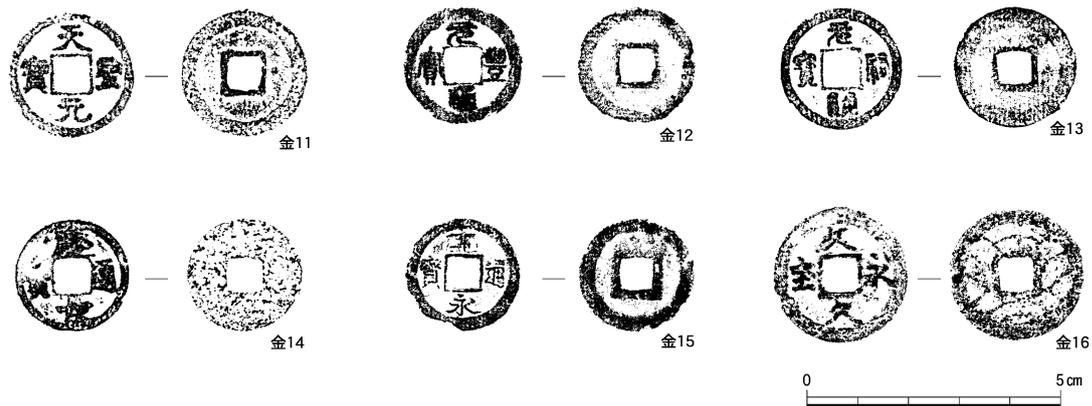
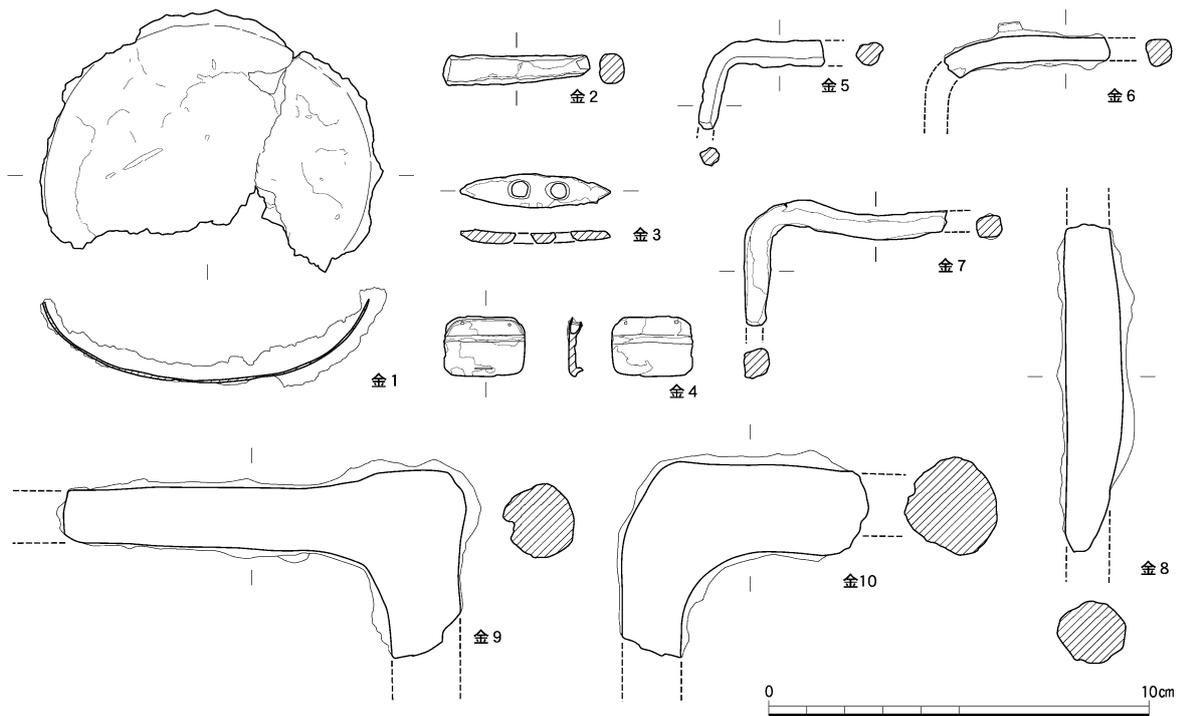


図38 金属製品実測図（1：2）、銭貨拓影（2：3）

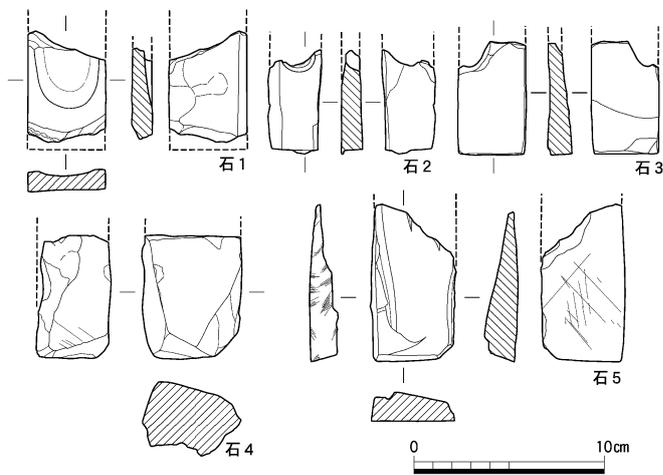


図39 石製品実測図（1：4）

（4）石製品

石製品には砥石、滑石鍋、硯などの日用品などの他に、石仏、墓標、五輪塔、宝篋印塔などの石造物がある。

石造物の大部分は10-2区の石塁裏込の石と混在して出土しており、全部で75点が出土した。多くは破碎され、磨滅しているものが多い。残存状態の良好なもの石6～石24について図示した。石材はいずれも花崗岩である。

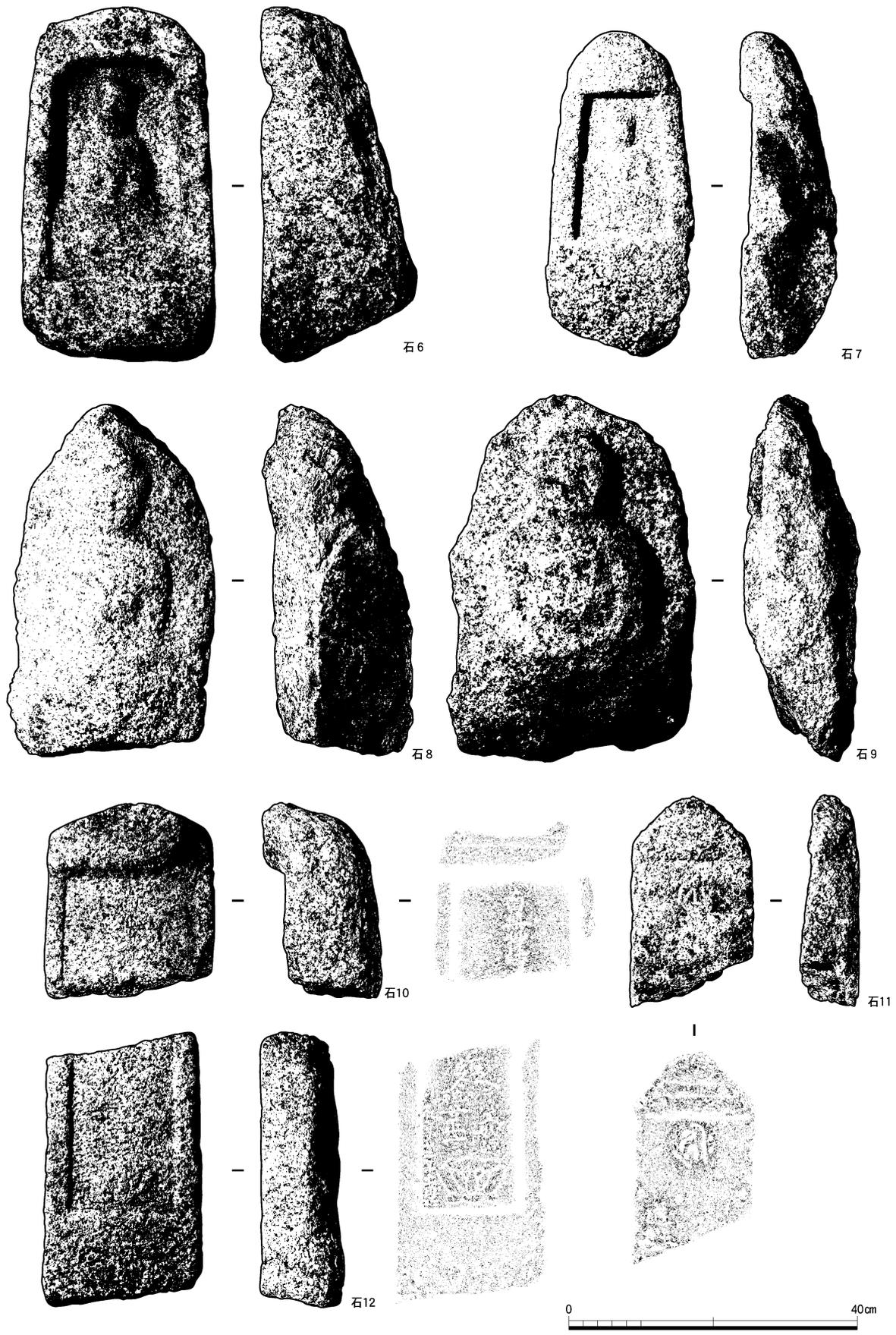


图 40 石造物画像・拓影・実測図 1 (1 : 8)

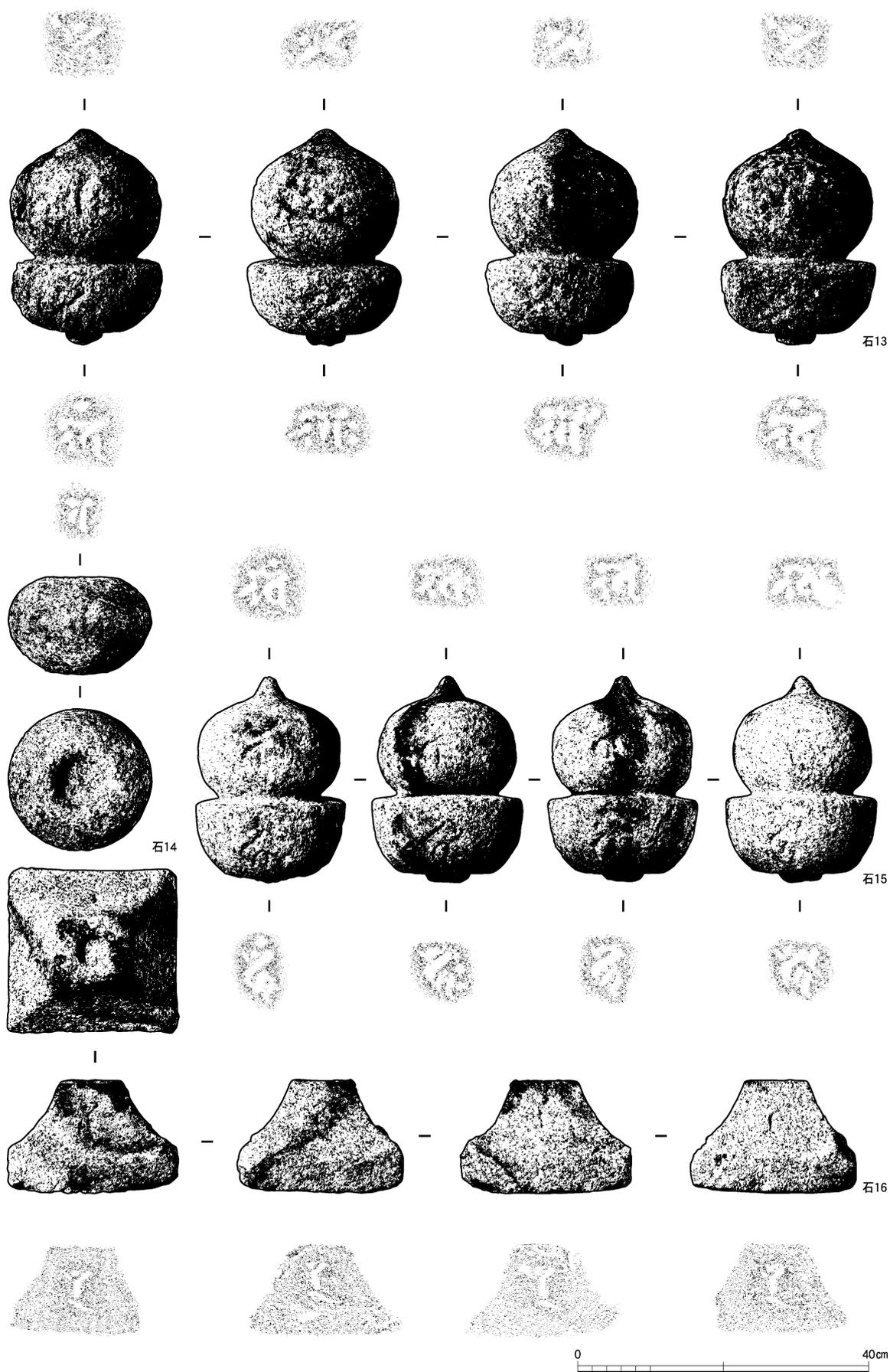


图 41 石造物画像・拓影・実測図 2 (1 : 8)

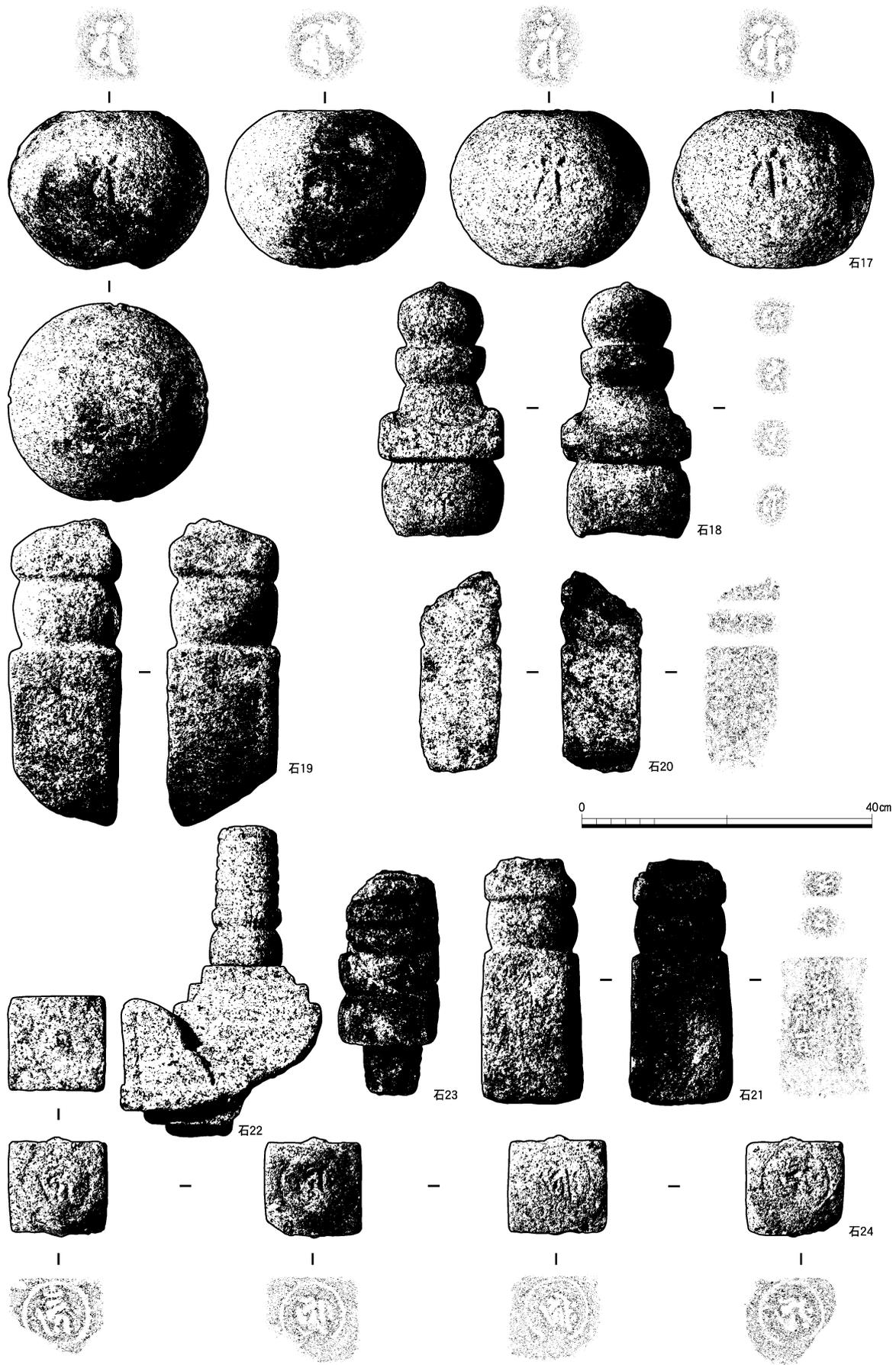


图42 石造物画像・拓影・実測図3 (1:8)

硯（図 39、図版 18- 6） 石 1 は小型硯である。平面形は長方形で、海部は欠損する。両面に使用痕があり、上面の陸部は使用痕で凹み、下面は周縁部の痕跡が残る。石材は灰オリーブ色の粘板岩である。11- 1 区の第 2 面掘り下げ中に出土した。

不明石製品（図 39、図版 18- 6） 石 2 は下端が残存する平面形が長方形で、上部に推定径約 1.9 cm の円形の孔を穿つ石製品である。石材は灰色の粘板岩で、上面は滑らかに仕上げる。11- 1 区の第 3 面掘り下げ中に出土した。

砥石（図 39、図版 18- 6） 石 3 は両面滑らかで磨滅している。石材は表がにぶい橙色、裏が淡黄色の粘板岩で、鳴滝産である。石 4 は大型砥石の一片で、上面は滑らか、側面に一方向の直線痕がある。明褐色の石材である。石 5 は上面に一方向の直線的な鋭い切り込みがあり、下面には不定方向の直線痕がある。石材はにぶい黄橙色の粘板岩で、鳴滝産である。石 3 ・石 5 は 11- 1 区の第 4 面掘り下げ中に、石 4 は 11- 1 区の第 3 面掘り下げ中に出土した。

石仏（図 40、図版 19） 石 6 ～石 9 は前面に一尊の如来座像を浮き彫りに刻する。石 6 ・石 7 は前面をほぼ方形に彫り窪めて、座像を刻する。

墓標（図 40、図版 19） 石 10 ～石 12 はいずれも破片で、前面を彫り窪め中央に題目を刻む。石 10 は中央に「南無妙法口」と刻む。石 11 は頂部に三角形、首部に二条線で額部としている。また中央頭に梵字を刻す。石 12 は下部に蓮下座を陽刻する。右側に「祖父妙口」、左側に「祖母正信」、左端には「永禄十二年十一月」と刻む。永禄十二年は 1570 年である。

五輪塔（図 41 ・42、図版 19） 石 13 ～石 21 は、いずれも部材の破片である。石 13 ～石 17 は積み上げ式五輪塔である。石 13 ・石 15 は上から空・風部である。側面に梵字を刻む。風部下端には組み合わせの突起が作られている。石 14 は水部（塔身）で、下面には窪みを作る。石 16 は火部で四面に梵字を刻す。上に風部と組み合わせる窪みがある。石 17 は水部（塔身）である。上に火輪と組み合わせる窪みが作られている。石 18 ～石 21 は一石五輪塔である。石 18 は最下部の地部が欠損し、空・風・火・水部が残存している。一面に各部に梵字を刻む。石 19 ～石 21 は上段の空・風部が欠損し、火・水・地部が残存している。石 21 は地部の一面中央に「妙口」、左側に「三月一日」、右側にも痕跡があるが不明。

宝篋院塔（図 42） 石 22 ～石 24 も部材である。石 22 は塔の上段で上から九輪・請花・伏鉢・露盤・隅飾り突起部である。下段は欠損している。隅飾り突起部が直立しており、室町期の特徴をもつ。石 23 は上から九輪・請花・伏鉢部である。石 24 は塔身部で、四面に梵字を刻す。

（5）木製品

木製品には独楽、漆器片、曲物底板片、箸片、ヘラ状木製品などの破片があり、井戸 93 の枠材は建築部材の転用である。木製品は、10- 2 区整地層や 10- 3 区井戸 91 ・93 などから出土した。井戸 93 からの出土遺物が多くを占める。

独楽（図 43、図版 20） 木 1 は平面円形で中空である。上端は内側に斜めに削り、外周と軸に面取りを施す。内面に墨で輪模様を描く。材質はカキである。10- 3 区井戸 91 から出土した。

漆器（図43）木2は椀の底部で、上部は欠損する。内外面黒色漆、内面・見込みに赤色漆で草花文を描く。材質はケヤキである。11-1区井戸93から出土した。

井戸枳材（図45～47、図版20）方形縦板組の井戸93の枳材で、転用材である。部材には隅柱や横棧、縦板がある。横棧や縦板の一部が切断されるなど

破壊されているが、比較的良好に残存している。縦板には屋根材を転用している。

隅柱は下段の四隅（木3～木6）と、底から2本（木7・木8）出土している。大きさは、長さ52.2～52.6 cm・幅4.8～5.6 cm・厚さ3.6～4.8 cmとほぼ揃っており、材質はすべてスギである。木7の上部にはホゾ穴があることから転用材と考えられる。また木8は長さが61 cm以上あり、下部10 cmほどの半裁した箇所、釘穴があることから隅柱を継いで使用したのと考ええる。

横棧は下段の四面（木9～木12）と、半裁されて井戸底に投げ込まれた横棧（木13）を図示した。大きさは長さ92.1～92.5 cm、幅7.4～7.7 cm、厚さ5.3～5.7 cmとほぼ揃っている。それぞれに釘穴が1～4箇所あり、鉄釘が残るものもある。材質はすべてヒノキである。木9は北側、木11は南側の横棧で両端に臍をつける。木10は西側、木12は東側の横棧で、臍穴を開け方形に組み上げる。木9は削り痕が、木10・木11には鋸挽き痕がある。木13は鉋のようなもので叩き割られた様子が窺われる。棧には打ち込まれた鉄釘が残る。

縦板は4面の材がほぼ揃っており、各面の縦板は5枚からなる。中には屋根材の転用と考えられる断面が緩い弧を描くものや、刻印がつくものがある。図示した木14～木17の大きさは、長さ133～150 cm、幅15～19.3 cm、厚さ3.5～4.0 cmで、材質はすべてスギである。裏面下部には横棧の圧痕が付く。それぞれの板に2～3箇所の釘穴があり、鉄釘が残るものもある。また、断面をみると、表面は木の年輪を利用してその部分を割り、緩い弧のある材を作る。裏面は平坦に削る。木17は削り痕が残る。このように加工するのは屋根の反りを出すため、このことから屋根材を転用したものとわかる。また、木14と木15は表面に、直径4.8 cmの円形金型によるものと考えられる押印がある。円内に「キ」状の記号を表しており（図44）、木14では中央よりやや下部に3箇所、木15では中央部に1箇所認められる。

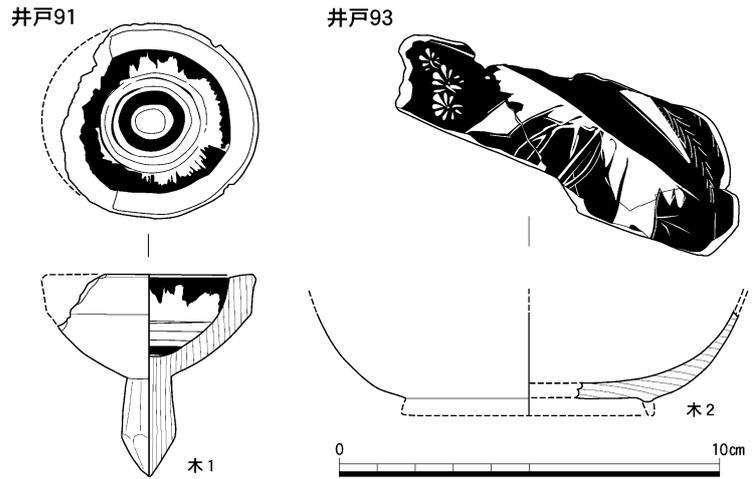


図43 木製品実測図（1：2）

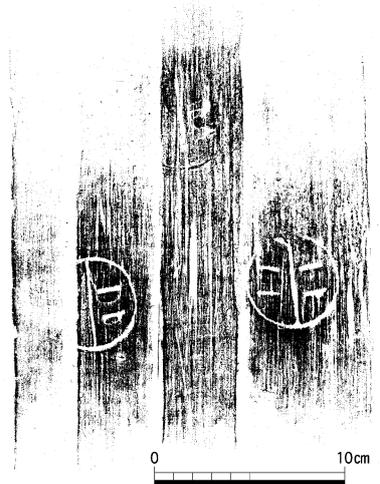


図44 縦板金型印拓影（1：4）

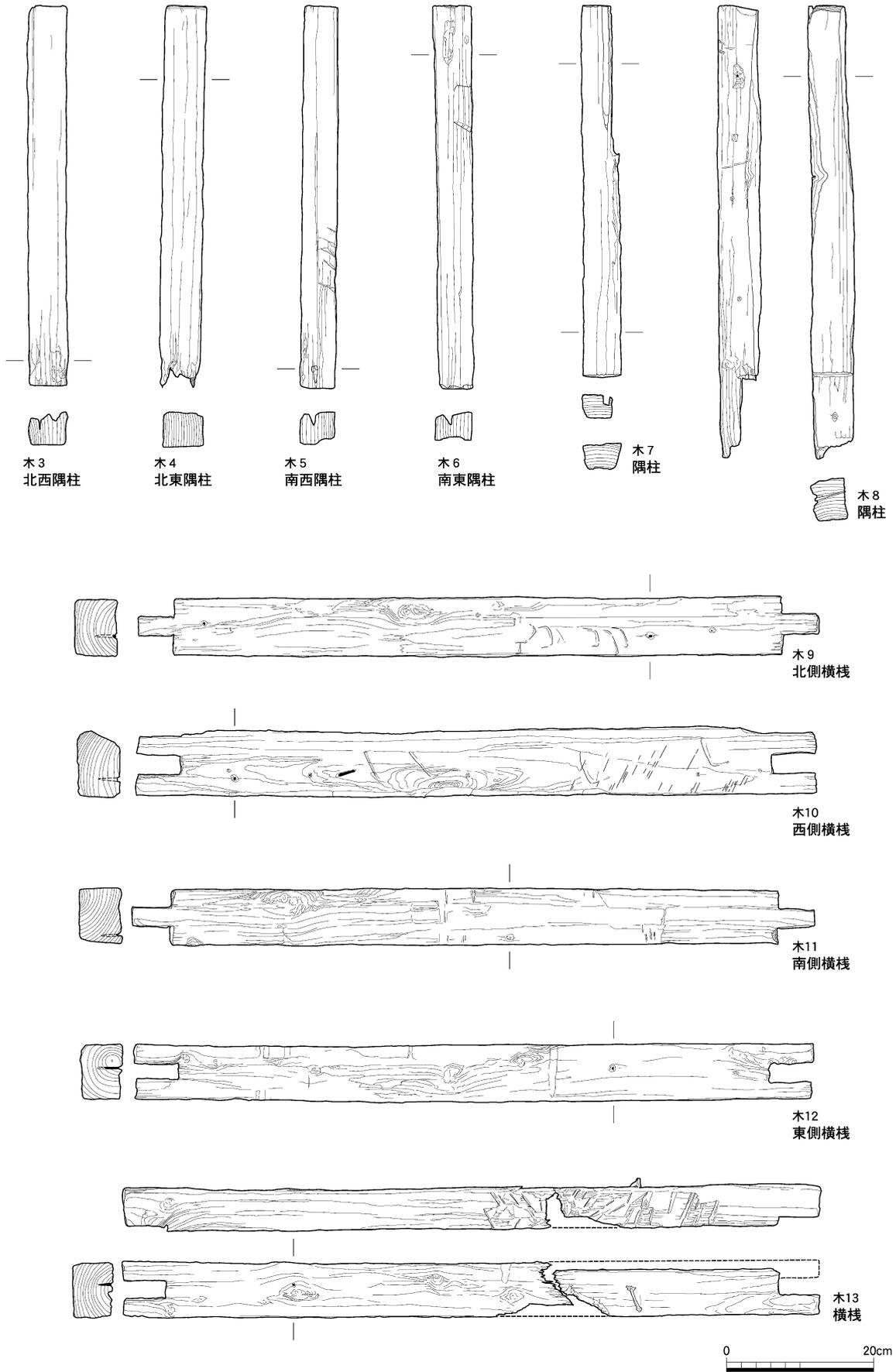


図45 井戸93 枿材実測図1 (1:8)

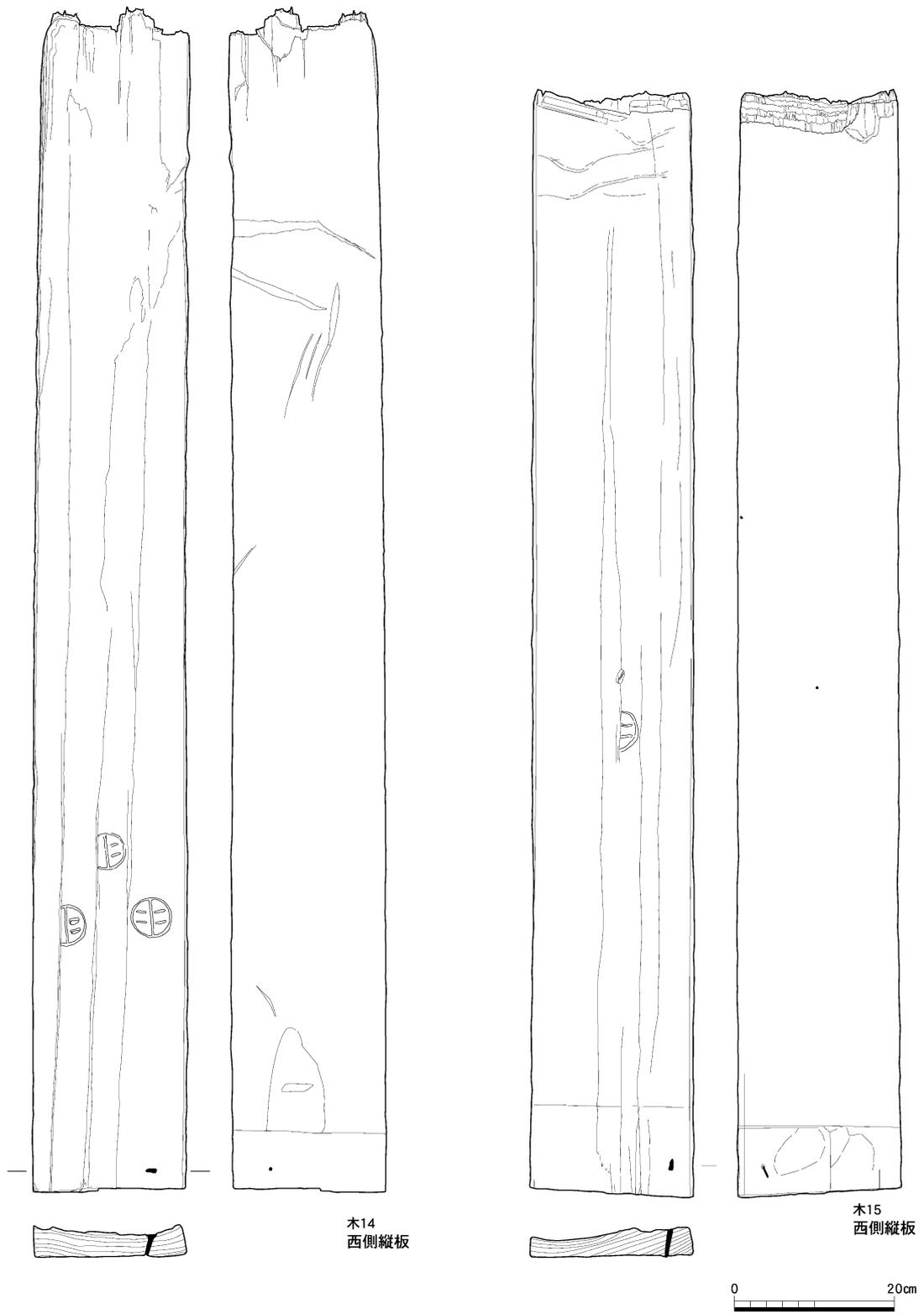


図46 井戸93 枿材実測図2 (1:8)

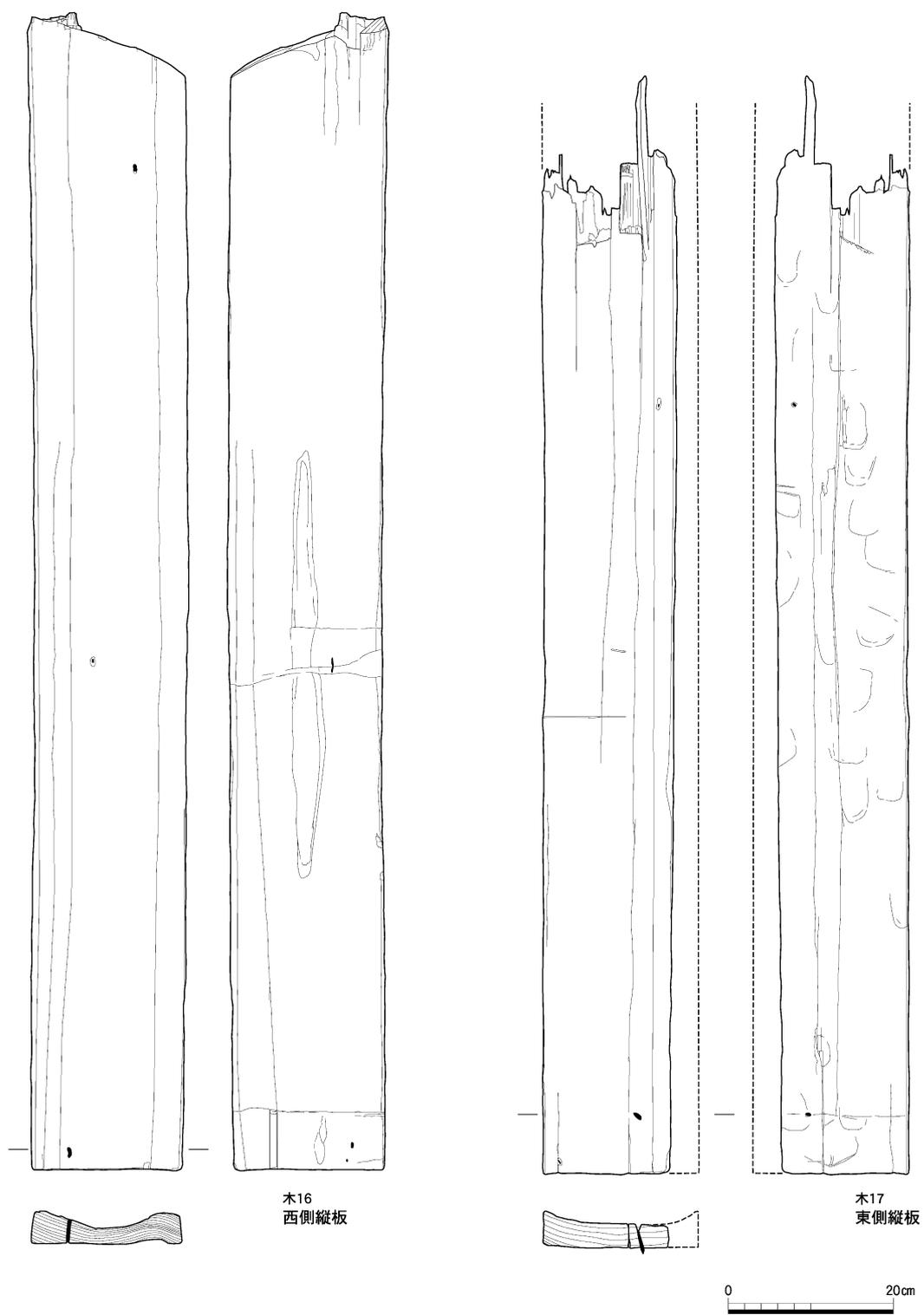


図47 井戸93 枳材実測図3 (1:8)

(6) 鑄造関係遺物

10-4区で検出した方広寺整地層内のうち、炭を多量に含む層（図20下段のD-D'ライン断面図第12層）から鑄羽口や鉄滓などの鑄造関係遺物が多量に出土した。また、井戸91・93上の窪みである土坑42からは、炉壁片や大型鑄型片がまとまって出土している。これらの鑄造関係遺物はすべて大型であり、方広寺造営規模の大きさを物語っている。

鑄羽口（図版21-1）すべて方広寺整地層内の炭層から出土したものである。鑄1・鑄2は、断面で4分の1を残す先端部に近い資料である。鑄1は最大長約11cm、厚さ約2.8cmで、色調は橙色（2.5YR6/8）を呈するが、先端に近い部分は被熱により赤褐色（10R4/4）に変色している。復元直径は9.1cm、内径は4.0cmである。鑄2は最大長約11.7cm、厚さ3.0cmで、色調は橙色（5YR6/6）を呈するが、鑄1と同様に先端に近い部分は被熱により焦げて黒褐色（10YR3/1）に変色している。復元直径は9.6cm、内径は5.4cmと大きい。鑄3は最大長約5.8cm、厚さ約2.8cmの、断面で4分の1を残す先端部の資料である。本来の色調は橙色（5YR7/8）だが、被熱により黒色化し、タール化した不純物が外面に付着する。復元直径は9.7cm、内径は3.5cmである。鑄4・鑄5は羽口の先端部に鉄滓が付着した資料である。鑄4は羽口の復元直径は9.7cm、内径は3.5cmで、先端から約7.8cm残存する。鑄5は羽口の復元直径は9.0cm、内径は3.6cmで、先端から約10.8cm残存する。ともに羽口の色調は橙色（5YR7/6）で、鑄5には炉壁内となる外面に篋で螺旋状に掻き破った痕跡がある。付着した鉄滓には炉壁との剥離面が残っており、羽口の取り付きは炉壁に対して77度前後である。

坩堝（図版21-1）鑄6は11-1区の盛土内から出土した坩堝片である。出土状況から時期は明らかでないが、方広寺造営期の鑄造に関わる遺物と考えられる。残存する最大長は約11cmで、壺下半部の外側に土を補充して器壁を厚くしている。補強土の厚さは上端で1.6cm、下端で2.4cm、上端での内径は約18cmである。内面に銅滓が付着しており、鑄銅に使用された坩堝である。

鑄型（図48、図版21-2）10-3区で検出した土坑42から、細片化した多量の大型鑄型や炉壁片が出土した。そのうち、鑄7～9は大型鑄型で、砂礫を多量に含み、スサ混入による細かい空洞も観察できる。鑄7と鑄8は、緩やかな曲率をもつ厚さ8cm前後のブロック状の土製品で、凸面側に真土が付着することから中子と考えられる。鑄7では表面に縦方向の強い指ナデで凹凸面をつくり、真土の付着の強化をはかっている。鑄造9は逆に凹面側に真土が残存する外型の資料で、鑄7と同様に縦方向の指ナデを施して、その上に真土を塗る。色調は浅黄橙色（7.5YR8/6）から橙色（7.5YR7/6）を呈し、表面側は被熱で赤みを帯びる。これらの鑄型は単体で使用するものではなく、複数の鑄型を多数組み合わせることで全体型を形成し、大型製品を鑄造したのであろう。

炉壁（図48、図版21-2）鑄10と鑄11は、椀状の形態を示す厚さ7cm前後の大型炉の破片である。砂礫を多量に含み、灰色（N6/～5/）を呈する。鑄10の内面上半には炉内で分離浮遊した銅滓が付着しており、側面から外側へ銅滓を流し出したような痕跡も観察できる。鑄11は内面に銅滓が付着しないことから、炉内でも上方に位置する部材であろう。鑄11の断面観察による

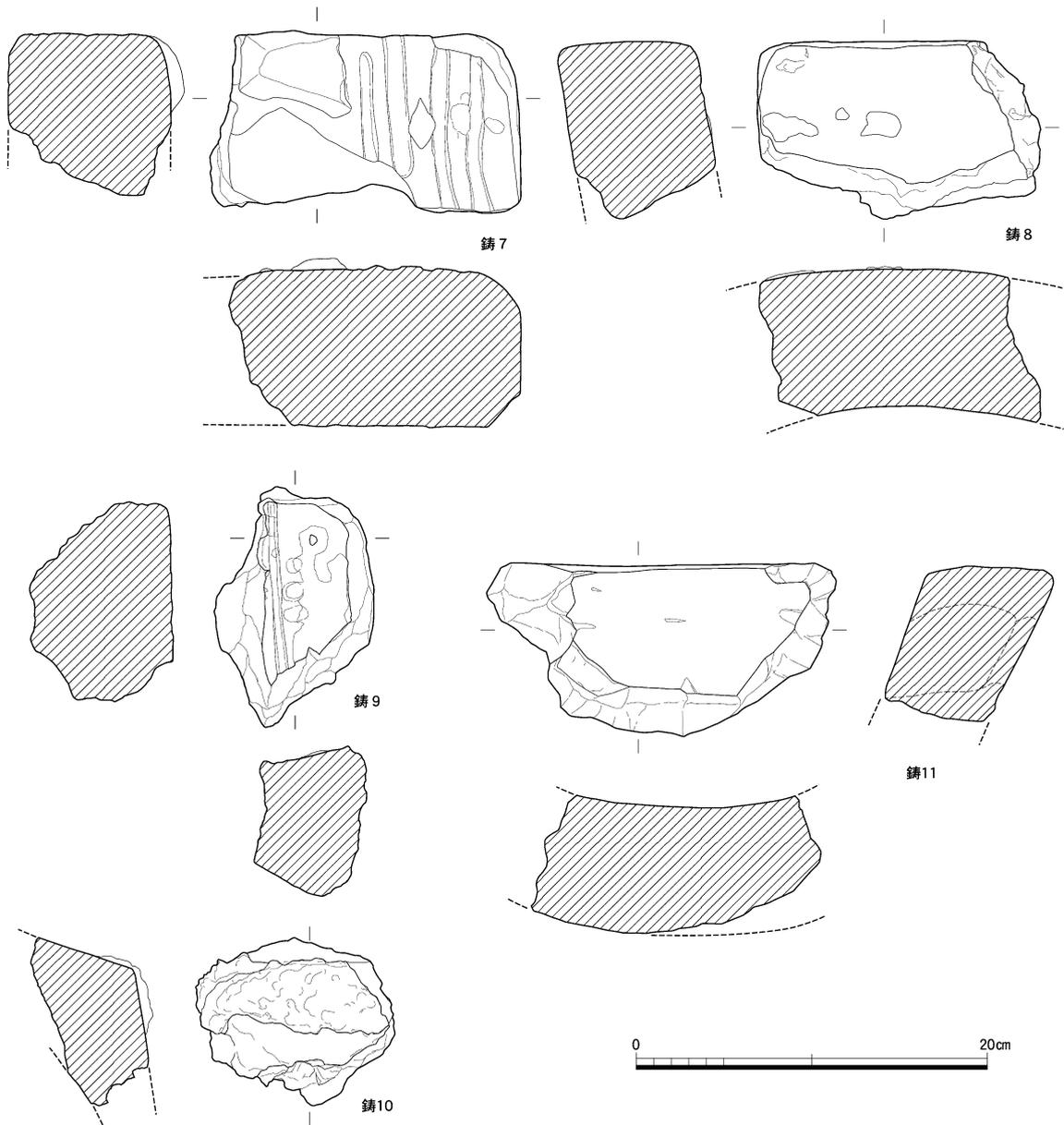


図 48 鑄型・炉壁実測図（1：4）

と、太紐状の粘土塊を積み上げて成形し、表面に粘土を厚く塗って仕上げている。

鉄滓（図版 22） 方広寺整地層内の炭層から、約 20.5 kg の鉄滓が出土した。鞆羽口に付着した資料（鑄 4・鑄 5）もあり、大仏殿造営の際に必要な多量の建築金物を現場で生産し、鍛錬鍛冶の副産物である鉄滓を壊れた鞆羽口とともに、整地層内で一括して廃棄したのであろう。

註

- 1) 出土土器の編年観は以下の論文に準拠している。小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 2) 輸入陶磁器の型式分類については、以下の文献に準拠している。『大宰府条坊跡 - 陶磁器分類編 -』太宰府市教育委員会 2000 年

5. ま と め

(1) 方広寺造営以前の遺構変遷について

今回の調査では、大半が方広寺の面で遺構保護を行ったが、一部下層の調査において平安時代後期から方広寺造営直前まで機能した道路の変遷と、道路西側の宅地利用の一端を明らかにした。道路遺構は調査区北方の3-4区および3-7区で確認していたが、今回の調査でその細かい変遷を復元することが可能となったのは大きな成果である。

平安時代後期の道路は西側溝として溝270を検出しており、3次調査では溝3-149につながる。溝の振れは溝270だけみると真北だが、溝3-149と併せてみると北に対して東へ約2°振れている。また、3次調査では東側溝を検出できなかったが、今回の調査で東側溝と考えられる溝150を検出し、路面幅が4.5～4.8mの道路であることが確定した。道路の西側では路面に面して柱間約4.2m(14尺)の棟門(門1)を検出しており、法住寺北殿の北方に所在した邸宅に関連する遺構と想定することができよう。残念ながら邸宅内部の構成は平常展示館の建設によって遺構が壊されており明らかでないが、これまで法住寺北殿に関する遺構は検出されておらず北殿北方の空間構成を考えるうえで重要な資料を提示できた。

そして、少なくとも室町時代には、路面の位置が若干東へ移動し、西側の宅地は南北に分割される。宅地内の構成は平安時代後期と同様に明らかでないが、門の位置で敷地が分割され、北側の宅地では棟門の南側柱も検出している。また、建物としてのまとまりは認められないが、根石をもつ柱穴を多く検出しており、宅地の細分化の進行に伴い多くの建物が道路に面して建てられるようになったと考えられる。ちなみに、平常展示館西側で行った3-8区でも鎌倉時代から室町時代の南北路面を検出しており、中世前期において法住寺殿と六波羅地域とを結ぶ多くの南北路が当地域に設けられたことを示している。また、14世紀前半には当地北方の渋谷に真宗の仏光寺が山科より移転されており、六波羅衰退後も寺勢を強めた仏光寺との関係で道路が維持されたことも想定できる¹⁾。なお、3-8区の南北路が今回検出した道路と同様に法住寺殿期から路面を踏襲しているのならば、両道路間の距離は約80mであり平安時代後期の邸宅の東西幅を考えるうえで示唆的といえる。

このように室町時代中期まで多くの宅地が道路沿いに建てられた当地域も、室町時代後期には宅地はほとんど姿を消していったことが遺構密度の極端な低下から窺うことができる。その歴史的背景には、応仁乱後における仏光寺の衰退が影響していると考えられる。天正14年の方広寺造営において仏光寺は五条坊門高倉に移されており、当地の南北路は大仏殿造営の資材搬入路となり、路面上層の石敷き地業が行われたのであろう。そして、大仏殿造営につづく築地あるいは回廊造営に際して整地層で石敷き道路は埋められ、南門北方の伽藍地内に取り込まれたと考えられる。

京都国立博物館の敷地周辺は、法住寺殿の造営にはじまり六波羅探題との関係や仏光寺の移転

平安時代後期

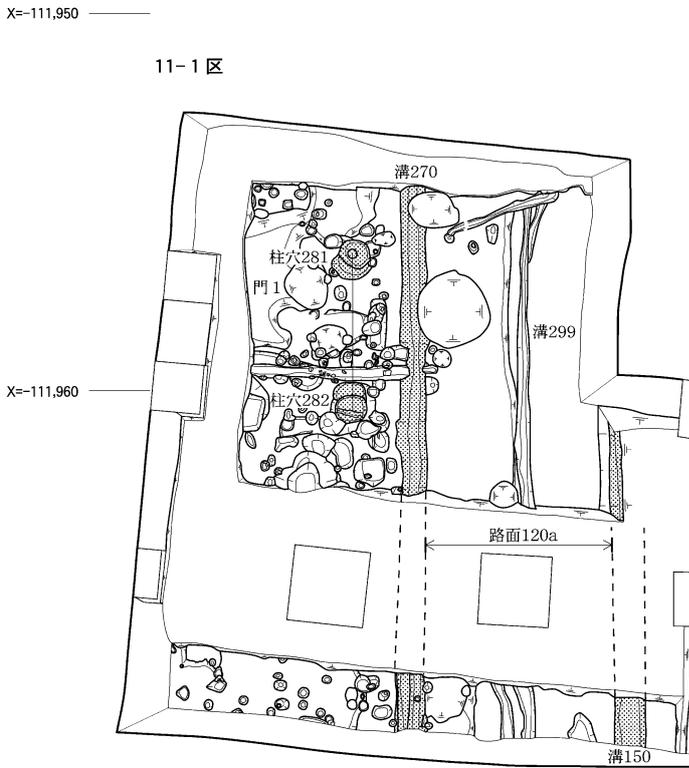
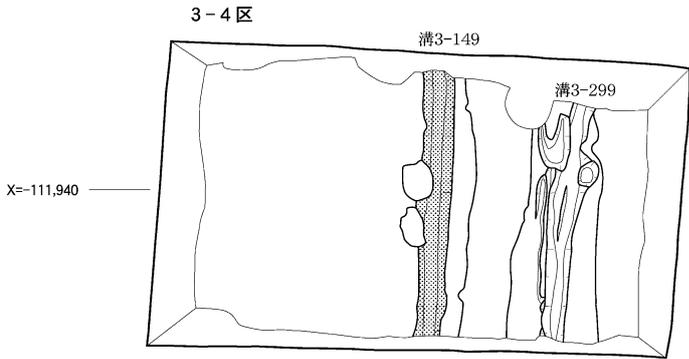
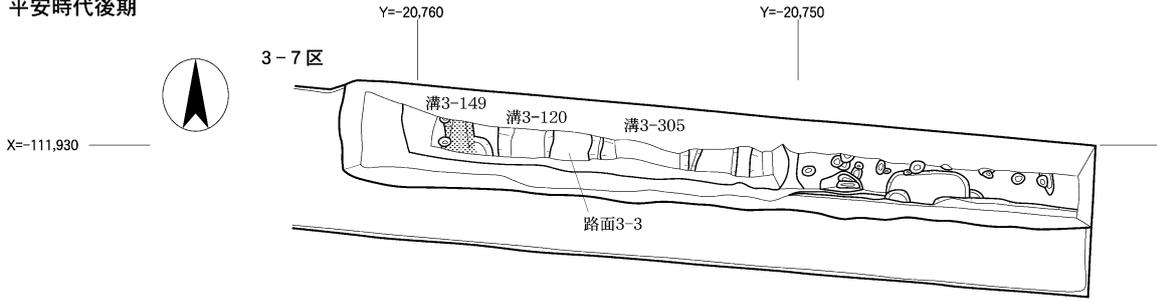


図49 平安時代後期路面全体図 (1 : 200)

室町時代

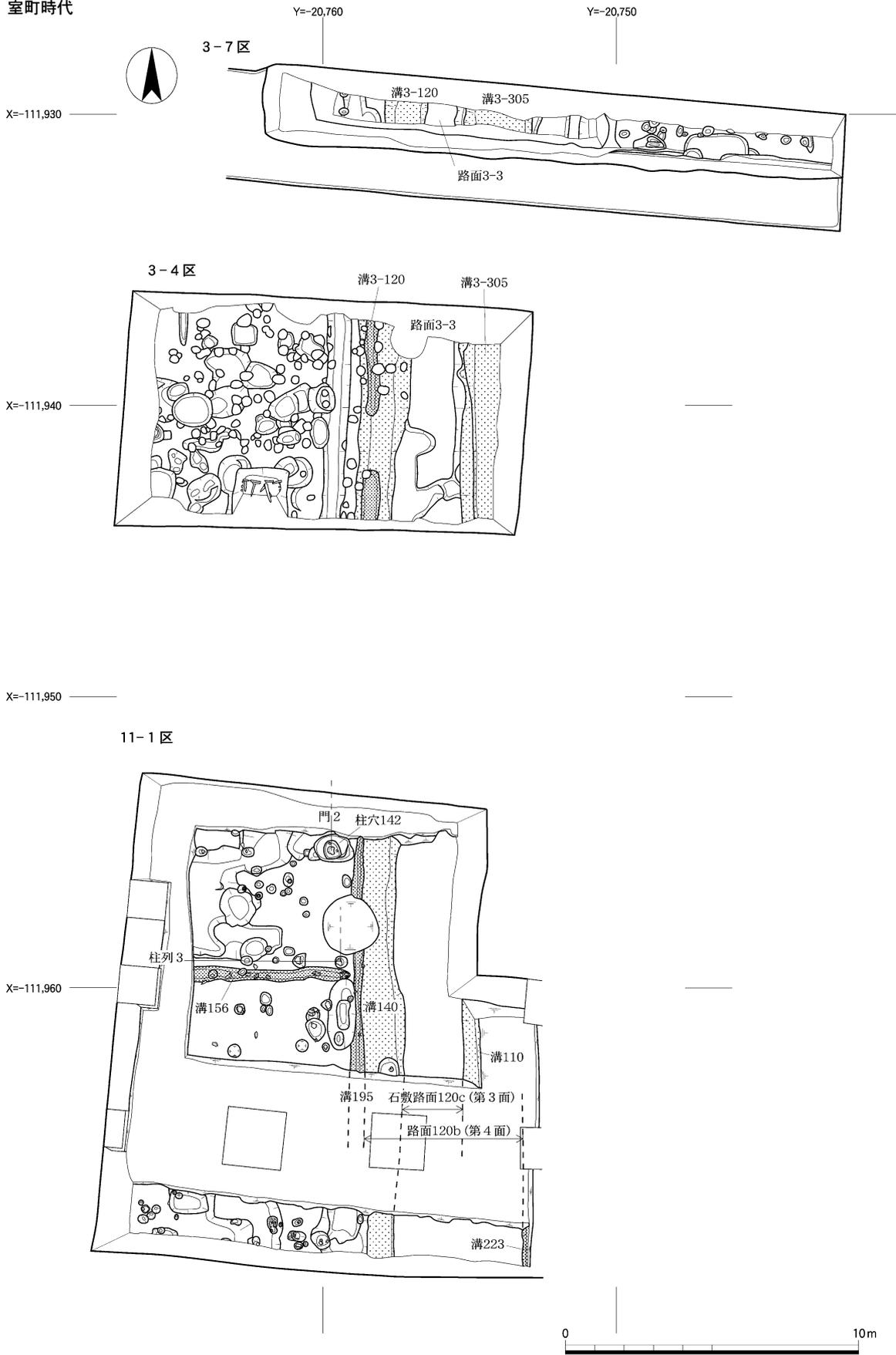


図50 室町時代路面全体図 (1:200)

造営など複雑な歴史をもっており、遺跡も歴史的経緯に対応して複雑な様相を帯びている。東大路通り沿いの11-2区で検出した堀遺構も、方広寺造営以前に堀をもつ区画がこの地に存在したことを示しており、区画の性格について興味をもたれるところである。方広寺の問題だけでなく、今後は下層遺構にも着目して考古学的に東山七条末の歴史を復元していく必要がある。

(2) 方広寺南回廊周辺における造営過程

10次調査では、方広寺南回廊の礎石根石群を新たに検出し、回廊遺構の遺存範囲を確定できた。9次調査までの所見と合わせると、回廊遺構は南門から東へ9間分残っていることを確認したことになる。根石群の検出状況が良好な北側柱で造営の振れをみると、南回廊は西に対して北に4°30′ほど振れている。南門については、3次調査によって八脚門であることが確認されていたが、10-1・4区の調査で北辺に溝状の基礎地業を施していることが判明した。『洛中洛外図』の諸本に描かれた南門では基壇は表現されておらず、今回検出した地業は南門北辺に雨落ち溝などの構築物が存在したことを示唆している。

また、回廊内における土地造成の痕跡を10-1・3・4区と11-1区で検出し、大仏殿造営過程の一端を明らかにすることができた。方広寺遺構面は調査区東端では基盤層になっているが、西にいくに従い小さな谷地形などを丁寧に埋めて平坦地を作っていく。この造成過程は東から順次埋め立てるのではなく、当初は南門の位置にあたる平安時代後期からの南北道路を再利用して石敷きの資材搬入路を確保し、その後東西の造成を行い最終的に石敷き路面も整地して埋めている。秀頼期の南門の位置もこの旧路面に規制されたと考えられる。

大仏殿の造成という大きな視点からこれらの整地地業をみると、基盤層と盛土の変換点を確認したことによって、大仏殿を建立するのに東側1/3は斜面をカットし、西側は盛り土を行って平場を造成したことになる。ちなみに西側の石塁は高さ約3mあり、単純に計算すると大仏殿の平場全体を造成するのに、約55,000m³の盛土を行ったことになる。方広寺は秀吉が関白となり豊臣姓を賜った翌年、天正14年(1586)に造営が始まった。天正16年5月には「京ニ八大仏建立トテ、石壇ヲツミ土ヲ上テ、其上ニテ洛中上下ノ衆ニ餅酒下行シテヲラセラルル」(『多聞院日記』)として造成事業が行われた様子が窺える。大仏殿の造成に石塁を積み上げ、餅酒を振る舞って上京および下京の町衆をその上で躍らせているのだが、上京から2000人、下京から2000人が動員されたと伝えられており、京の町衆を造成地上で踊らせることによって大仏殿の基盤を築き固めさせたのが実態のようである。²⁾回廊下層の整地は秀頼期の補修造成が含まれている可能性もあるが、大仏殿造成の整地土の大半はこの時のものと考えられよう。

さらに、10-2・5区で明らかになったように、石塁の裏込めの中には石仏や五輪塔などの石造仏が多数含まれており、中には意図的に叩き割られたものもある。大仏殿の礎造りに京の町衆の参加を強要するとともに、彼らの素朴な信仰対象をも部材として駆り出させたところに、方広寺造営の本質が現れているといえよう。天正16年7月に発布された有名な刀狩令では、百姓から武器を徴収する口実として大仏殿の部材利用による仏恩が強調されている。また、耳塚が大仏殿の

正面に造営されるが、文禄・慶長の役の供養塔という性格だけでなく、仰ぎ見る民衆へのみせしめ効果も狙った可能性がある。方広寺は、天下統一を成し遂げた秀吉の偉業を讃え、永代にわたる豊臣氏の繁栄を祈念するために造営された寺院であり、宗教の名のもとに民衆支配を行う装置という側面も合わせもっていたのである。

(3) 方広寺大仏殿の復元試案

豊臣秀吉により造営（以下、天正度と記す）された東山大仏殿は、秀頼再建（以下、慶長度と記す）のものを含め、その変遷は複雑である。史料類からその変遷について述べるべきであるが、ここでは他に譲ることとする³⁾。

大仏殿は、これを取り囲む築地（天正度）ないしは回廊（慶長度）により一院をなしていたことがわかっている。また、塔・講堂の縄張りも行われたことが史料⁴⁾から窺うことができ、これらはこの一郭の中には到底収めることができず、鐘楼や三十三間堂を含む方広寺の寺域の中に想定するしかない。後述する史料類でわかるように、「洛陽大仏殿」・「京大仏」などと呼ばれた中には大仏殿本体、回廊、仁王門、南門が含み込まれている。したがって、混乱を避けるため、以下の文書中では、大仏殿や南門、あるいはこれを取り囲む石塁（天正度造営を継続）を含めた一郭を大仏殿院と呼び、大仏殿本体と区別することとする。

大仏殿院平面図の復元については、1998年の南門跡検出以降、調査の進展に伴いその都度修正加筆してきた経過がある。また各報告書やリーフレット京都などの発刊物にも、その時点での復元図を示してきた。ここでは、京都国立博物館新館建て替えに伴う一連の調査が終了した現段階で既往調査成果を集成したうえ、現時点での復元試案を示しておくこととする。しかし、この復元試案とて、いまだ大仏殿院の一部分の確定でのものであり、仁王門の位置確定など今後の調査の進展に待つところ大であることを断っておきたい。

1) 大仏殿院検出遺構の概要

復元図を作成するにあたり、これまでに実施した発掘調査によって確定できた部分（図51）について各報告書⁵⁾からその概略を以下に示す。調査区の配置については、図62を参照していただきたい。

1 大仏殿

・基壇南面地覆石（2000年度調査⁶⁾4区）

東西方向に並ぶ新旧2時期の地覆石列を検出した。新旧の南北差は約1.9mで、慶長度の基壇が南へ延びたことがわかる。天正度地覆石は3石を確認した。慶長度基壇の地覆石は2石を確認し、南階段地覆石へと続いていた。慶長度地覆石は、長さ85cm、奥行き45cm、高さ30～40cm、天正度地覆石は、長さ120cm以上、奥行き60cm、高さ35cmであった。

慶長度基壇には地覆石とともに南面階段取り付け部に羽目石も1石残存していた。幅70cm、厚さ70cm、高さ90cmであった。慶長度基壇の高さは、地覆石天端から基壇上面の四半敷石まで約1.45

Y=-20,800

Y=-20,700



X=-111,800

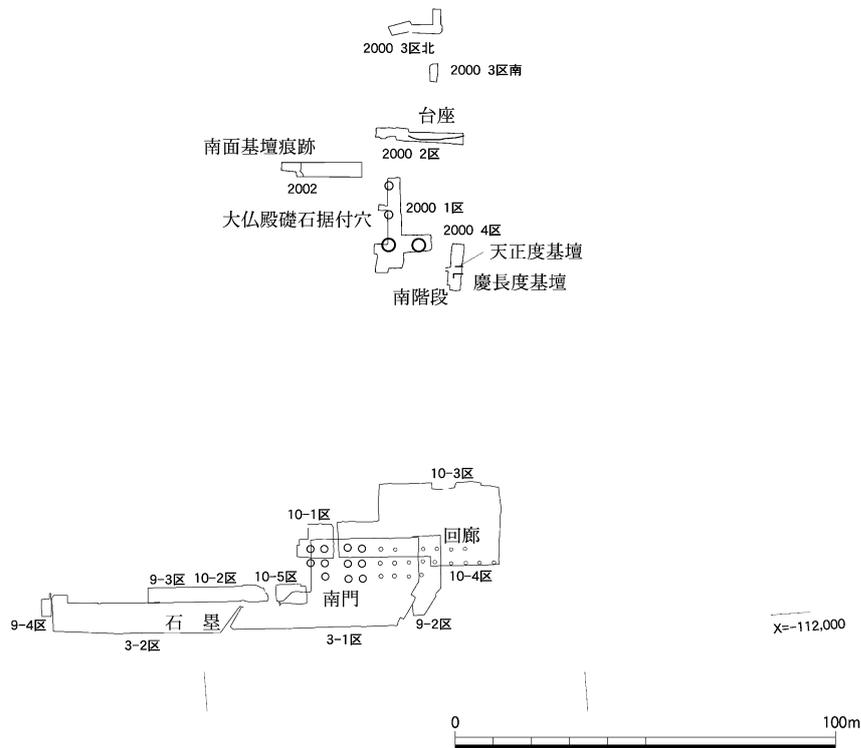


図 51 検出遺構配置図

mであった。

慶長度基壇の裏には、焼けた大仏瓦や焼土の堆積があった。天正度の大仏殿が慶長7年（1602）に焼失した時のものである。また、表側にも寛政10年（1798）の慶長度大仏殿焼失に伴う焼けた大仏瓦や焼土の堆積があった。いずれの時期にも雨落溝は築かれていなかったこともわかった。

・南面階段（2000年度調査4区）

慶長度基壇南面から続く南面階段東辺の一部を検出した。南面基壇に取り付く地覆石1石とこの上に乗る耳石1石が残存していた。耳石は、幅60cm、厚さ75cm、高さ62～86cmで、上面は階段の傾斜に沿って斜めに加工された部分も残存していた。

・台座（2000年度調査2区）

大仏殿中央に位置する石組みの台座の南辺を東西14mにわたり検出した。両端が屈曲すること

から、八角形と思われた。周辺に残る敷石もこれにあわせて加工されていた。周辺からは、塼が出土することから、台座上面は塼で化粧されていたものとみられる。

・敷石（2000年度調査1区）

基壇上面の化粧として、一辺約60cm、厚さ約20cm前後の花崗岩を四半に敷き詰めていることがわかった。表面の変色から火災を受けたことがわかる。寛政10年の慶長度大仏殿焼失時の痕跡とみられる。

・礎石据付穴（2000年度調査1区）

礎石は残存していなかったが、据付穴を計4箇所で見出した。南面側柱筋の据付穴の規模は、大仏殿にふさわしい巨大なもので、径5m前後の不正円の掘形を持ち、下部には拳大の礫をぎっしり詰め、礎石根固めには径0.7～1mの自然石を据えていることがわかった。内側2箇所の据付穴は、礎石を抜き取ったままの状況を示していた。いずれも各柱間は約8m前後であることはわかるものの、抜き取り穴が大きく正確な柱位置や柱間寸尺については明らかにできる状況ではなかった。

・基壇西面（正面）地覆石痕跡（2002年度調査⁷⁾）

大仏殿正面基壇の地覆石を据え付けるための溝状遺構を見出した。南北方向に残るこの溝は、幅65～80cmで深さ13cmが残存していた。南面で見出した地覆石据え付け面とはほぼ同じ標高にあることから、地覆石の抜き取り溝と考えた。

2 南門（京都国立博物館構内調査3-1区・10-1区）

南門基壇に関係する遺構は全て削平を受け残存していなかったが、礎石据付穴を10箇所で見出した。その配置から、桁行3間梁行2間の八脚門であることが確定した。

据付穴の平面形は径約1.8mの円形で、深さは約1m残存していた。内部は、拳大の礫と粘土を3回に分けて詰めていた。

柱間寸法は、桁行中央間が約6m、両脇間が約3.8m、梁行一間が約4mであることがわかった。

南門北側では、南門基壇の北端に関係する地業痕跡とみられる東西方向の溝状遺構を見出したものの基壇の大きさまでは確定できない状況であった。

3 回廊（京都国立博物館構内調査3-1区・9-2区・10-1区・10-3区）

基壇に関係する遺構は南門同様削平を受けていたが、南門に取り付く南面回廊の礎石据付穴を19箇所で見出した。その配置から、回廊は複廊であることもわかった。据付穴の掘形径は、残存状況が様々で、最大のもので約0.9mの円形で、深さは約0.5mであった。内部は、礫を密に入れたものが多いが、まばらなものもあった。

柱間数は、南門より東へ9間目までを確認している。桁行寸法は、南門に取り付く1間目が他の柱間より広く約4.5m、他が約3.7mであることがわかった。梁行一間は、桁行と同寸法である。

・南雨落溝

回廊柱筋から南へ約2mで東西方向に通る溝を見出した。約12.5m分を見出し、幅約1.4m、深さは0.35m残存していた。西へ向けて深くなる。断面形はU字形を呈していた。

・回廊下排水溝

南門に取り付く西1間目には南北方向に大仏殿院内の水を処理するための溝を検出した。石材などの残存はなく、構造は明らかにできなかった。

4 石塁（京都国立博物館構内調査3-1区・3-2区・9-4区）

大仏殿院の西正面、南および北面には石塁が築かれ、回廊を含む区域全体が盛土された土壇となっている。西面と北面および南面の一部が現存し、史跡方広寺石塁として保存されている。

調査で検出した石塁は、下部しか残っていないが、南面石塁の約67m分を確認した。石塁は西へ行くほど南へ若干広がる。これは現存する北面石塁にもみられ、西へ行くほど北へ広がっている。

5 石垣（京都国立博物館構内調査3-1区）

南門より南へ延びる道路の西肩に築いた南北方向の石垣を検出した。南面石塁から折れ曲がり南に延びる。石垣は約5m分を確認し、残存高は約1mであった。上面の路面と石垣下面との段差は約2mであった。路面は、南門から南へ延び蓮華王院南門まで真っ直ぐ続くようである。

2) 史料

大仏殿院を復元するにあたり、その平面配置の状況を知ることのできる史料3例を以下に示す。

なお、大仏殿の立面図に関係する指図類については、他に論考⁸⁾されているので参照いただきたい。

(イ)「洛陽大佛殿」『諸堂図』東京国立博物館蔵⁹⁾（以下、「イ」洛陽大佛殿」と略す）

元禄時代（17世紀末）の制作とされる諸堂図の中に収められている指図である。「洛陽大佛殿」には、慶長15年（1610）の記載があり、慶長17年に完成した秀頼再建時に関係するものであることがわかる。

図には、大仏殿断面図、大仏殿院平面図（図52）、三十三間堂平面図および立面図がある。平面図には、大仏殿・廻廊・五間楼門・南門八足門が描かれ、各々の寸尺（表3）が記されている。五間楼門の脇の間には、「二王」と「犬」とが記されている。

(ロ)「京大仏」『愚子見記四』¹⁰⁾（以下、「ロ」京大仏」と略す）

『愚子見記』は、9巻におよぶ大著で、京都御大工頭中井家の頭棟梁である平政隆による著書である。その内容は、江戸時代前期の建築全般を体系的に網羅しているものである。

この中に収められている図には、大仏殿図（図53）、大仏立面図、金剛垣立面図、「京大仏総構」（図54）、回廊断面図がある。

また、記載内容には、大仏殿の建立経過から始まり、大仏殿をはじめとして仁王門などの各々の規模（表4）、大仏や瓦などの細部に至る寸尺、大仏殿普請のための築山や堀川の記述までもがあり、他の史料に比べて詳細である。

(ハ)「大仏惣指図」『中井家旧蔵指図』¹¹⁾（以下、「ハ」大仏惣指図」と略す 図版23）

京都御大工頭である中井家旧蔵の一部の史料が京都府総合資料館に所蔵されている。その中に、大仏殿院および鐘撞堂を示した指図（図55・56）がある。大仏殿院には大仏殿・二王門・南門・あせ蔵・秀吉石塔の配置が描かれ、南に少し離れた位置には鐘撞堂が描かれている。また、大仏殿・

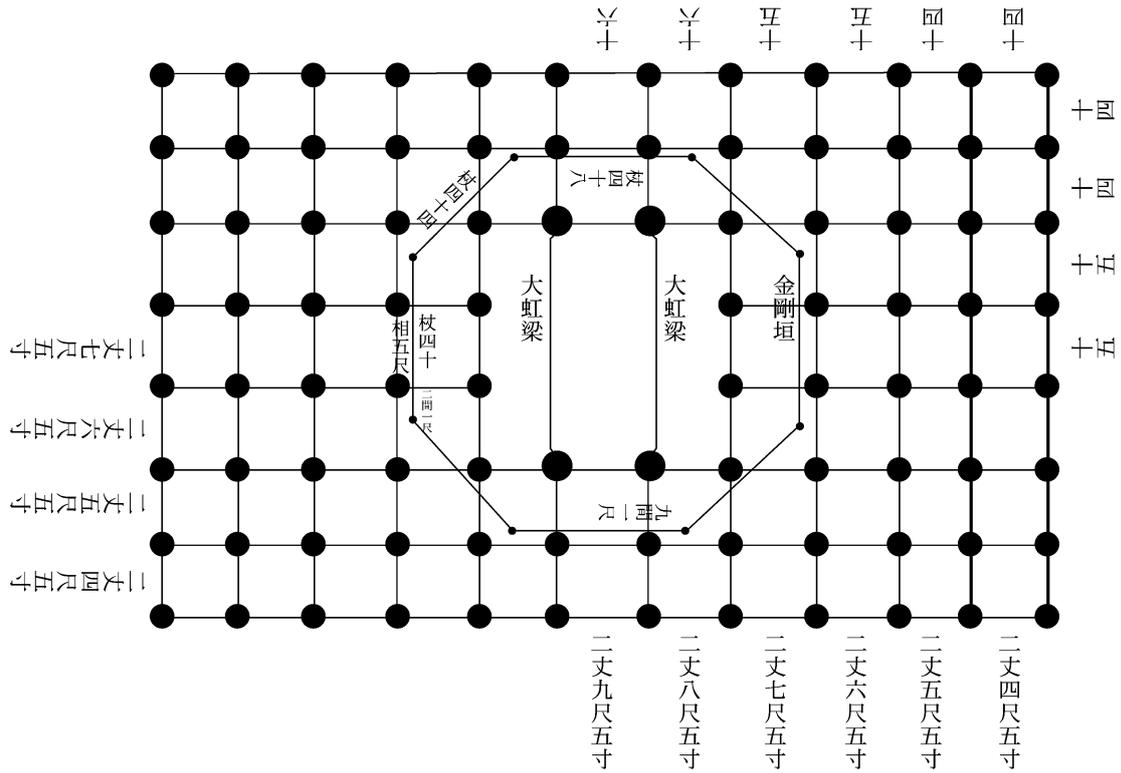


図 53 (口)「京大仏」(『愚子見記四』所収大仏殿図より作図)

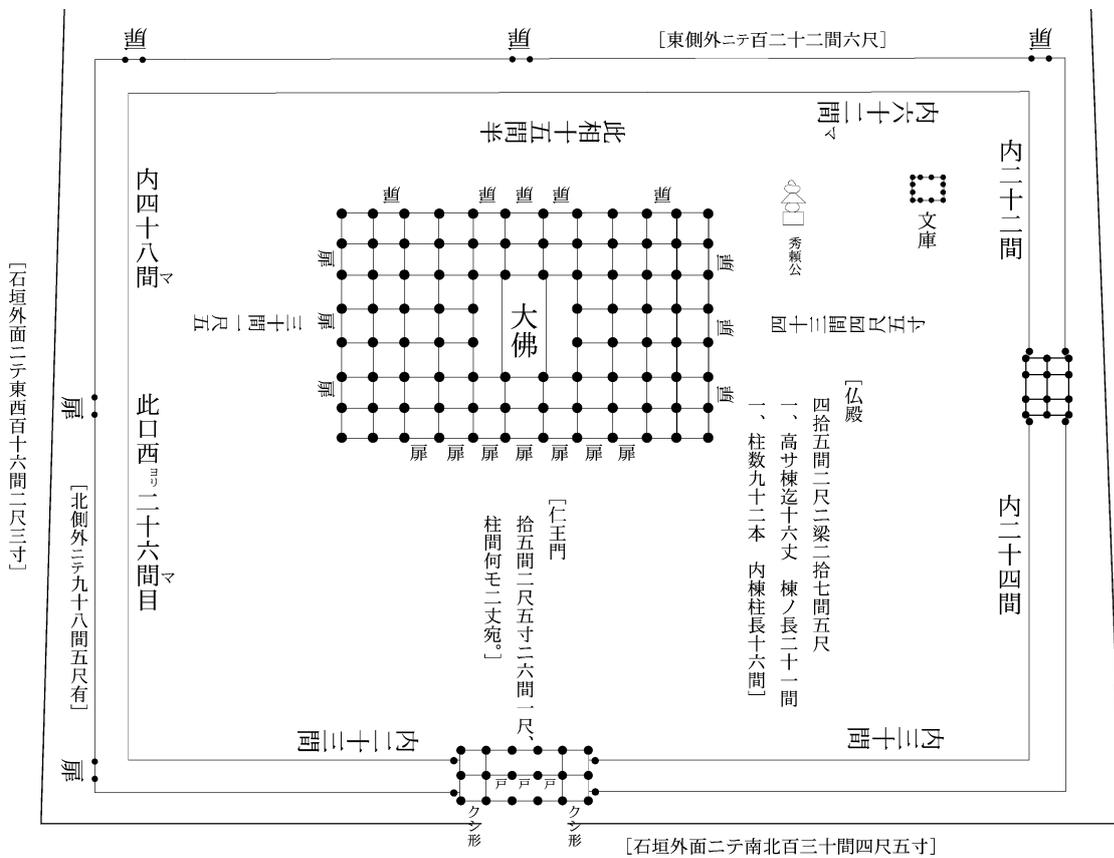


図 54 (口)「京大仏」(『愚子見記四』所収「京大仏総構」より作図) [] は文書記述より加筆

表4 『愚子見記四』記載主要寸尺

建物名	部位	間	尺、寸	丈数
地形 石垣外面	東西	116	2.3	75.63
	南北	130	4.5	84.95
仏殿	桁行	45	2	29.45
	梁行	27	5	18.05
	高さ棟まで			16
	棟の長さ	21		13.65
	柱数 92本			
	内棟柱長	16		10.4
仁王門	桁行	15	2.5	10
	梁行	6	1	4
	柱間			2
	柱差渡 中通		3.1	0.31
	柱差渡 側		2.6	0.26
	扉			
南門	桁行	6	6	4.5
	梁行	4	1	2.7
	柱差渡		2	0.2
	椽 中ノ間			
	椽 脇			
	椽 傍軒破風とも			
回廊	梁間	3	1.5	2.1
	柱間			1.05
	北側外	98	5	64.2
	東側外	122	6	79.9
鐘撞堂	桁行	4		2.6
	梁行	4		2.6
	柱差渡		3	0.3
文庫				0.87
大仏殿普請用意之覚	築山高さ	12		7.8
	築山南北	68		44.2
	築山東西	31		20.15
	山上轆轤 21			
	堀川長さ	80		52
	堀川広さ	16		10.4
	切組小屋長さ 12箇所	30		19.5
阿弥陀峰ノ堂 堂 西向き	三間四面 中八尺			8
	脇六尺			6
	屋根 瓦宝珠形			

二王門・南門・回廊・鐘撞堂の各建物には、柱位置も示されている。

図中には、各建物の規模や寸尺に関する記載が細かに記され、回廊に開く扉の位置も示されている。

さらに、大仏殿内には、「宗対馬守」・「三使」・「上官中官両長老」・「下官」・「御賄方御奉行」などと書かれた貼紙がある。これは、朝鮮通信使の「大仏前招宴¹²⁾」の配置を示しているものとみられる。

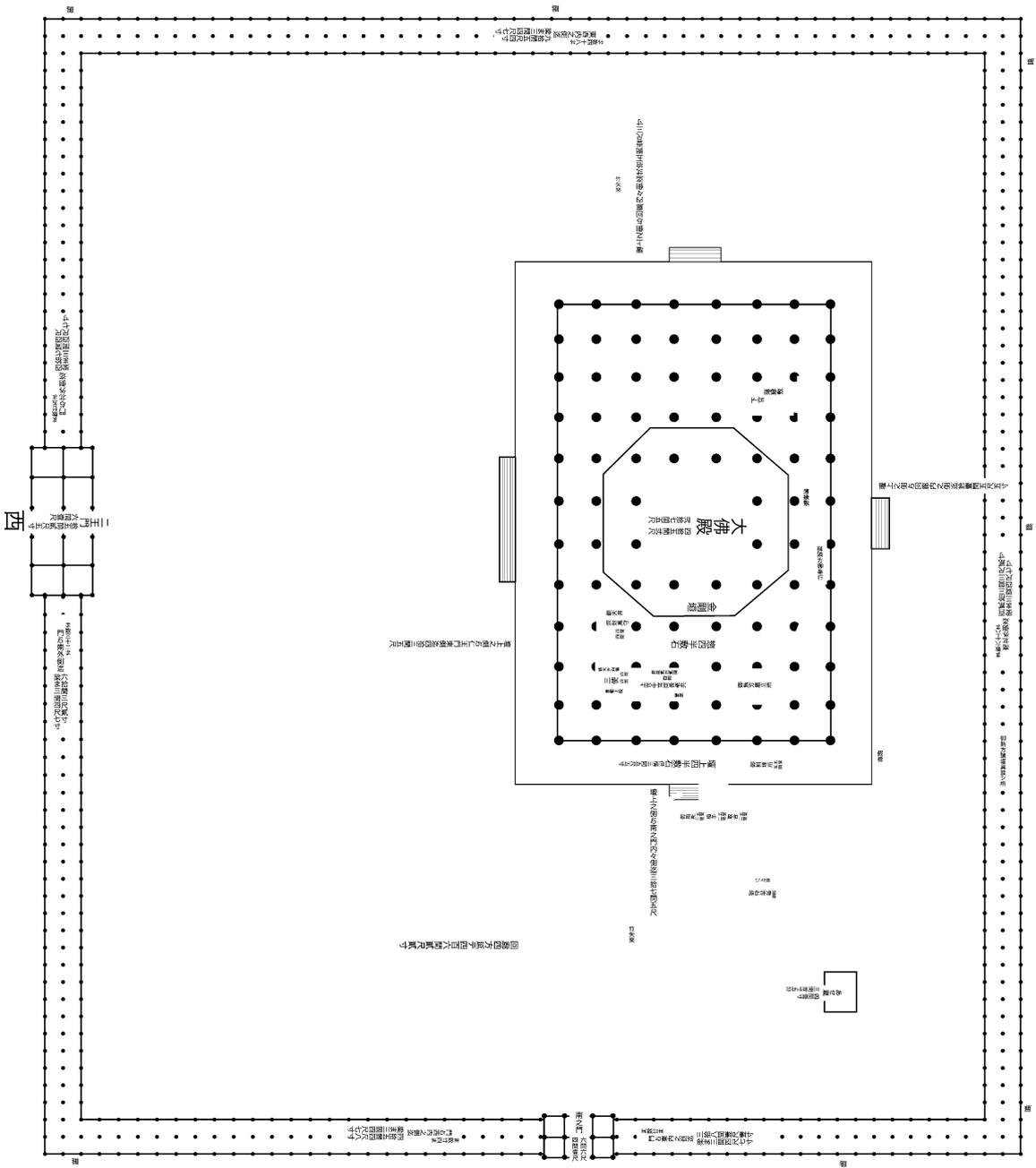
3) 復元試案

以上、発掘調査で確定できた遺構、また、復元にあたり参考となる指図等の史料類を示した。これらを元に復元にとりかかりたい。以下、間（マ）数は、マ数と記す。

ここで取り扱う復元試案は、慶長度（秀頼再建期）の大仏殿院の平面図とする。

1 基本設計

復元図を作成するにあたり、調査成果で得られた各遺構を基点（図 51 参照）に大極殿院全体を復元するには無理があり、指図類を含めて検討を加える必要があった。



南

図 55 (ハ)「大仏惣指図」記載内容図 (『中井家旧蔵指図』より作図)

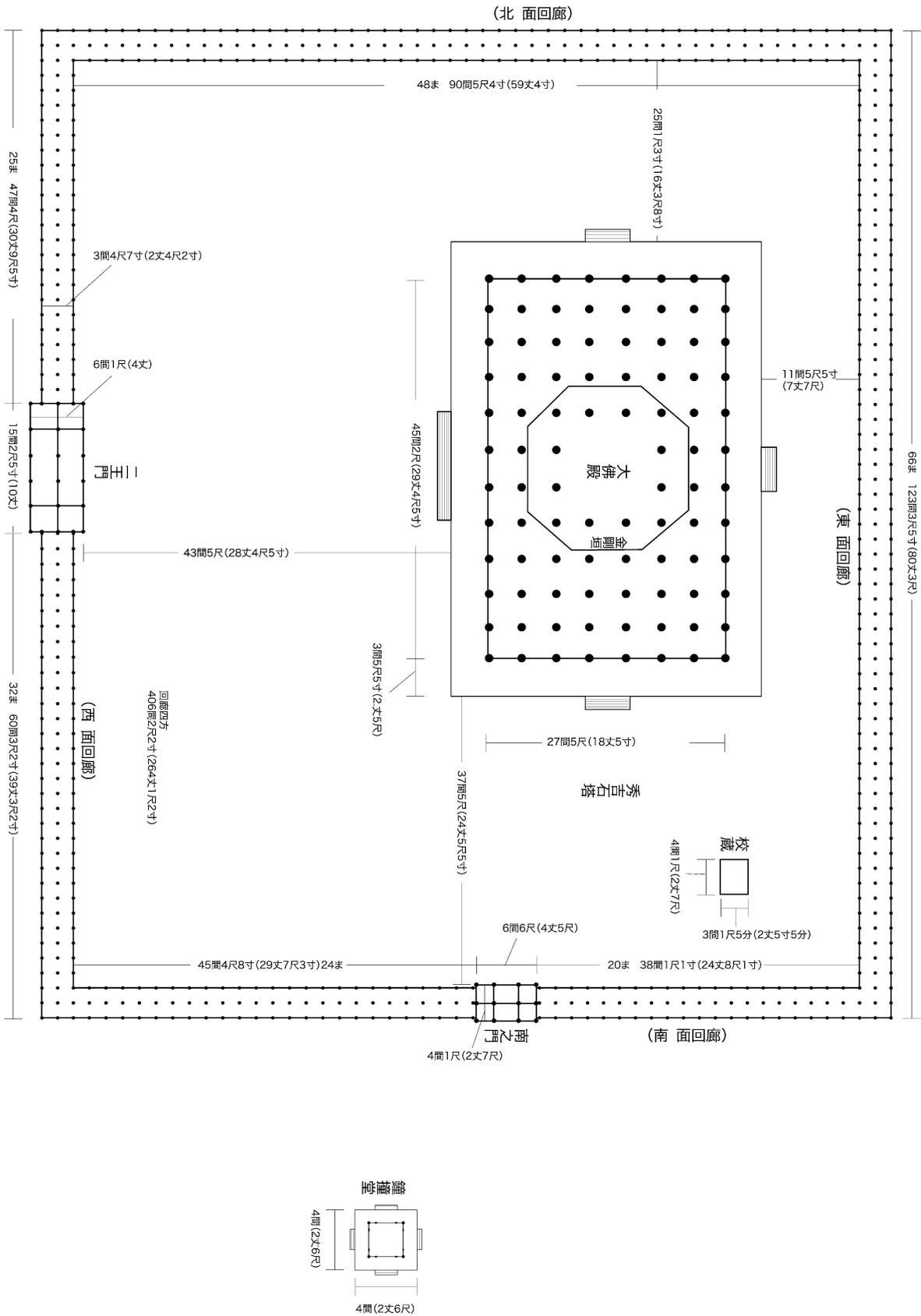


図 56 (ハ)「大仏惣指図」記載寸尺関係図(『中井家旧蔵指図』より作図)

復元作業を繰り返し行ううちに、平面図史料3例のうちの(ハ)「大仏惣指図」に記載されている寸尺関係に非常に近い復元図ができあがることがわかり、この図が大仏殿院の基本設計図であることに確信を持つにいたった。この図を整理すると丈尺単位で図57の平面設計図を描くことができる。

(ハ)「大仏惣指図」での記載寸法のうち、西面回廊と東面回廊との寸尺に3寸の差がみられるが、これは、西面回廊の寸尺80丈2尺7寸でないと、仁王門・大仏殿・東門の中軸がそろってこなくなり矛盾が生じる。したがって、東面回廊の記載が間違いであることがわかる。また、大仏殿と東面回廊との相の寸尺が7丈7尺とあるが、これは6丈7尺5寸でないと東西回廊との寸尺に矛盾をおこす。7丈7尺が何を意味しているかは不明である。

この設計図に1尺の実数値を得れば実際の規模が復元できることとなる。この解は、検出した大仏殿南面基壇の位置と南門跡までの距離(約73.5m)で決めることができる。この距離は、(ハ)「大仏惣指図」では24.55丈にあたることから、1尺の実長は30cmに近い値であることが決められ、復元はこの数値で行うこととした。

2 各建物の復元

上述した大仏殿院寸尺関係図により、各建物間での配置関係や規模が全て確定することとなった。これに、実際に検出された遺構を基点に復元することで現地での復元が可能となる。

以下、各建物を検出遺構とともに復元する。各史料に記載される寸尺は、表5主要建物寸尺比較表に示したとおりである。

・大仏殿(図58)

位置と規模

位置は、南面基壇、階段、柱据付穴の検出位置からほぼ確定できる。

規模については、(イ)「洛陽大仏殿」と(ロ)「京大仏」(ハ)「大仏惣指図」では異なっているが、その差はわずかであり、柱位置もほとんど変わらず、実際に検出した礎石据付穴では決めることはできない。そのため、復元図としては、(ハ)「大仏惣指図」と同規模で柱位置が示されている(ロ)「京大仏」に示されている柱配置で復元した。

検出した礎石据付穴のうち側柱筋の2個は、東側のものが南面階段の位置関係から梁行中央間の西側のものであることがわかる。

基壇

壇上幅(柱中墨より)については、(ハ)「大仏惣指図」では2.5丈、「方広寺大仏殿諸建物并三十三間堂建地割図」¹³⁾では2.48丈、「京都大仏本堂並釈迦像間尺覚書(大工棟梁兒玉重矩覚書の内)」¹⁴⁾では2.45丈とある。

実際の検出遺構としては、南面地覆石や基壇羽目石があるが、上述の大仏殿復元の側柱筋想定心より羽目石南辺までは約7.5mを測る。したがって、基壇規模は、大仏殿四周に2.5丈を加えたものを復元した。

基壇の高さは、基壇上面の四半敷化粧石と地覆石の検出から1.45mあることがわかる。(ロ)「京

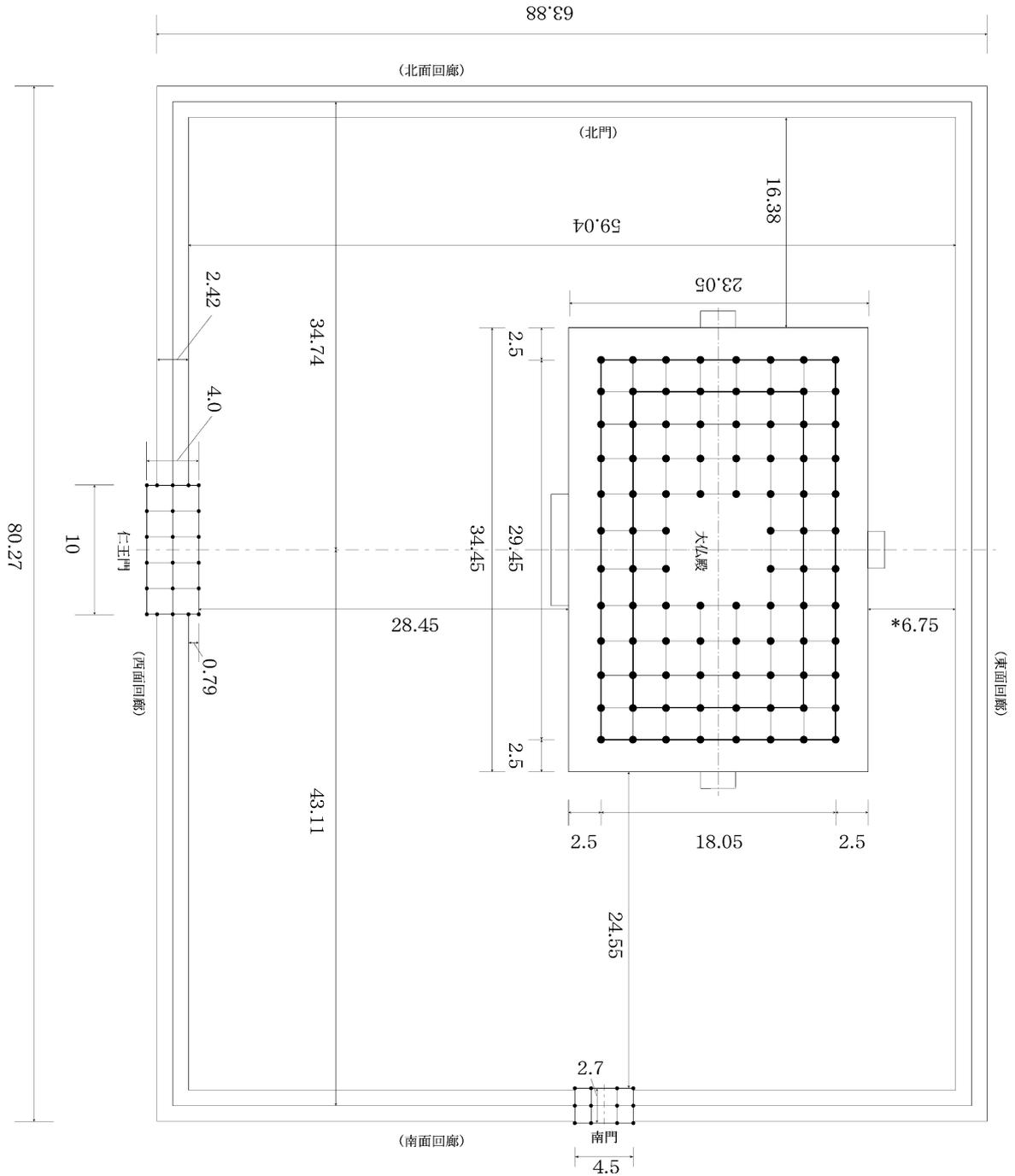


図 57 大仏殿院復元寸尺関係図 (八)「大仏惣指図」『中井家旧蔵指図』を元に作図 (単位：丈)

表 5 各史料記載主要建物寸尺比較表 (単位：丈)

史料名	大仏殿		回廊			仁王門		南門	
	桁行	梁行	南北 (外頬)	東西 (外頬)	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行
(イ)「洛陽大仏殿」	29.52	18.08	80.27	63.84	2.42	10	4	4.5	2.7
(ロ)『愚子見記』	29.45	18.05	79.9	64.2	2.1	10	4	4.5	2.7
(ハ)「中井家旧蔵絵図」	29.45	18.05	80.3	59.04 (内)	2.42	10	4	4.5	2.7

1 間：6.5尺で計算

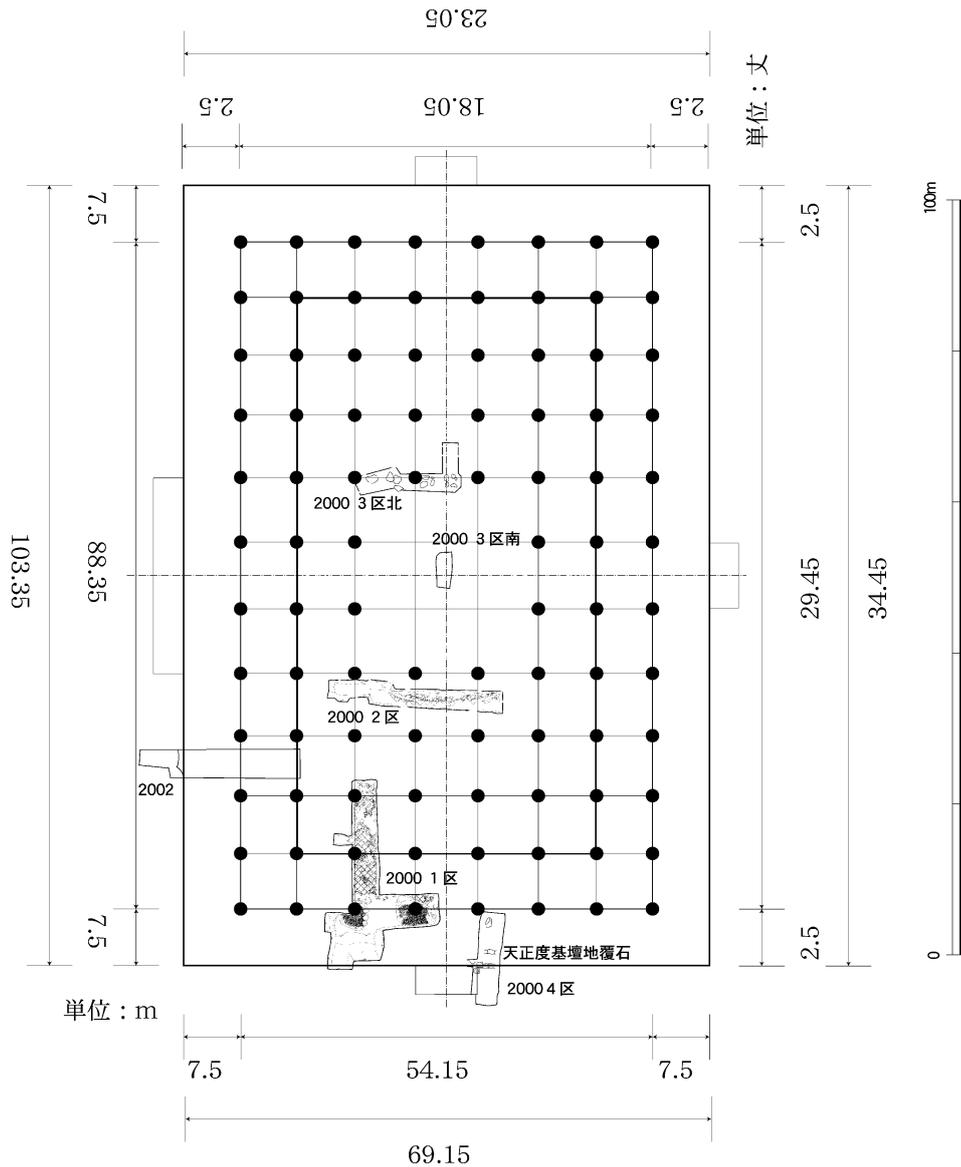


図 58 大仏殿復元図

大仏」では、5尺と記されている。

階段

検出遺構から南面階段のみ確定できているが、大仏殿基壇に取り付く階段は、各史料から各面中央の4箇所に設けられていたことがわかる。正面（西面）のみ3マ分で、他の3面は1マ分であることが検出遺構からもわかる。

（口）「京大仏」には、「雁木六段、蹴上ケ六寸五分宛。但西八柱間三間通り三方ハ中ノ間一間宛也。壇広四間。」また、「方広寺大仏殿諸建物并三十三間堂建地割図」には、「ガンギ七寸六分半」とある。

台座（図 59）

大仏殿中央南側で検出した台座跡は、当時の調査報告書やリーフレットおよび設置された現地説明板では八角形として復元したものである。今回、大仏殿の復元と各史料類を整理する中でその位置が大仏蓮華座の中にあることが判明した。

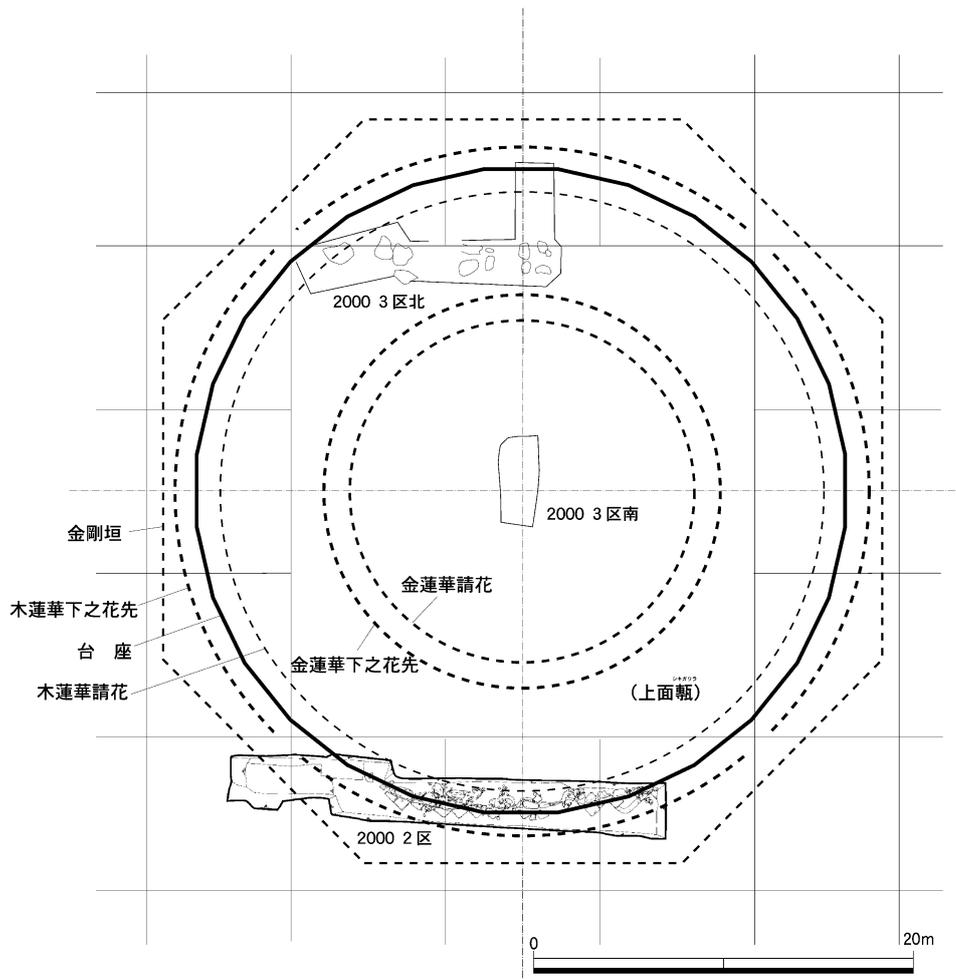


図 59 大仏台座復元図

台座跡を良く観察すると、四半敷の花崗岩敷石（60 cm角）に残る台座との取り付け角度が八角形に取り付く角度ではなく、円形に近い多角形のそれであることがわかった。ただし、検出した遺構は削平や変形を受け、角数までは確定できない状況にある。ちなみに、現東大寺大仏の石座は¹⁵⁾28角形である。

大仏殿中央の配置は、(イ)「洛陽大仏殿」や(ロ)「京大仏」の記述から、外から金剛垣（柵）、木蓮華、金蓮華の順に中心へと向かい大仏本体がこの上に座る。その様子は、(ロ)「京大仏」の所載図からも窺うことができる。(イ)「洛陽大仏殿」の寸尺は、外側の木蓮華が径「拾八間」高さ「壹丈」とあり、復元大仏殿中心から直径約 35.1 mの円を描くと、この台座跡の外側あたりに当たることがわかる。また、(ロ)「京大仏」には「下之花先金剛垣ノ中墨ヨリ二尺入ル。」とあり、この台座の外側に木蓮華の下の花先が位置していることは明らかである。したがって、この台座は木蓮華の内側となり、金蓮華および内陣柱がこの上に置かれることとなる。台座上は、(ロ)「京大仏」に記述のある「甎（しきがわら）」となっている。調査でも甎が出土している。

・回廊

位置については、検出遺構から南面回廊が確定できているので、これを基点に復元することが

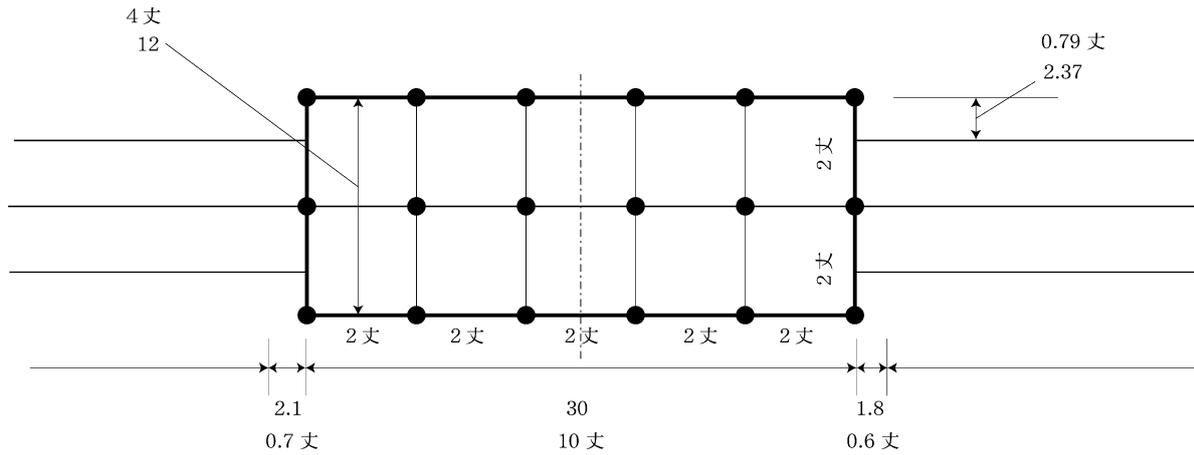


図 60 仁王門復元図

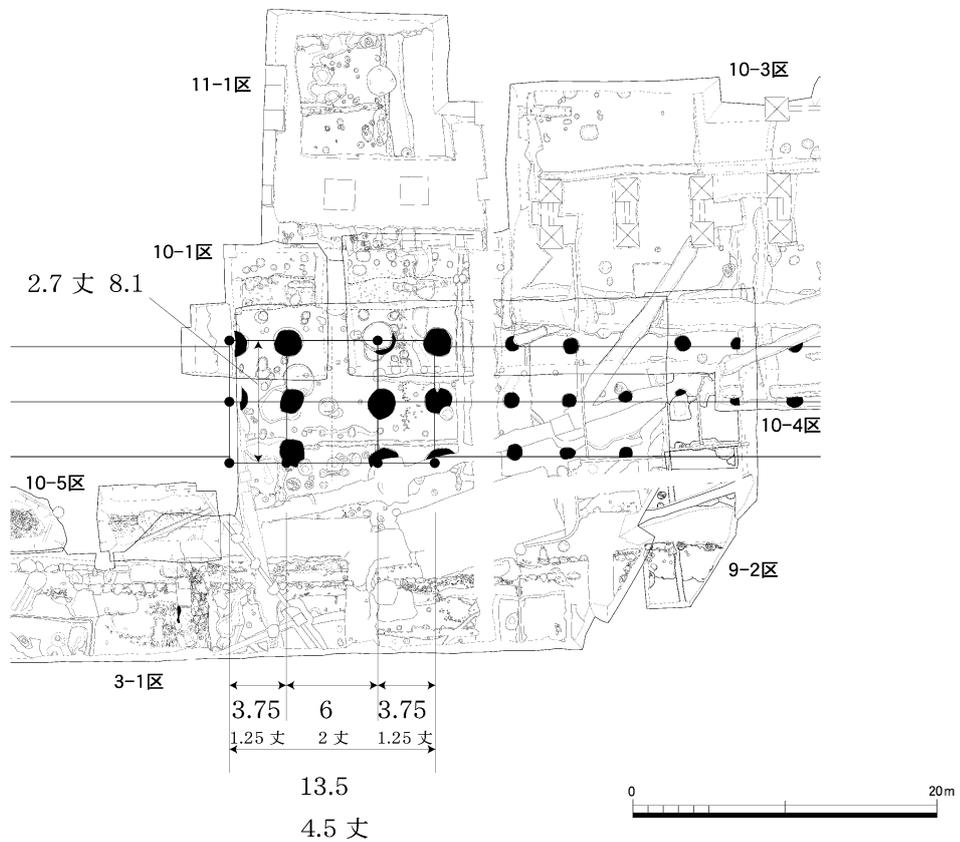


図 61 南門復元図

できる。

回廊は複廊で、その梁行は、各面とも複数の史料で合致する2丈4尺2寸である。桁行1マの長さについては、梁行の半分である1丈2尺1寸や北面回廊内間寸尺である59丈4寸を48マで割った1丈2尺3寸などで復元を試みたが、仁王門の取り付け寸尺に矛盾をおこすなど、現状では確定できない。今後の調査に委ねることとする。したがって、復元図には回廊柱位置を省いた。マ数は、外側で南北66マ、東西52マである。

回廊に開く扉の位置は、(イ)「洛陽大佛殿」、(ロ)「京大仏」、(ハ)「大仏惣指図」の指図から7箇所(北門・東門含む)とみられる。

・仁王門

位置については、(イ)「洛陽大佛殿」、(ロ)「京大仏」、(ハ)「大仏惣指図」、いずれの指図も大仏殿の中心軸線上に仁王門が置かれたことがわかる。

門から、両側に取り付く回廊の内マ数は、北側23マ、南側30マと表記されているが、正確にはこれに「捨間」が加わる。(ロ)「京大仏」には、回廊の項で「…但門際捨間有」とある。また、「方広寺大仏殿諸建物并三十三間堂建地割図」の仁王門建地割図にも捨間が描かれている。

規模については、各史料とも同寸法を記している。門の構造は、五間三戸の楼門で両脇間の表側には「二王」、裏側には「犬」が納められていたこと、仁王が納まる前面は火灯窓となっていたことがわかる。

・南門

位置については、検出遺構で確定している。

規模については、各史料とも同寸法を記しており、これに従い復元する。桁行4丈5尺の内訳は、礎石据付痕跡から中央間2丈、両脇間1丈2尺5寸に復元した。

・北門

北門の存在は、(イ)「洛陽大佛殿」でしか描かれておらず、(ロ)「京大仏」および(ハ)「大仏惣指図」では「扉」とだけ記されている。(ハ)「大仏惣指図」には、回廊に開く「扉」が7箇所記されている。

・石塁

石塁は、天正度(秀吉創建)のまま引き継がれ、一部改変はあるものの今もその姿が残る。天正度には、この石塁の上に築地が築かれていたことは、史料類から確かめることができ、石塁南西隅には築地寄柱の隅柱のものとみられる柱座¹⁶⁾が巨石の上に穿たれたものが残存している。

以上、各建物単位で復元について示したが、これらを1尺30cmとして復元配置させていくと、図62に示した現地復元が可能となる。

以上、各建物の復元寸尺を示し、その復元図を示した。ここに取り上げなかった天正度の検出遺構としては基壇南面地覆石があるが、慶長度地覆石より1.93m内側に位置している。これは天正度の大仏殿の屋根は二重で、下重のものが腰屋根であったものが、慶長度には柱位置はそのままに、四周廻りが裳階に変わったことにより、屋根先が延びたためのものである。¹⁷⁾

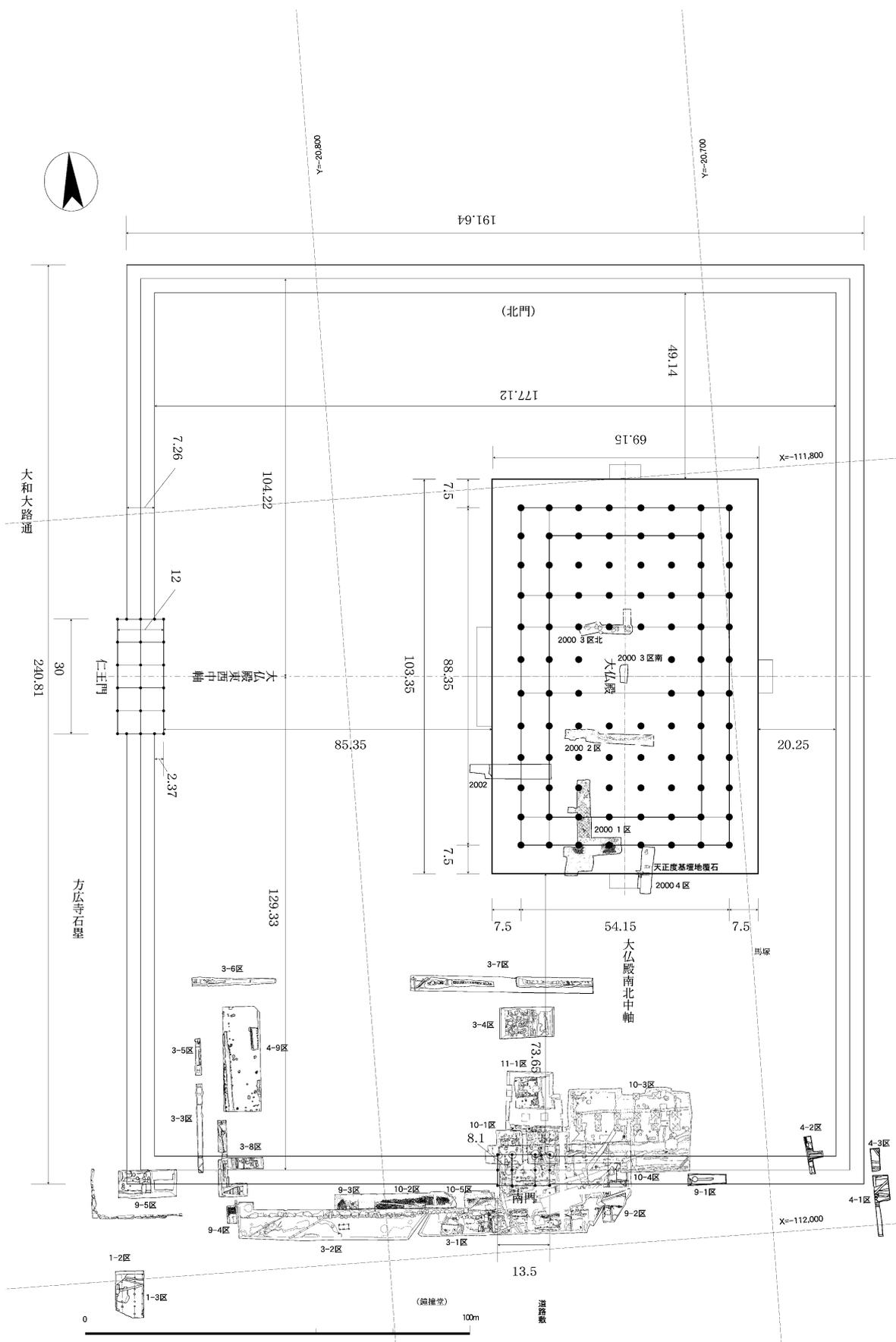


図 62 大仏殿院復元位置図 (単位：m)

表6 各建物復元寸尺一覧表

大仏殿復元規模		1間=6.5尺		1丈=3m	
部位	間	尺・寸	丈	実数値 (m)	
桁行	45	2	29.45	88.35	
梁行	27	5	18.05	54.15	

大仏殿基壇復元規模					
部位	間	尺・寸	丈	実数値 (m)	
南北 (桁行)	53		34.45	103.35	
東西 (梁行)	35	3	23.05	69.15	
高さ			0.54	1.62	
壇幅	3	5.5	2.5	7.50	
新旧基壇南北差			0.64	1.93	

回廊復元規模					
南北回廊長	間	間数	丈数	実数値	
	外	(66マ)	80.27	240.81	
	中央	(64マ)	77.85	233.55	
	内	(62マ)	75.43	226.29	
東西回廊長	間	間数	丈数	実数値	
	外	(52マ)	63.88	191.64	
	中央	(50マ)	61.46	184.38	
	内	(48マ)	59.04	177.12	

仁王門復元規模					
間	尺・寸	丈数	実数値 (m)		
桁行	15	2.5	10	30.00	
梁行	6	1	4	12.00	

南門復元規模					
間	尺・寸	丈数	実数値 (m)		
桁行	6	6	4.5	13.50	
梁行	4	1	2.7	8.10	
(中央間)	3	0.5	2	6.00	
(両脇間)	1	6	1.25	3.75	

4) まとめにかえて

・造営方位

伽藍の傾きについては、南面回廊跡および南門跡の一連の遺構からほぼ知ることができるが、距離的に短く全体の造営方位にはあてはめられない。今後の北面回廊に係る遺構の検出に委ねたい。ただし、西面石塁に平行させることでほぼ大過ないものとして作成した(図62)。その結果、復元図の第VI座標系での傾きは、北に対して東へ4度13分52秒となった。

この方位は、平安時代後期の法住寺殿の時代の地割を踏襲したものとみられる。法住寺殿関連の遺構は当報告書でも報告されているとおり、大仏殿院区域の下層でも確認されている。その中には、南北に通る道路状遺構の検出がある。この道路状遺構は、法住寺殿造営時代から大仏殿院造営直前まで使われていたものとみられる。この道路上に大仏殿院南門や大仏殿西辺が合致していることから、大仏殿院はこれを南北基準として設定されたものとみられる。

・方広寺の占地

方広寺全体の占地については、南方の三十三間堂を取り込んで構想されたことは太閤塀や諸門(西門・南門)の設置から明らかである。北面石塁から現三十三間堂南門までは南北約300mを測る。東西については、大和大路から東へ約220m地点に南北方向の段差(断層)があり、この付近が東限とみられる。この中に、大仏殿・講堂・塔が縄張されたことになるが、実際は大仏殿のみの

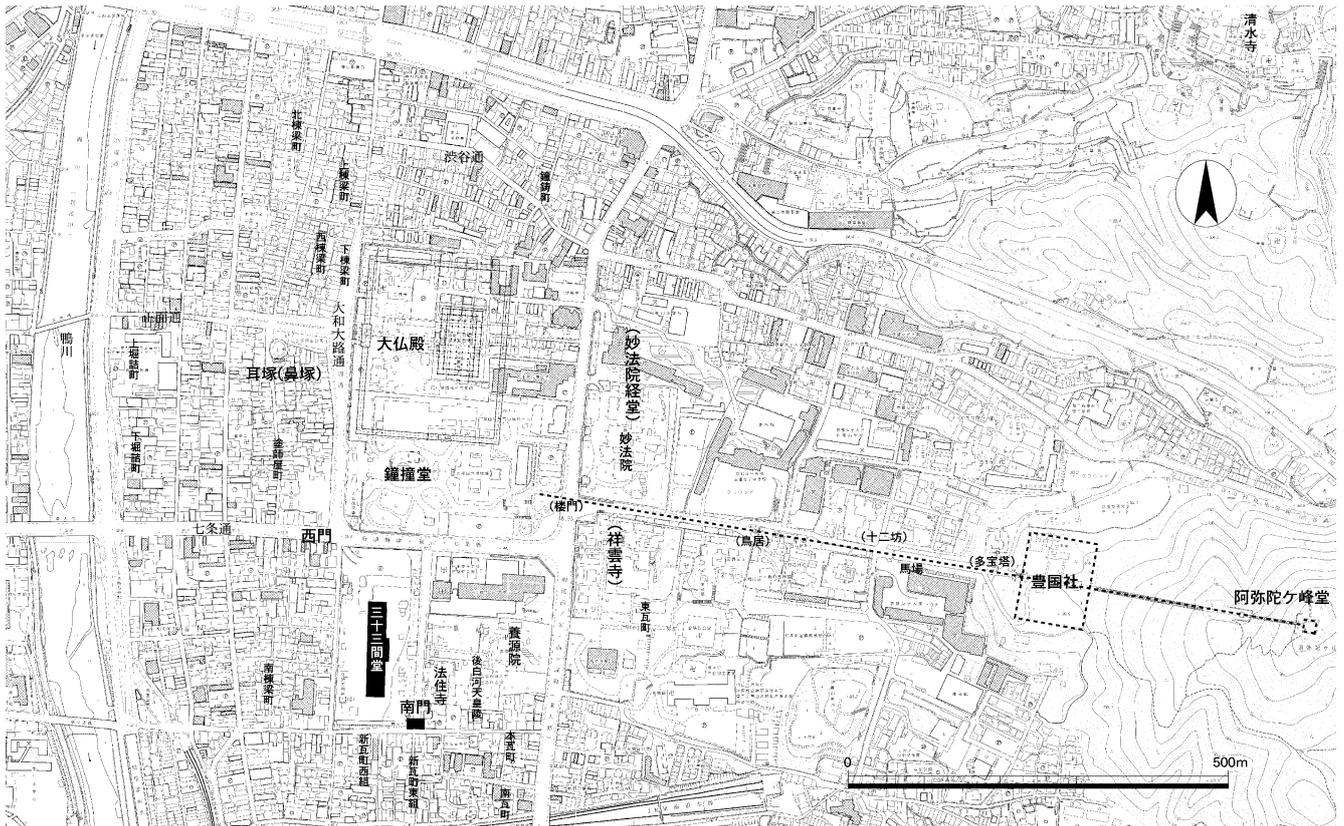


図 63 方広寺位置図 (方眼：109 m方眼)

造営で終わっている。

占地は、条里 109 m 方眼 (図 63) でみてみると、南北方向では大和大路およびその東の線が密接に関わっていることがわかる。

・方広寺周辺

周辺の現地名には、方広寺の造営に関係したものとみられる町名が今に残り、棟梁町・瓦町・塗師町などが点在している。また、鴨川に隣接して堀詰町があり、『愚子見記』に記載されている「堀川」との関連が考えられる。

また、この区域の東方には豊国社や阿弥陀ヶ峰堂 (豊国廟) が築かれている。秀吉から秀頼にかけて築き上げられたこれらの空間は、まさに豊臣家を象徴する一大拠点として構想されたものであろう。¹⁸⁾

最初に述べたように、方広寺大仏殿院の復元はまだその一部の確認しかできていない状況にあるが、洛中洛外図や指図類が多く伝わり、復元試案にまでこぎつけることができた。しかし、仁王門や北面回廊の位置確定、伽藍配置計画、天正度大仏殿と慶長度大仏殿との関係など、今後の調査、諸史料の研究に待つところが大きい。

復元試案に対し御批判ならびに御教示をお願いする次第である。

註

- 1) 『佛光寺の歴史と信仰』 思文閣出版 1989年
- 2) 河内将芳『秀吉の大仏造立』 法蔵館 2008年
- 3) - 1 前掲書註2参照。方広寺大仏殿の造営経過、変遷と共に、妙法院および豊国社を含めた一帯の造営についても触れられている。
- 2 『特別展 没後四〇〇年 木食応其ー秀吉から高野山を救った僧ー』 和歌山県立博物館 2008年。前田正明「方広寺の造営と応其」、芦田淳一「瓦にみる近世の幕開け」にて方広寺の歴史や造営について述べられている。また、この書の中には、中井政知氏蔵「方広寺大仏殿諸建物并三十三間堂建地割図」や東京国立博物館蔵「釈迦如来座像（京都大仏雛形）」も掲載されている。
- 4) 『義演准后日記』 慶長五年（1600）三月十八日条。前掲書註2参照。
- 5) 京都国立博物館構内発掘調査については、本書報告書以前の調査を集成した『京都国立博物館構内発掘調査報告書 一法住寺殿・六波羅正庁跡・方広寺跡ー』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊（財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年）を参照いただきたい。
- 6) 近藤知子・田中利津子「方広寺大仏殿跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 7) 田中利津子「方広寺大仏殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度 京都市文化市民局 2005年
- 8) 石田理恵・黒田龍二「東大寺大仏殿内建地割板図について」『鹿園雑集6』奈良国立文化財研究所 2002年。東大寺大仏殿関係6種、方広寺大仏殿関係6種を取り上げ大仏殿立面図について論考されているので参照いただきたい。
- 9) (イ)「洛陽大佛殿」国立歴史民俗博物館『古図に見る日本の建築』至文堂 1989年
- 10) (ロ)「京大仏」監修 太田博太郎 校注 内藤 晶『注釈愚子見記』井上書院 1988年
- 11) (ハ)「大仏惣指図」 「京都府総合資料館蔵中井家文書517 東大寺(方広寺)大仏殿指図万治年間(1658～1661) 貼絵図」(『中井家旧蔵絵図』[3] 14 大仏総指図)
・四分計 91.5 × 137.9 cm・「万治年中二改大佛殿惣指図中井主水正控」の貼紙あり。・着色貼絵図
この図については、これまで広く知られておらず、前掲書註7にて知ったが、図の掲載はなく、京都府総合資料館にて「平成20年度秋季特別展天下人を祀るー神になった信長・秀吉・家康ー」(滋賀県立安土城博物館平成20年10月)に掲載されているものを御教示いただいた。その後、京都市考古資料館特別展示(「京都秀吉の時代」2009.11.1～2010.10.31)に使用のため京都府総合資料館より資料の提供を受けカラー写真パネルを作成するとともに記載内容を別途パネル化し解説文書として掲示した。釈文の作成には、川上 貢所長の手を煩わした。また、京都市歴史資料館 井上満郎館長、同館 伊東宗裕調査担当課長にも絵図等について御教示をいただいた。
- 12) 辛 基秀・仲尾 宏『体系朝鮮通信使 第一巻』(明石書店 1996年)、仲尾 宏『朝鮮通信使 江戸時代の威信外交』(岩波書店 2007年)参照。

元和三年(1617)八月二六日、第3回「回答兼刷還使」の時、使節は秀忠の伏見城での聘礼・招宴後、宿舎となっていた紫野大徳寺に帰る途中、方広寺大仏殿で宗対馬守により中・下官に対しても招宴が行われている。招宴は以後の使節にも続くことから、この図にどの時点でその招宴行事の配置が貼り込まれたかは不明であるが、招宴の実態を示す貴重な史料である。使節の座る背後には「秀吉石塔」があり、これが板囲いされている。

- 13) 谷 直樹編『大工頭中井家建築指図集中井家所蔵本』 思文閣出版 2003 年
・ 35.7 × 556.4 cmの巻物
大仏殿立面図については、前掲書註 8 にも取り上げられている。
- 14) 大熊喜邦「京都大仏殿の間尺覚書 附京都御所延宝度御造営覚書」(『建築史三ノ六』 1941 年) にて資料紹介されている。
- 15) 大岡 實「鎌倉時代再建の東大寺」『南都七大寺の研究』(中央公論美術出版 1966 年) の中で、「石座」についての論考がなされ、『東大寺諸伽藍略録』に記載のある「石座二拾八角、高七尺、径拾六間五尺、廻り五拾壺間四尺五寸、」が現在のものと一致することを述べられている。
- 16) 八賀 晋『史跡方広寺石墨修復工事報告』(京都国立博物館 1987 年) の中で述べられている。
- 17) 内藤 晶・中村利則「ミヤコの変貌聚楽第と大仏殿」『近世風俗図譜 第 9 卷 祭礼 (二)』(小学館 1982 年) にて新旧大仏殿立面復元図が紹介されている。大仏殿の屋根構造の変化がわかる。
- 18) 伊東忠太『日本建築の研究 (上) (下)』(龍吟社 1942 年) で、大仏殿および豊国廟を取り上げられている。「(前略) 本社周囲に回廊あり、その大さ南北五十九間、東西四十六間、幅二間あり。唐門は社殿の正面に在りて西面し、門前二百八十三間の馬場を隔てて鳥居あり、楼門あり (後略)」と述べられている。また、前掲書註 10 にも、諸殿の規模や位置について記し、「朱雀門 是八馬場崎二有。・ ・」とある。さらに、前掲書註 3 にも豊国社の規模や配置に付いて取り上げられ、鳥居の西に楼門(極楽門)があったこと、これが家康の命により竹生島へ寄進されたことが述べられている。これらの配置は、洛中洛外図にも描かれ、その様子をうかがい知ることができる。

付章 1 方広寺跡出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

方広寺跡は京都市東山区茶屋町に所在する。京都国立博物館の平常展示館建替えに伴い、方広寺大仏殿南面石畳の造成工事の痕跡を確認するため発掘調査を実施した。この回廊部分の盛土からは炭化材や方広寺建立または再建に関わると推定される鉄釘や鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土している。

今回の分析調査では、回廊部分の盛土の形成時期に関する情報を得ることを目的として、盛土中の炭化材について放射性炭素年代測定を実施する。また、盛土中から出土した鍛冶関連遺物について鍛冶作業の詳細を検討する目的から、金属学的調査を実施する。

1 整地土出土炭化材の放射性炭素年代測定

1-1 試料

試料は、回廊部分の整地盛土中から出土した炭化材 3 点（土 2-2～4）と比較試料として採取した上層から切り込む土坑 86 の炭化材 1 点（土 2-1）である。これら 4 点について、放射性炭素年代測定および樹種同定を実施する。土 2-2～4 採集地層は、図 20D-D' ライン断面図の第 12 層に相当する。なお、試料の詳細は結果とともに表 7 に示す。

1-2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

炭化材資料は、ピンセット、超音波洗浄機を用いて、表面付着物を物理的に除去したあと、塩酸と水酸化ナトリウムで洗浄し、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（AAA 処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3 MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点

とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。

暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。なお、暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正は、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位の値で表す。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

表 7 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	地区	遺構名	試料状態・樹種	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal)				Code No.			
							誤差	calAD/BC		calBP		相対比		
土2-1	4区G53 RT	土坑86	炭化材： バラ属	150±30	-28.08±0.67	100±30 (98±29)	σ	cal AD	1695 - 1726	cal BP	255 - 224	0.307	IAAA- 83357	
								cal AD	1813 - 1838	cal BP	137 - 112	0.236		
								cal AD	1842 - 1853	cal BP	108 - 97	0.085		
								cal AD	1867 - 1895	cal BP	83 - 55	0.231		
								cal AD	1903 - 1918	cal BP	47 - 32	0.141		
								2σ	cal AD	1683 - 1735	cal BP	267 - 215		0.282
cal AD	1805 - 1930	cal BP	145 - 20	0.711										
cal AD	1951 - 1954	cal BP	0 - 0	0.006										
土2-2	4区G53 RM RW SM SN	整地土掘下げ (炭層)	炭化材： マツ属複雑管束亜属	350±30	-23.65±0.37	370±30 (373±29)	σ	cal AD	1454 - 1516	cal BP	496 - 434	0.746	IAAA- 83358	
								cal AD	1596 - 1618	cal BP	354 - 332	0.254		
								cal AD	1447 - 1526	cal BP	503 - 424	0.603		
								cal AD	1556 - 1632	cal BP	394 - 318	0.397		
								2σ	cal AD	1520 - 1593	cal BP	430 - 357		0.789
								cal AD	1619 - 1639	cal BP	331 - 311	0.211		
土2-3	4区G53 RM RW SM SN	整地土掘下げ (炭層)	炭化材： 広葉樹(散孔材)	310±30	-24.57±0.49	320±30 (319±28)	σ	cal AD	1520 - 1593	cal BP	430 - 357	0.789	IAAA- 83359	
								cal AD	1619 - 1639	cal BP	331 - 311	0.211		
								cal AD	1486 - 1604	cal BP	464 - 346	0.774		
								cal AD	1607 - 1645	cal BP	343 - 305	0.226		
								2σ	cal AD	1518 - 1594	cal BP	432 - 356		0.794
								cal AD	1618 - 1638	cal BP	332 - 312	0.206		
土2-4	4区G53 RM RW SM SN	整地土掘下げ (炭層)	炭化材： 広葉樹(節部分)	330±30	-25.59±0.53	320±30 (321±29)	σ	cal AD	1518 - 1594	cal BP	432 - 356	0.794	IAAA- 83360	
								cal AD	1618 - 1638	cal BP	332 - 312	0.206		
							2σ	cal AD	1484 - 1645	cal BP	466 - 305	1.000		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) 暦年較正はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用する。
- 5) 暦年較正計算には丸める前の補正年代値 (括弧内の値) を使用している。
- 6) 暦年較正結果は暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1柾目を丸めていない。
- 7) 暦年較正年代値の統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 8) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

1-3 結果

年代測定試料の樹種同定結果および放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表7、暦年較正結果を図64に示す。

樹種同定結果を表7に示す。炭化材は、土2-1が広葉樹1分類群（バラ属）、土2-2が針葉樹1分類群（マツ属複維管束亜属）に同定された。なお、土2-3と土2-4は、いずれも道管を有しており広葉樹であることが判別でき、土2-3については道管の配列から散孔材の組織配列を有することも確認できる。しかし、土2-3は保存状態が悪いため、土2-4は節部分で正常な組織配列が観察できないため、それぞれ種類の同定には至らない。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は比較的広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

バラ属（*Rosa*） バラ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に径を減じた後、ほぼ単独で散在する。道管は単穿孔を有する。放射組織は異性で、単列で1～10細胞高前後のものと、10細胞幅以上、60～100細胞高以上の大型のものがある。

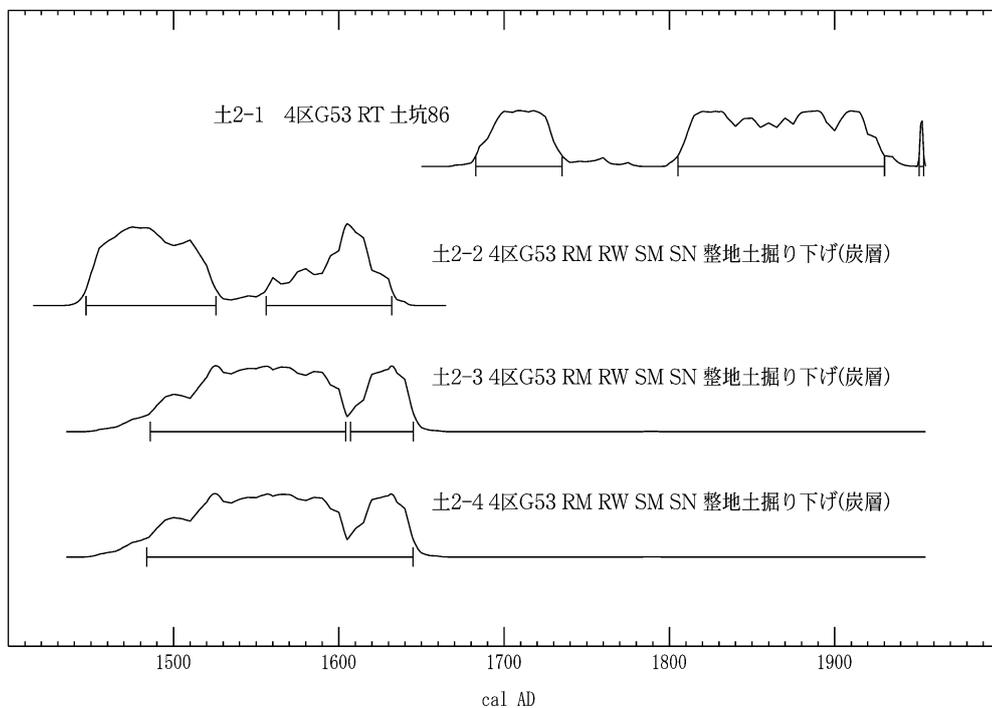


図64 暦年較正結果

1-4 考察

回廊部分の盛土中の炭化材の放射性炭素年代測定値は、補正年代値で 320 ± 30 yrsBP ~ 370 ± 30 yrsBP、 2σ の誤差で最も確率の高い暦年較正年代値で cal AD 1447 ~ 1526 (相対比 60.3%)、cal AD 1486-1604 (相対比 77.4%)、cal AD 1484-1645 (相対比 100.0%) と近似する値を示した。これらの年代値に基づくと、回廊部分の盛土は 15 世紀後半 ~ 17 世紀前半に形成されたことが推定される。方広寺の歴史は、文献等に基づくと、天正 14 年 (1586 年) に造営が始まり、文禄 4 年 (1595) には大仏殿も含めほぼ完成する。その後、慶長元年 (1596) の大地震により大仏殿・築地が大破し、慶長 5 年 (1600) に再建が始まるが大仏鑄造中に火災に合い、慶長 13 年 (1608) 年に秀頼による二度目の再建が企画され、実施されたとされる。このような方広寺の歴史と今回得られた年代値は同調的であり、発掘調査成果を裏づける結果といえる。

一方、SK86 土坑から出土した炭化材は 150 ± 30 yrsBP、暦年較正年代で cal AD 1695-1726 年を示したことから、近世後半から現代にかけて形成された遺構と推定される。本土坑は、発掘調査の結果、幕末 ~ 明治にかけての京焼き関連の炭廃棄土坑と推定されていることと矛盾しない結果といえる。

2 方広寺跡出土鉄釘・鉄滓の金属学的調査

2-1 試料

回廊盛土から出土した鉄釘・鉄滓各 1 点である (表 8)。

2-2. 調査方法

各遺物の調査項目を表 8 に示す。以下に各項目の調査内容を示す。

(1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。この結果をもとに、分析試料の採取位置を決定している。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

表 8 試料および調査項目

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目			
				大きさ(mm)	重量(g)	マクロ組織	顕微鏡組織	EPMA	化学分析
HOK-1	4区 G53 RM RN SM SN	鉄釘	16世紀末	37×29×21	18.0	○	○	○	
HOK-1	整地土掘り下げ (炭層)	椀型鍛冶滓	16世紀末	118×101×74	514.7		○		○

鋳物の鋳物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3% ナイタル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

（4）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鋳物中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 200gf で測定した。

（5）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

（6）化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化燐（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

2-3 調査結果

（1）HOK-1：鉄釘

肉眼観察：ごく小型の鉄釘頭部破片と推測される。頭部は黄褐色の土砂に厚く覆われており、本来の形状を観察することは困難な状態であった。錆化に伴い、体部表面は剥落しており、先端も欠損している。また体部部分¹⁾は特殊金属探知機¹⁾のL（●）で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存するものと推定される。

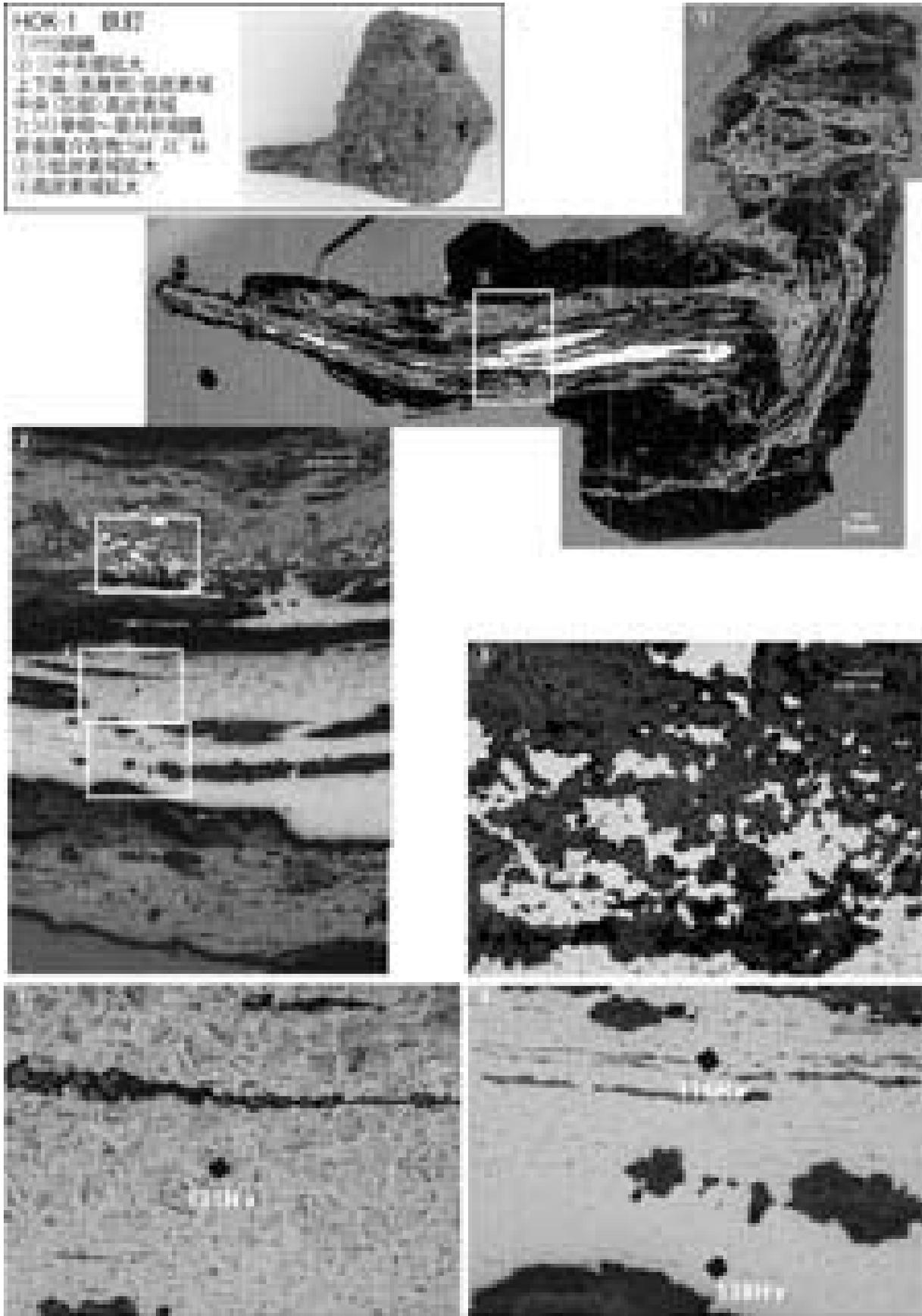


図 65 鉄釘の顕微鏡組織

マクロ組織：図 65 の①に示す。遺物全体を縦方向に切断して観察を行った。頭部は完全に錆化しているが、その形状から頭巻釘と推測される。なお写真右上の錆化鉄部は廃棄後二次的に固着したものであった。また体部中央には金属鉄（明白色部）が残存している。

顕微鏡組織：図 65 の②～⑤に示す。②は鉄釘体部断面の拡大で、金属鉄部は 3% ナイタルで腐食している。残存金属鉄表層側は低炭素域でフェライト（Ferrite： α 鉄）単相およびパーライト（Pearlite）の面積率のごく低い亜共析組織を呈する（③および⑤はその拡大である）。また中央部は高炭素域で、比較的パーライトの面積率が高い亜共析組織を呈する（④はその拡大である）。以上の金属組織から、0.1% 以下～0.5% 程度の炭素含有量のばらつきがあると判断される。

また金属鉄中には鍛打により、細長く展伸した形状の非金属介在物が層状に分布する。

ビッカース断面硬度：図 65 の④⑤の金属鉄部の硬度を測定した。④中央の高炭素域の硬度値は 131Hv であった。組織に見合った値といえる。

また⑤の低炭素域の硬度値は 116Hv、138Hv であった。組織から予想されるより若干硬質の値となったが、鉄中の非金属介在物や、燐（P）などの硬度を上昇させる元素が固溶している可能性が考えられる。

EPMA 調査：図 66 の①に鉄釘体部の鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。1 の淡茶褐色多角形結晶は特性 X 線像をみると、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）に反応がある。定量分析値は 59.7%FeO-21.7%TiO₂-12.9%Al₂O₃-5.0%MgO-1.8%V₂O₃ であった。ウルボスピネル（Ulv_spinel： $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）とヘーシナイト（Hercynite： $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ）を主な端成分とする固溶体と推定される²⁾。この白色粒状結晶は特性 X 線像では、鉄（Fe）、酸素（O）に反応がみられる。定量分析値は 98.1%FeO-2.4%TiO₂ であった。ウスタイト（Wustite： FeO ）で、微量チタン（Ti）を含む。3 の淡灰色微小結晶は、特性 X 線像をみると珪素（Si）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は 56.6%FeO-11.3%MgO-1.9%CaO-1.3%MnO-33.9%SiO₂ であった。かんらん石類（Olivine Group）のフェロホルトノライト〔Ferrophonolite： $2(\text{FeO}, \text{MgO}) \cdot \text{SiO}_2$ 〕に同定される³⁾。4 の素地部分の定量分析値は 30.6%SiO₂-8.9Al₂O₃-14.3%CaO-1.8%MgO-6.1K₂O-27.9%FeO-9.8%P₂O₅ であった。非晶質珪酸塩で、燐（P）がやや高めである。

また金属鉄部の調査も実施した、17 は清浄な金属鉄部、18 は層状の黒色点状部分の定量分析値である。17 が 104.0%Fe-0.07%P であるのに対して、18 は 102.1%Fe-0.5%P と、燐（P）の高値傾向が確認された。ビッカース断面硬度測定で、フェライト単相部分の硬質傾向が顕著であったのも、こうした燐（P）偏析の影響と推測される。

さらにもう 1 視野、図 66 の②に頭部（錆化鉄）の非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。5 の淡茶褐色多角形結晶は特性 X 線像をみると、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）に反応がある。定量分析値は 57.7%FeO-27.5%TiO₂-11.1%Al₂O₃-5.5%MgO-1.2%V₂O₃ であった。ウルボスピネル（Ulv_spinel： $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）とヘーシナイト（Hercynite： $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ）を主な端成分とする固溶体と推定される。

以上の調査の結果、当鉄釘の芯部には鋼、表層側には軟鉄が確認された。ただし 1 点のみの調

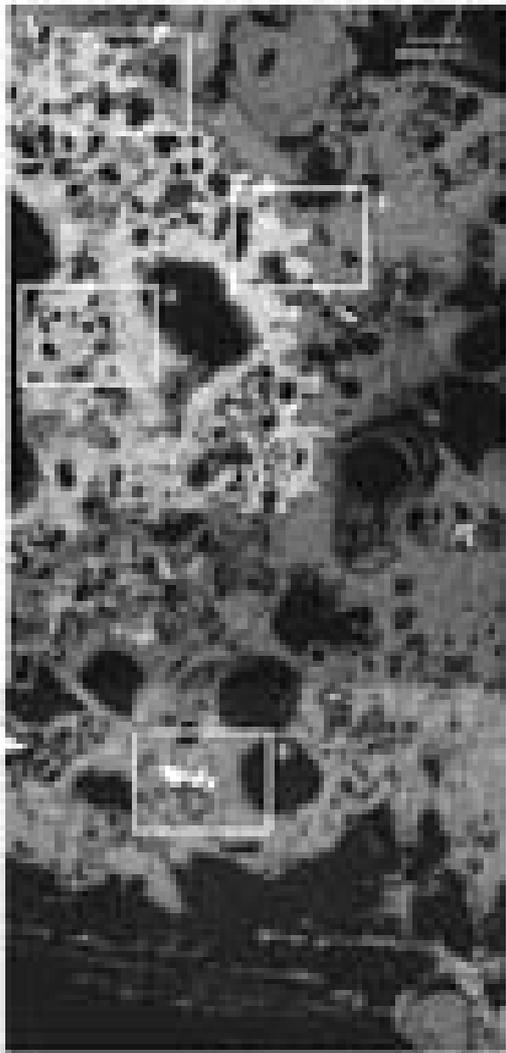
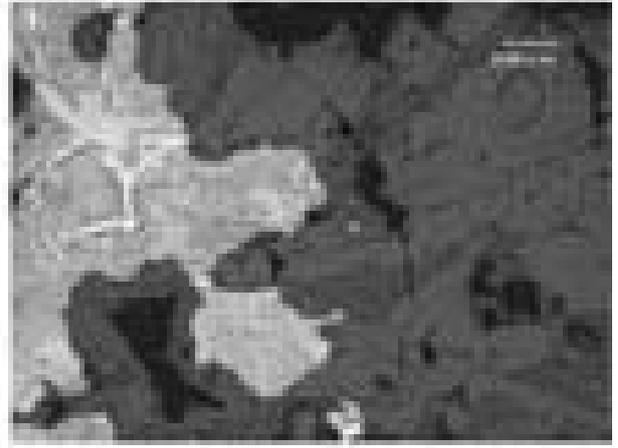
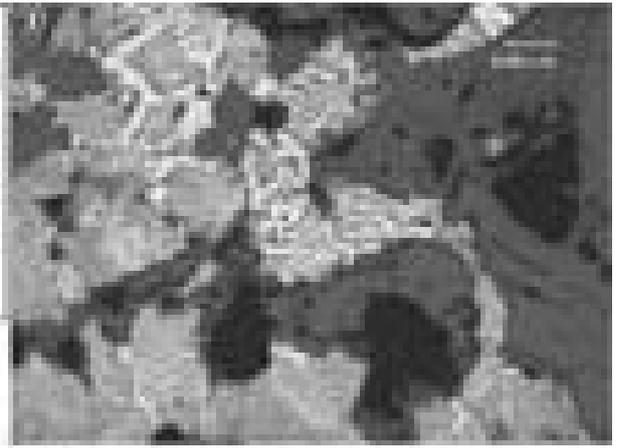
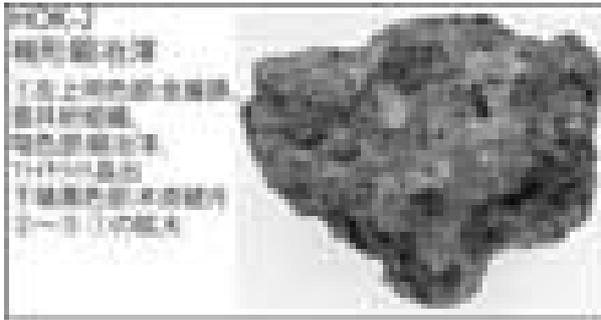


図 67 梔形鍛冶滓の顕微鏡組織

表9 椀形鍛冶滓の化学組成

符号	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (Zr ₂ O)	造滓成分 Σ*
HOK-2	39.16	0.03	26.30	26.72	25.19	5.80	0.96	0.36	1.43	0.19	0.06	0.36	0.04	0.04	0.23	2.66	<0.01	0.01	<0.01	33.93

査であるため、これが意図的な配置によるものか、炭素含有量にばらつきのある鉄材を鍛錬して偶然そうなったものかの判別は困難である。

また非金属介在物中には、ウルボスピネルとヘーシナイトを主な端成分とする固溶体が広範囲で確認されたことから、チタン (Ti) を含む砂鉄を始発原料とする鉄材から製作されたものと判断される。

(2) HOK-2 : 椀形鍛冶滓

肉眼観察：約 515 g と大型で厚手の椀形鍛冶滓の破片である。表面は広い範囲で、黄褐色の土砂が付着する。側面1面が直線状の破面と推定される。上面は中央がやや窪む形状で、側面から下面にかけては1 cm前後の木炭を多数噛み込んでいる。軽い質感の滓である。特殊金属探知機のH (○) で反応があり、内部にごく小型の金属鉄を含むものと考えられる。

顕微鏡組織：図67の①～⑤に示す。明白色～明褐色部は滓中のごく微細な金属鉄部である。3% ナイタルで腐食したところ、亜共析組織が確認された。この金属組織から、①左上にある比較的まとまりの良い金属鉄粒 (②～④はその拡大である) は、炭素含有量が0.5～0.7%と推定される。さらにその周囲に点在する、ごく微細な金属鉄 (⑤中央はその拡大) はやや炭素含有量が低く、0.1%以下と判断される。

また周囲の暗色部は滓部で、発達した淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂) が晶出する。鉄チタン酸化物の結晶はなく、鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

化学組成分析:表9に示す。全鉄分 (Total Fe) 39.16% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.03%、酸化第1鉄 (FeO) 26.30%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 26.72% の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 33.93% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は1.32%と低値であった。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.36%、バナジウム (V) が<0.01%と低値で、さらに酸化マンガン (MnO) 0.06%、銅 (Cu) も0.01%と低値である。

当鉄滓中にはチタン (Ti) を含む結晶はなく、化学組成をみても砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V、MnO) の割合は極めて低い。この特徴から、鉄材を熱間で加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

2-4 まとめ

方広寺跡から出土した鉄釘・椀形鍛冶滓、各1点を調査した結果、砂鉄が始発原料の鉄素材を熱間で鍛打加工して、方広寺造営または再建に必要な建築金物 (鍛造製品) を製作していたと推測される。

〈1〉鉄釘（HOK-1）は、芯部に鋼、表層側に軟鉄が確認された（ただしこれが意図的な配置によるものか否かの判別は困難である）。また非金属介在物中に、ウルボスピネルとヘーシナイトを主な端成分とする固溶体が確認された。チタン（Ti）を含む砂鉄を始発原料とした鉄材を、熱間で鍛打加工して製作したものと判断される。

〈2〉椀形鍛冶滓（HOK-2）は、鉱物・化学組成の特徴から、鉄材を熱間で鍛打加工した時に生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。方広寺造営または再建に必要な建築金物（鍛造製品）の製作に関わる反応副生物と想定して矛盾はない。

また鍛打加工した鉄材は、鉄釘（HOK-1）とは異なり、製鉄原料の砂鉄起源の不純物（製錬滓～精錬鍛冶滓）をほとんど含まないものであった。

註

- 1) メタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を、非破壊で推定するため調整された、特殊金属探知機を使用した判定法のことを指す。感度は三段階〔H: high (○)、M: middle (◎)、Llow (●)〕に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。特殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。

穴澤義功,2005,「鉄生産遺跡調査の現状と課題-鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について-」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学会「鉄の歴史-その技術と文化-」フォーラム 鉄関連遺物分析評価研究グループ

- 2) 黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社 1983

第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル類 (Spinel Group) の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式は XY_2O_4 と表記できる。Xは2価の金属イオン、Yは3価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。(後略)

- 3) 前掲註2)

第4章 主要な造含鉱物 4.7 かんらん石類 (Olivine Group)

かんらん石類は X_2SiO_4 で表される。Xには Mg, Fe^{2+} , Mn^{2+} , Caなどがはいる。このXの位置は2価のイオンだけで占められ、Alや Fe^{3+} のような3価の金属イオンはほとんど存在しない。Siの位置をAlが置換することもない。代表的なかんらん石としては、 Mg_2SiO_4 (苦土かんらん石), Fe_2SiO_4 (鉄かんらん石), Mn_2SiO_4 (テフロかんらん石), $CaMgSiO_4$ (モンチセリかんらん石) などがある。

苦土かんらん石 (Mg_2SiO_4) と鉄かんらん石 (Fe_2SiO_4) はかんらん石類で最も代表的なものであり、両者を端成分として、その間に固溶体を作る。(後略)

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

付章2 方広寺跡出土の赤色顔料に関する分析調査

北野信彦

1 はじめに

京都東山七条に所在する方広寺跡の発掘調査では、多数の近世初頭期～前期の遺物と遺構が検出され、東大寺大仏殿をも凌ぐ方広寺大仏殿の具体的な姿が理解されるようになってきた。この出土資料群のなかには、大仏殿を含む方広寺関連建造物の外観塗装材料との関連性が想定される赤色顔料が2点出土した。

今回、これら近世初頭期の方広寺関連の出土赤色顔料と、参考試料としてこの方広寺大仏殿造営に伴い天正期修理が行われた三十三間堂の旧塗装材料である赤色顔料について分析調査を行ったので、その結果を報告する。

2 調査対象試料

(試料1) 方広寺跡出土軒平瓦に付着した赤色顔料

京都国立博物館の本館改築工事に伴う発掘調査では、豊臣造営期である近世初頭段階の方広寺関連の遺構・遺物が数多く出土した。このうちの3-2区掘削中からは、大仏瓦と呼称される豊臣家縁の桐文様を瓦当部に有する軒平瓦や軒丸瓦、さらには金箔瓦などが一括で出土しており、このうちの桐文様を有する軒平瓦（大仏瓦）片1点には瓦胎部にわずかながら赤色顔料の付着が確認された（図68・69）。そのため、基本的にはこの大仏瓦自体は、方広寺大仏殿などの主要建造物に葺かれた瓦であり、ここに付着した赤色顔料は近世初頭期における建造物部材の外観塗装材料であると認識して試料1とした。分析用の試料は、瓦胎部表面の付着土壌をエタノール液を用いてクリーニングした後、残存状態が良好な部分から粘着性があるカーボンテープを密着させて1～2mm角の赤色顔料剥落片を注意深くサンプリングした。

(試料2) 方広寺跡出土の赤色顔料

平成21年9月、京都国立博物館敷地内の本館改築に伴う付帯工事で掘削されたトレンチ穴について京都市埋蔵文化財研究所が立会調査した結果、試料1と同じ形態を有する大仏瓦や金箔瓦とともに、一括で廃棄された赤色顔料の小塊片が層状に分布した状態で検出された（図70）。もちろんこの赤色顔料の試料自体は建造物の外観塗装材料そのものであるかどうかは明確ではないものの、少なくとも希少な近世初頭段階の方広寺関連の赤色顔料であることは出土状態から明確である。そのため、本報では、これらを注意深く周囲の土壌の汚染を受けないよう10数mm角の新鮮な部分のみを注意深く回収して試料2とした。

(試料3) 三十三間堂に外観塗装された赤色顔料

後白河法皇御陵が所在する法住寺とともに法皇ゆかりの寺院建造物である蓮華王院本堂（三十三間堂）における天正期修理は、豊臣秀吉による方広寺大仏殿造営の附帯工事の一環であり、扉板



図 68 試料 1 が付着した軒平瓦

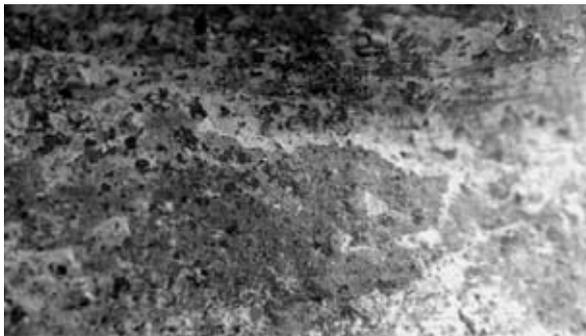


図 69 試料 1 の付着状況



図 70 試料 2 の検出状況



図 71 三十三間堂内における試料 3 の残存状況

材や八双金具や長押の六葉金具などの飾金具の取り替え、赤色顔料による外観塗装の塗り替え作業など、建造物の外形的効果を狙った修理が中心であったようである。そして、現存扉の八双金具の一部には、天正 20 年（1592）の墨書銘が昭和期修理の際に発見されており、現状の建造物外観塗装とほぼ同じ色相の赤色顔料が部材の墨書直下でも観察されたため、現在わずかに残存する赤い外観塗装の多くはこのときの塗装痕跡であるとされている（図 71）。今回、現地調査において北より 6 本目の西面内部背面入側柱部分から微小な剥落片が見いだされたため、先方了承のうえで参考資料とした。これを試料 3 とし、周囲の汚染を防ぎつつ注意深く回収して分析試料として供した。

3 調査方法

（1）赤色顔料の塗装状態や赤い色相の測色

各試料の赤い色相の測色は、まず新版標準土色帳のマンセル標示色見本（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・日本色彩研究所 色表監修 1991 年版）と各試料の色相を自然採光条件下で比較して行った。引き続き、必要最小限度の採取が可能であった数 mm 角の赤色顔料については（株）ミノルタ製測色計（スペクトロフォトメータ CM-2600d）を用いた測色の測定を行った。測色条件は、マスクグロス；M/SCI、UV 設定；100%、光源；D-65、観察視野；10°、色補正；0 と白、自動側色；3 回平均、である。なお表色系は $L^*a^*b^*$ で表示し、 a^*/b^* で算出したが、測色測定値の正確さを期すために、測色箇所を替えながら 5 回計測して中 3 つの平均値を求めた。

（2）構成無機元素の定性分析

本試料の構成無機元素の定性分析は、あらか

じめ分析用カーボンテープに固定した分析試料を東京文化財研究所 保存修復科学センター 伝統技術研究室 設置の(株)堀場製作所 MESA-500 型の蛍光X線分析装置にセッティングして分析した。設定条件は、分析設定時間は 600 秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は 15kV および 50kV、電流は 240 μ A および 20 μ A、検出強度は 200,000 ~ 250,000cps、定量補正法はスタンダードレス FP である。

(3) 鉱物結晶相(化合物)の同定

試料を構成している結晶鉱物相(化合物)の同定は、(株)コベルコ科研においてリガク電気製 RINT1500 型X線回折装置を用いた分析を行った。測定条件は、ターゲットは Cu, X線管電圧は 40kV, X線管電流は 200mA, 検出器はシンチレーションカウンタ、走査速度は 2 度 / 1 分、走査範囲は 5-70 度、散乱スリットは 1 deg. で受光スリットは 0.15mm、モノクロメーターを使用した。

(4) 顔料粒子の集合状態の観察

赤色顔料の塗装状態や顔料粒子の集合状態は、(株)キーエンス製の VH-7000S 型デジタルマイクロスコープと、(株)スカラ製の DG-3 型デジタル現場顕微鏡を観察箇所における作業性や安全性を重視してそれぞれ使い分けた観察を行った。観察は外観塗装の残存状態が比較的良好な部分を中心に 50 倍の倍率で行った。次に(株)オリンパス製の HD 型金属顕微鏡とデジタルカメラを連動させて 200 倍と 500 倍の倍率で観察した。

(5) 個々の顔料粒子の形態観察

試料採取が可能であった顔料試料は、必要最小量をカーボンテープに固定した上で分析試料台に取り付け、(株)日立ハイテクノロジーズ分析センターにおいて、日立製作所製 S-3200N 型走査電子顕微鏡に夜高倍率(50,000 倍)の SEM 画像観察を行った。試料は、先の分析用カーボンテープに固定した試料のうち、実体顕微鏡および金属顕微鏡観察で赤い色相の物質の集積が良好であり、かつ電子顕微鏡観察で鉄(Fe)がマッピング検出された部分を中心に観察した。

(6) 示差熱分析

各試料の鉱物としての基本的な性状を理解するために、示差熱分析(DTA)を(財)元興寺文化財研究所保存科学センター設置のリガク電機製示差熱天秤装置 TG-8101P 型を使用して行った。昇温速度は 10°C/分で分析設定室温は 1000°C までであり、比較標準試料はアルミナ(Al_2O_3)を用いた。

4 調査結果

各種の分析調査を行った結果、次のような基礎的データの蓄積を得た。まず、各試料の赤い色相をみると、試料 1 は 2.5YR5/8: 明赤褐 bright reddish brown、試料 2 は 10R4/8: 赤 red ~ 2.5YR5/8: 明赤褐 bright reddish brown、試料 3 は 2.5YR6/8: 明赤褐 bright reddish brown ~ 2.5YR5/8: 赤褐 bright reddish brown (いずれもマンセル表示)であった。基本的にはいずれもやや橙もしくは肌色系が強い色相ではあるが、このなかでは試料 2 の色相 ($a^*/b^*=1.19$) は若干他に比較して赤味が強かった。

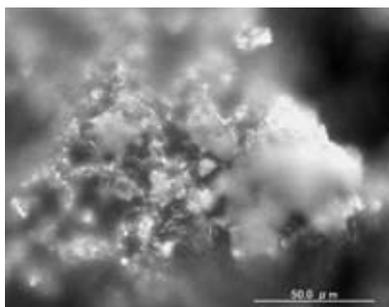


図 72 試料 1 の色相と集合状況の金属顕微鏡観察

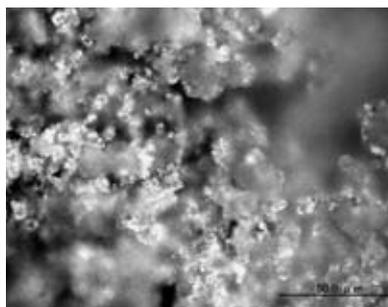


図 73 試料 2 の色相と集合状況の金属顕微鏡観察

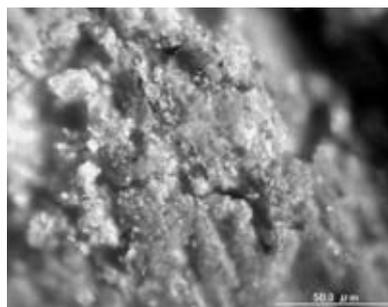


図 74 試料 3 の色相と集合状況の金属顕微鏡観察

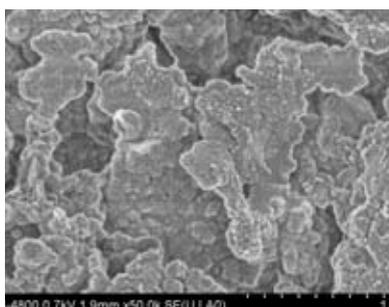


図 75 試料 1 の顔料粒子の電子顕微鏡観察 (50,000 倍)

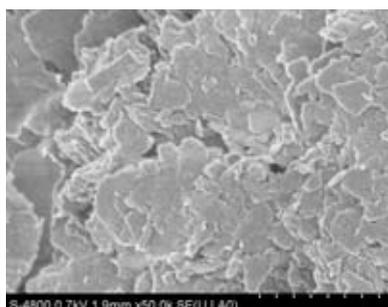


図 76 試料 2 の顔料粒子の電子顕微鏡観察 (50,000 倍)

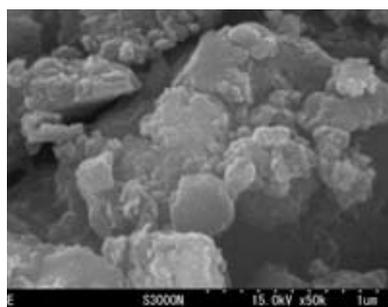


図 77 試料 3 の顔料粒子の電子顕微鏡観察 (50,000 倍)

これらの個々の粒子の赤い色相と集合状態を 200 ～ 400 倍の低倍率で拡大観察してみると、いずれも橙色もしくはオレンジ色系を呈する部分と淡褐色もしくは透明感がある茶褐色を呈する部分が混在した状態が観察された (図 72 ～ 74)。ただし、赤い色相が強い部分と透明感がある白い部分は明確に粒子で分類されるわけではなく、両者がグラデーションをもって遷移する部分も存在している。そのため、基本的には橙もしくはオレンジ色系の色相の部分と透明感が強い淡褐色系の色相の部分がどのぐらいの面積を占有するかが赤い色相の違いに反映しているようである。

引き続き、これら各試料の個々の顔料粒子の形態と集合状態を 50,000 倍の高倍率観察した。その結果、試料 1 は極めて不定形の微粒子集合体であり、試料 2・3 はいずれも極めて不定形を呈するものの、これに 0.1 ～ 0.3 μ m 前後の薄片雲母状もしくは六角板状型の微粒子が若干混在した集合体であった (図 75 ～ 77)。その一方で、中空円筒のパイプ状もしくはチューブ状、さらには 0.1 μ m 程度の球状微粒子の集合体は見いだされなかった。

次に、各試料の構成無機元素を分析した結果、試料 2 はケイ素 (Si) とともに鉄 (Fe) の強いピークが検出され、試料 1・3 はケイ素 (Si)、硫黄 (S)、カリウム (K) などとともに鉄 (Fe) の強いピークが検出された。しかしいずれの試料からも水銀 (Hg) や鉛 (Pb) は検出されなかった (図 78 ～ 80)。なお、各試料のうち試料 2 が最も鉄 (Fe) の検出が顕著であった。

各試料について鉱物結晶相 (化合物) の同定を行った結果、いずれの試料も主成分である石英 (Quartz: SiO₂) 以外は非晶質物質を多く含むためかややブロードなピークを示していた。このうち試料 1 の主成分は石英 (Quartz: SiO₂)、ローンクリーカイト (Loncreekite: NH₄Fe (SO₄)₂ · 12H₂O) もしくは鉄明礬 (Jarosite: KFe(SO₄)₂ · 12H₂O) でありこれに微量の白雲母 (Muscovate:

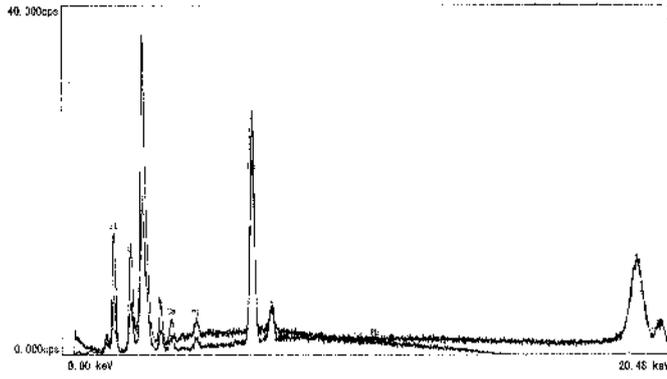


図 78 試料 1 の蛍光 X 線分析結果

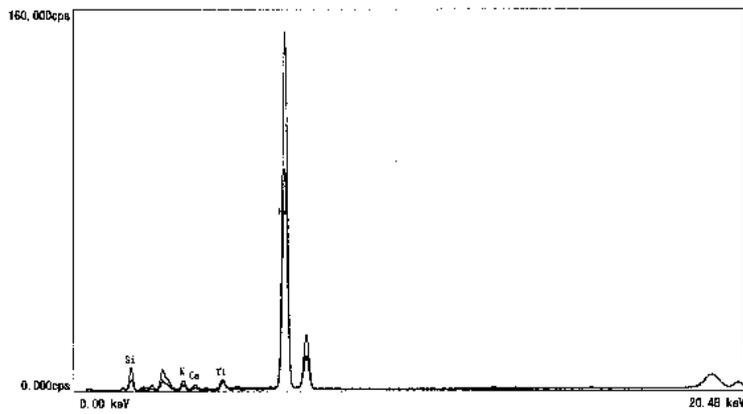


図 79 試料 2 の蛍光 X 線分析結果

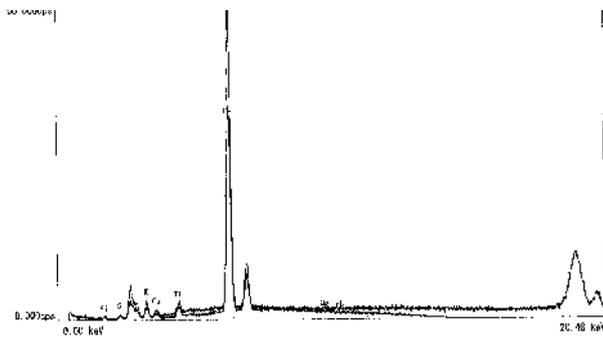


図 80 試料 3 の蛍光 X 線分析結果

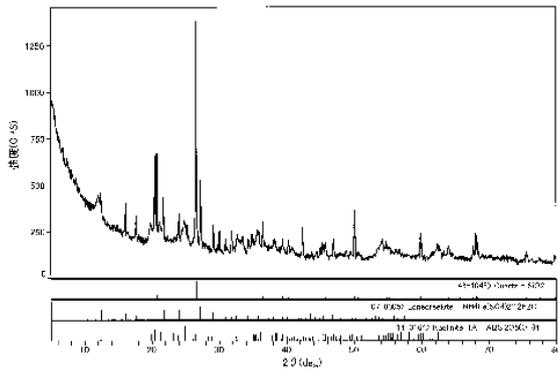


図 81 試料 1 の X 線回折分析結果

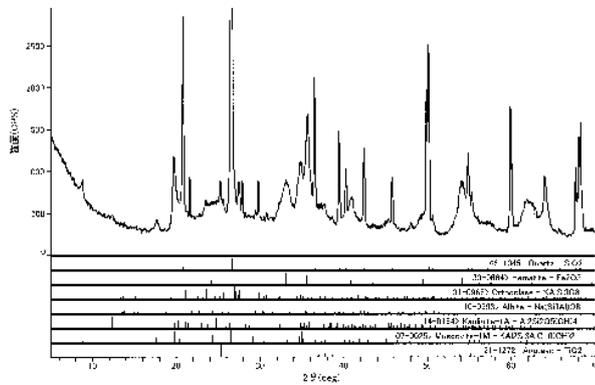


図 82 試料 2 の X 線回折分析結果

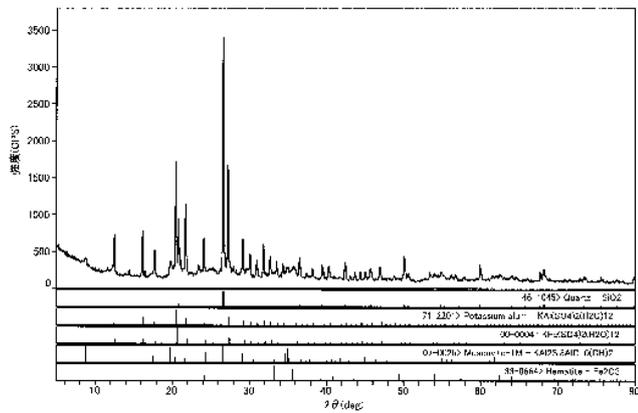


図 83 試料 3 の X 線回折分析結果

KAl₂Si₃AlO₁₀(OH)₂、灰長石 (Anorthite : (Ca,Na)(Si,Al)₄O₈) などのピークを検出したが、酸化第二鉄 (Fe₂O₃ : Hematite) は存在を確認できなかった (図 81)。

試料 2 は主成分である石英 (Quartz : SiO₂)、カオリナイト (Kaolinite : Al₂Si₂O₅(OH)₄)、白雲母 (Muscovate : KAl₂Si₃AlO₁₀(OH)₂)、微量な曹長石 (Orthoclase : KAlSi₃O₈)、アルバイト (Albite : Na(Si₃Al)O₈)、チタニウム (Anatase : TiO₂) などとともに、通常の天然赤鉄鉱の鉱石などに比較してヘマタイトの主ピークの幅が幅広で緩慢となる特徴を有する酸化第二鉄 (Fe₂O₃ : Hematite) が検出された (図 82)。また、試料 3 の主成分は石英 (Quartz : SiO₂)、カオリナイト (Kaolinite : Al₂Si₂O₅(OH)₄)、ローンクリーカイト (Loncreekite : NH₄Fe(SO₄)₂ · 12H₂O) もしくは鉄明礬 (KFe(SO₄)₂ · 12H₂O) であり、これにごく微量でブロードな主ピークの酸化第二鉄 (Fe₂O₃ : Hematite) が検出された (図 83)。

さらに、分析用の試料採取が可能であった試料 2 と 3 については加熱に対する物質変化の面から検討するために示差熱分析を行った。調査の結果、いずれの試料においても 80℃前後、480℃前後、650℃前後にわずかながら熱遷移のピークが確認された。

5 考察

以上、方広寺跡出土軒平瓦に付着していた赤色顔料および金箔瓦や大仏瓦などと一括で検出された出土赤色顔料などの方広寺関連の試料 1・2、参考試料である三十三間堂に僅かに残存する天正修理時に塗り直し塗装されたと考えられている旧塗装材料の赤色顔料である試料 3 について、観察および各種の分析調査を行った。調査の結果、これらは鉄 (Fe) の検出が顕著であり、水銀 (Hg) や鉛 (Pb) は検出されなかったため、朱 (辰砂もしくは水銀朱: HgS) や鉛丹 (四酸化三鉛: Pb₃O₄) ではなく、三価の鉄イオン (Fe³⁺) の赤い色相を赤色顔料の主成分とした酸化鉄系のベンガラ顔料の範疇であると理解した。

筆者によるこれまでの各種ベンガラ顔料の調査では、同じ酸化鉄系のベンガラ顔料でも、原材料や製法の違いにより、ベンガラ粒子の集合状態の分布や赤色顔料としての赤い色相、さらには個々のベンガラ顔料の粒子形態や集合状態はそれぞれ異なる。すなわち、(1) 文献史料が「代赭」もしくは「赤土」と記し、天然赤鉄鉱を磨り潰して粉碎して磨り潰す、もしくは赤味が強い粘土系の風化生成土壌や赤鉄鉱の鉱石が風化して脆弱粉碎化された細粉集積土壌を精製して作成する天然鉱物系の「赤土ベンガラ」、(2) 鉄分を多く含む黄土である含水酸化鉄や針鉄鉱系もしくは硫酸鉄系の風化土壌を原材料とし、加熱～粉碎～水簸して作成するが、基本が土壌であるため夾雑物が多く赤い色相は劣る。ただし量産可能なため、古代より木造建造物の外観塗装材料として多用された「丹土ベンガラ」、(3) 文献史料は「鉄丹もしくは鉄屑の弁柄」と記す。鉄サビに酸化促進剤を添加して加熱して作成する。ローハベンガラに比較して赤い色相はやや劣るが、中世以降のベンガラ塗装には多用される人造顔料系の「鉄丹ベンガラ」、(4) 文献史料は「礬紅もしくは弁柄」と記し、硫化鉄鉱の風化生成物である緑礬 (ローハ) を原材料として、これを加熱～水簸して作成する、赤い色相は極めて良好な人造顔料系の「ローハベンガラ」、(5) 鉄分の純度

が高い *Leptothrix Ochraceae* 種などの黄褐色浮遊沈殿物の鉄バクテリアを原材料としているため、赤い色相は良好な外径 $1 \mu\text{m}$ 程度の中空円筒状で定型化した形態を有する「パイプ状ベンガラ」、(6)『豊後風土記』が「赤湯泉（あかゆ）」の赤泥を建造物の柱に塗装したと記すように、温泉沈殿物の肌理の細かい赤泥を原材料として、これを加熱～水簸して作成する「赤泥ベンガラ」、および、(7) 湿式沈殿法からなる現代のベンガラの、少なくとも7種類の名称を異なるベンガラ顔料が存在する。

この点を考慮に入れると、本試料の特徴は、(a) 石英や白雲母、風化二次生成物の粘土鉱物であるカオリナイトなどの夾雑物質である土壤成分を多く含む、(b) 金属顕微鏡観察などでは、比較的鮮やかな紅赤色と橙色もしくはオレンジ色を呈する赤い色相を呈する部分と淡褐色もしくは透明感がある茶褐色を呈する部分が混在した状態で観察される、(c) 電子顕微鏡による高倍率観察では、いずれも基本的には極めて不定形を呈し、その中に不定形ながらも $0.1 \sim 0.3 \mu\text{m}$ 程度の薄片雲母状もしくは六角板状型を呈する超微粒子を交えた集合体などである。そのためこれらは、鉄分が多い黄土を原材料とするために、結果として赤い色相に乏しく不均一な粒子構造の集合体である「丹土ベンガラ」として同定した。

この丹土ベンガラは無機元素では鉄 (Fe) の検出は強いが、酸化第二鉄の結晶鉱物相は検出されない、もしくは検出されても極めて微弱であり、特に X線回折分析ではヘマタイトの主ピークである ($2\theta = 33^\circ$) の幅が高角側に比較して幅広で緩慢となる特徴を有する。これらは、文化財科学の分野の朽津信明や山崎一雄が「不純なベンガラ」もしくは「土壌系のベンガラ」と規定する天然ベンガラと同じものである。

この点に関連すると、通常、赤い色相を呈する酸化鉄系物質とは、安定的な鉱物結晶相（化合物）を有する酸化第二鉄 (Hematite; $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$) である。一見これを反映するように、元素分析では鉄 (Fe) が顕著に検出されている。ところが、試料 2 からは、ある程度の酸化第二鉄の検出は確認されるものの、通常の天然赤鉄鉱の鉱石などに比較してヘマタイトの主ピークの幅が幅広で緩慢（ブロード）となる特徴が観察された。また、試料 1・3 はいずれも酸化第二鉄 (Fe_2O_3) の検出は極めて微量、もしくはほとんど検出されなかった。しかし、これらに共通して見られた鉄 (Fe)、硫黄 (S)、カリウム (K) 成分を含む鉱物結晶相（化合物）として、ローンクレーカイト ($\text{NH}_4\text{Fe}(\text{SO}_4)_2 \cdot 12\text{H}_2\text{O}$) もしくは鉄明礬 ($\text{KFe}(\text{SO}_4)_2 \cdot 12\text{H}_2\text{O}$) の硫酸鉄系の風化生成物の存在が確認された。この2つの物質は、ある一定温度 (700° 近辺を想定) 以上の加熱工程～夾雑物を除去する水簸工程といった人的作業を丹念に行うことで、はじめてある一定水準以上の物質的な安定性と赤色顔料としての赤い色相を有する酸化第二鉄が作りだされることが科学的に証明される。言葉を換えて端的に表現すれば、方広寺および三十三間堂に塗装されていた丹土ベンガラは、いずれも赤色顔料としてのベンガラの生産作業自体が不十分な状態にある物質であるともいえる。しかしながら、このような丹土ベンガラであっても、それなりの赤色顔料としての赤い色相は獲得されるため、大量使用が常の大規模な木造建造物の塗装材料として使用されたものであろう。

さらに、試料 2 はわずかに結晶性があるため X 線回折分析では微弱ながらピークが検出される含水酸化鉄： $\text{FeO}(\text{OH})$ や非晶質の鉄成分であるためブロードのピークしか検出されない含水酸化鉄： $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot n\text{H}_2\text{O}$ などの鉄成分を多く含むいわゆる黄土系の風化生成物、試料 1・3 はローンクリーカイトや鉄明礬などのように硫酸鉄系の風化生成物であると考えられ、起源は異なるようである。このことから、ほぼ同じ豊臣政権による方広寺造営プロジェクトとしての塗装作業でありながら、塗装材料の原材料調達も多岐に及んでいた可能性も同時に推察された。

本調査は日本学術振興会の科学研究費補助金 基盤研究 (C) (細目：文化財科学：課題番号 19500872) 『建築文化財における外観塗装材料の変遷と新塗料開発に関する研究』(研究代表者 北野信彦) の平成 21 年度成果の一部を含む。なお三十三間堂の赤色顔料の調査では、妙法院門跡文化財部担当の福井憲章氏をはじめとする三十三間堂の方々には大変お世話になりました。改めて謝意を表します。

(引用文献)

- 北野信彦・肥塚隆保 (1996) 「近世におけるベンガラの製法に関する復元的実験」『文化財保存修復学会誌 vol.40』 p.35-47、文化財保存修復学会
- 北野信彦・肥塚隆保 (1998) 「江戸時代における鉄丹ベンガラの製法に関する復元的実験」『文化財保存修復学会誌 vol.42』 p.26-34、文化財保存修復学会
- 北野信彦 (2005) 「丹土ベンガラの製法に関する基礎的調査」『研究紀要 38-1』 p.53-69 ぐらしき作陽大学
- 北野信彦 (2006) 「古代木造建造物におけるベンガラ塗装の研究 (I) - 豊後国風土記に記された「赤湯泉 (あかゆ)」の温泉沈殿物に関する基礎的調査 -」『考古学と自然科学 vol.54』、p.35-52、日本文化財科学学会
- 北野信彦 (2007) 「古代木造建造物におけるベンガラ塗装の研究 (II) - パイプ状ベンガラの生産と使用に関する基礎的調査 -」『考古学と自然科学 vol.56』、p. 1-23、日本文化財科学学会
- 北野信彦 (2008) 「伝統的民家建造物の保存修復材料として使用するベンガラ顔料の製法と性状」『総合郷土研究所紀要 49』、p. 5-24、愛知大学
- 北野信彦・窪寺茂 (2008) 「三十三間堂の外観塗装材料である赤色顔料に関する調査」『保存科学 48』p.61-74、東京文化財研究所
- 北野信彦 (2009) 「歴史的な木造建造物におけるベンガラ塗装の研究 (I) - 文献史料に登場する「赤土」記に関する基礎的調査 -」『考古学と自然科学 vol.59』、p. 1-28、日本文化財科学学会
- 山崎一雄 (1987) 『古文化財の科学』 思文閣出版
- 吉木文平 (1959) 「3 酸化鉄 ($\text{Fe}_2\text{O}_3, \text{FeO}$)」 p.196-216、『鉱物工学』 技報堂
- 朽津信明 (2006) 「古代地方寺院外観塗装の色について」『保存科学 45』 p.177-186、東京文化財研究所
- 西山巖 (1977) 「べんがら」『改訂増補 最新顔料便覧』 p.448-451、日本顔料技術協会、誠文堂新光社
- 妙法院門跡 (2006) 『国宝 三十三間堂』、妙法院門跡
- 村田治朗・杉山信三・後藤楽三郎 (1961) 『三十三間堂の建築』、三十三間堂、三十三間堂奉賛会

付表1 掲載土器一覧表

番号	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存	胎土色調	備考
1	土師器	皿小	溝150	9.8	1.8		30%	10YR8/3浅黄橙色	
2	土師器	皿大	溝150	14.2			25%	7.5YR7/4にぶい橙色	
3	土師器	皿大	溝150	13.8	2.7		40%	7.5YR7/6橙色	
4	土師器	皿大	溝150	14.2	2.7		40%	10YR8/4浅黄橙色	
5	土師器	皿大	溝150	15.8	3.5		70%	7.5YR8/4浅黄橙色	
6	土師器	皿小	溝270	9.2	1.5		25%	10YR8/3浅黄橙色	
7	土師器	皿小	溝270	10.2	1.2		20%	10YR8/3浅黄橙色	
8	土師器	皿小	溝270	10.6	1.5		30%	10YR8/3浅黄橙色	
9	土師器	皿大	溝270	14.0	2.2		60%	7.5YR8/4浅黄橙色	
10	土師器	皿大	溝270	14.2	2.9		80%	7.5YR8/4浅黄橙色	
11	土師器	皿大	溝270	14.8	2.9		80%	10YR8/4浅黄橙色	
12	土師器	皿大	溝270	14.6	2.2		20%	7.5YR7/4にぶい橙色	
13	土師器	皿大	溝270	14.2	2.9		40%	10YR8/2灰白色	
14	土師器	皿大	溝270	14.6	3.0		75%	10YR8/4浅黄橙色	
15	輸入白磁	皿小	溝270			5.0	15%	10YR8/2灰白色	
16	輸入褐釉陶器	盤	溝270	31.2			10%	2.5Y6/1黄灰色	
17	須恵器	鉢	溝270				小片	N5/灰色	
18	土師器	皿小赤	井戸91	7.8	1.5		25%	10YR7/3にぶい黄橙色	
19	土師器	皿小赤	井戸91	8.6	1.3		25%	10YR6/3にぶい黄橙色	
20	土師器	皿小赤	井戸91	9.4	1.4		25%	10YR7/3にぶい黄橙色	
21	土師器	皿小赤	井戸91	8.8	1.7		25%	10YR7/4にぶい黄橙色	へそ皿
22	土師器	皿大赤	井戸91	10.5	1.8		25%	5YR7/3にぶい黄橙色	
23	土師器	皿大赤	井戸91	12.0	2.8		25%	10YR7/4にぶい黄橙色	
24	土師器	皿大赤	井戸91	11.0	2.8		25%	10YR8/1灰白色	
25	土師器	皿大赤	井戸91	11.8	2.4		20%	10YR8/1灰白色	
26	土師器	皿大赤	井戸91	11.8	2.8		25%	10YR8/1灰白色	
27	陶器	山茶椀	井戸91	12.6	3.4		25%	7.5YR7/2明褐灰色	美濃系
28	土師器	皿小赤	井戸93	7.9	1.2		25%	10YR7/4にぶい黄橙色	
29	土師器	皿大赤	井戸93	10.1	1.9		30%	2.5Y7/2灰黄色	
30	土師器	皿大赤	井戸93	12.0	1.9		10%	10YR6/4にぶい黄橙色	
31	土師器	皿大赤	井戸93	12.3	2.0		15%	7.5YR6/4にぶい橙色	
32	土師器	皿小白	井戸93	7.2	1.0		20%	10YR8/2灰白色	へそ皿
33	土師器	皿大白	井戸93	12.0	2.4		15%	10YR8/1灰白色	
34	土師器	皿大白	井戸93	11.7	3.1		20%	5YR8/1灰白色	
35	土師器	皿大白	井戸93	12.2	3.1		30%	10YR8/1灰白色	
36	土師器	皿大白	井戸93	11.2	2.8		20%	5YR8/1灰白色	
37	土師器	皿大白	井戸93	14.0	3.8		15%	5YR8/1灰白色	
38	施釉陶器	深皿	井戸93	28.0	7.1		25%	5YR7/1灰白色	
39	須恵器	鉢	井戸93				小片	N5/灰色	東播系
40	陶器	甕	井戸93				小片	N4/灰色	常滑産
41	陶器	甕	井戸93				小片	7.5YR4/3褐色	備前産
42	瓦質土器	羽釜	井戸93				小片	N3/暗灰色	
43	瓦質土器	鍋	井戸93				小片	2.5Y3/1黒褐色 内2.5Y6/2	
44	土師器	皿小赤	土坑173	7.8	1.1		10%	10YR7/3にぶい黄橙色	
45	土師器	皿小赤	土坑173	8.0	1.5		30%	10YR7/3にぶい黄橙色	
46	土師器	皿小赤	土坑173	7.6	1.5		40%	10YR7/4にぶい黄橙色	
47	土師器	皿小赤	土坑173	8.0	1.7		75%	7.5YR7/4にぶい橙色	
48	土師器	皿大赤	土坑173	10.0	1.9		20%	7.5YR6/6橙色	
49	土師器	皿大赤	土坑173	10.4	2.4		60%	10YR7/4にぶい黄橙色	
50	土師器	皿大赤	土坑173	10.2	2.2		90%	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明痕跡が残る
51	土師器	皿大赤	土坑173	11.0	2.2		60%	7.5YR8/3浅黄橙色	
52	土師器	皿大赤	土坑173	11.6	2.2		15%	10YR7/4にぶい黄橙色	
53	土師器	皿大赤	土坑173	11.0	2.3		70%	7.5YR7/6橙色	
54	土師器	皿大赤	土坑173	11.2	1.8		35%	7.5YR7/4にぶい橙色	
55	土師器	皿大赤	土坑173	11.1	1.8		40%	7.5YR7/4にぶい橙色	
56	土師器	皿大赤	土坑173	11.2	2.1		50%	7.5YR7/4にぶい橙色	
57	土師器	皿大赤	土坑173	11.2	2.6		80%	10YR7/4にぶい黄橙色	
58	土師器	皿小白	土坑173	5.0	0.6		30%	2.5Y8/1灰白色	
59	土師器	皿小白	土坑173	6.2	1.4		90%	10YR8/2灰白色	へそ皿

番号	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存	胎土色調	備考
60	土師器	皿小白	土坑173	6.6	1.6		完存	10YR8/1灰白色	へそ皿
61	土師器	皿小白	土坑173	7.2	1.3		40%	10YR8/2灰白色	
62	土師器	皿小白	土坑173	7.0	1.9		90%	10YR8/2灰白色	
63	土師器	皿大白	土坑173	11.2	2.9		50%	10YR8/2灰白色	
64	土師器	皿大白	土坑173	11.2	3.0		75%	7.5YR8/1灰白色	
65	土師器	皿大白	土坑173	11.0	2.4		30%	10YR8/1灰白色	
66	土師器	皿大白	土坑173	11.2	2.2		25%	10YR8/2灰白色	
67	土師器	皿大白	土坑173	11.4	3.2		25%	2.5Y8/1灰白色	
68	瓦質土器	盤	土坑173	46.0	11.5		30%	N4/灰色	
69	土師器	皿小赤	土坑147	7.6	1.4		10%	10YR7/4にぶい黄橙色	
70	土師器	皿大赤	土坑147	10.4	2.1		10%	10YR8/4浅黄橙色	
71	土師器	皿大赤	土坑147	10.6	2.4		10%	10YR8/4浅黄橙色	
72	土師器	皿大白	土坑147	11.8	2.7		40%	10YR8/2灰白色	
73	瓦質土器	鍋	土坑147	24.8	9.7		50%	N4/灰色 内10YR6/2灰黄褐色	外面被熱で煤付着
74	瓦質土器	鍋	埋納遺構193	18.8	8.6		完存	N7/灰色	被熱痕跡がない
75	瓦質土器	鍋	埋納遺構193	22.2	10.3		完存	N4/灰色 内10YR8/1灰白色	被熱痕跡がない
76	土師器	皿小	第3面掘下	6.9	1.1	5.6	95%	7.5YR7/4にぶい橙色	西国系搬入土師器
77	土師器	皿小	第3面掘下	7.2	1.1	5.2	30%	10YR7/3にぶい黄橙色	西国系搬入土師器
78	瓦器	椀	第3面掘下	14.9	4.9	6.2	70%	N4/灰色 内N8/灰白色	楠葉産
79	輸入白磁	椀	第3面掘下	15.6			10%	N8/灰白色 釉10Y7/1灰白色	
80	輸入白磁	椀	第3面掘下	16.4			10%	N8/灰白色 釉5GY8/1灰白色	
81	輸入白磁	皿	第3面掘下	11.4			10%	N8/灰白色 釉10Y7/1灰白色	
82	輸入青磁	椀	第3面掘下	18.0			10%	N8/灰白色 釉2.5GY7/1	龍泉窯系
83	輸入青磁	皿	第3面掘下	10.7	2.1	4.6	25%	N7/灰色 釉2.5GY6/1	同安窯系
84	輸入青磁	皿	第3面掘下	10.6	2.1	4.3	20%	7.5Y7/1灰白色 釉2.5GY7/1	同安窯系
85	土師器	皿小白	堀322	8.8	1.8		25%	2.5Y8/2灰白色	
86	輸入染付	皿	堀322	9.4	1.8	4.5	20%	N8/灰白色 釉5BG7/1明青灰色	明染付
87	輸入染付	皿	堀322			5.3	10%	N8/灰白色 釉5BG7/1明青灰色	明染付
88	施釉陶器	天目茶椀	堀322	12.0			10%	5Y8/1灰白色 釉2.5YR2/1	瀬戸産
89	陶器	播鉢	堀322				小片	5YR6/6橙色	信楽産
90	陶器	播鉢	堀322	24.0			小片	10YR5/1褐灰色	丹波産
91	陶器	播鉢	堀322			11.0	小片	10YR5/1褐灰色	丹波産
92	土師器	皿小白	土坑321	8.2	1.1		20%	10YR8/3浅黄橙色	
93	土師器	皿大白	土坑321	12.2	2.4		25%	10YR8/2灰白色	
94	陶器	播鉢	土坑321				小片	5YR4/3にぶい赤褐色	備前産
95	陶器	播鉢	土坑321					2.5YR4/6赤褐色	備前産
96	磁器	染付椀	溝63	17.4	3.9	4.1	40%	N8/灰白色	瀬戸・美濃系
97	磁器	染付椀	溝63	8.7	3.5	3.2	50%	N8/灰白色	瀬戸・美濃系
98	磁器	染付椀	溝63	10.4	5.3	3.0	50%	N8/灰白色	瀬戸・美濃系
99	陶器	皿	溝63	9.2	2.0	5.6	90%	2.5Y8/2灰白色	京焼系
100	磁器	染付皿	溝63	11.9	2.4	7.6	80%	2.5Y8/2灰白色	肥前系
101	陶器	灯火具蓋	溝63	3.2	2.2	3.2	90%	2.5Y8/2灰白色 釉2.5GY7/1	京・信楽系
102	陶器	灯火具	溝63	5.3	4.2	5.5	完存	2.5Y7/2灰黄色 釉2.5GY6/1	京・信楽系
103	陶器	灯火具	溝63		4.4以上	3.4	70%	10YR7/1灰白色	京・信楽系
104	陶器	行平把手	溝63				10%	7.5YR8/4浅黄橙色	「壽」銘
105	磁器	染付椀	溝64	8.7	4.0	3.4	50%	10YR7/1灰白色	京・信楽系
106	磁器	染付鉢	溝64	12.0	3.7以上		20%	10YR7/1灰白色	肥前系
107	磁器	染付蓋	溝64	8.9	2.2	3.4	80%	10YR7/1灰白色	京・信楽系
108	磁器	土瓶蓋	溝64	7.8	3.4		80%	2.5Y8/3淡黄色	信楽系青磁
109	陶器	鉢	溝64	8.1	5.3以上		30%	2.5Y7/2灰黄色 釉10YR8/1	京焼系
110	陶器	壺	溝64	19.6	3.6以上		20%	2.5Y8/2灰白色 釉2.5Y8/3	京焼系
111	陶器	鑑賞鉢	溝64		4.0以上	8.2	20%	2.5Y7/1灰白色 釉N1.5/黒色	京焼系
112	陶器	さや	溝64		6.0以上	9.0	50%	10YR7/3にぶい黄橙色	植木鉢に転用信楽系
113	輸入白磁	椀	第3面掘下				小片	N8/灰白色 釉10Y8/1灰白色	玉縁口縁部
114	輸入白磁	椀	第2面掘下				小片	N8/灰白色 釉5GY8/1灰白色	内面に草花文
115	輸入白磁	皿	溝156			3.4	小片	N8/灰白色 釉2.5GY8/1灰白色	底部
116	輸入白磁	壺	第3面掘下	11.6			小片	N8/灰白色 釉2.5GY7/1	口縁部
117	輸入白磁	壺	第3面掘下				小片	N8/灰白色 釉2.5GY6/1	口縁部
118	輸入白磁	壺	第3面掘下				小片	N8/灰白色 釉2.5GY6/1	頸部
119	輸入白磁	壺	第3面掘下				小片	N8/灰白色 釉2.5GY6/1	体部

番号	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存	胎土色調	備考
120	輸入青白磁	合子	第3面掘下				小片	N8/灰白色 釉5GY7/1明緑灰色	体部
121	輸入青白磁	壺	方広寺整地層				小片	7.5Y7/1灰白色 釉5GY7/1	体部に草花文
122	輸入青白磁	壺	土坑321				小片	N8/灰白色 釉5GY7/1明緑灰色	体部に草花文
123	輸入青磁	椀	11-1中世土坑				小片	N7/灰色 釉2.5GY6/1	内面に草花文
124	輸入青磁	椀	第3面掘下				小片	N5/灰色 釉2.5GY5/1	外面に鎬文
125	輸入青磁	椀	第3面掘下				小片	N7/灰色 釉7.5GY6/1緑灰色	外面に鎬文
126	輸入青磁	椀	第3面掘下				小片	N6/灰色 釉2.5GY5/1	龍泉窯系
127	輸入青磁	椀	11-1中世土坑				小片	N7/灰色 釉10Y5/2	同安窯系
128	輸入青磁	椀	第2面掘下	10.7	3.4	6.0	15%	10Y7/1灰白色 釉5GY4/1	
129	輸入青磁	椀	11-1中世土坑			6.2	小片	N7/灰色 釉2.5GY5/1	龍泉窯系
130	輸入青磁	椀	第3面掘下			3.6	小片	10Y7/1灰白色 釉10Y5/2	
131	輸入褐釉陶器	壺	第3面掘下				小片	7.5Y6/1灰色 釉7.5Y5/2	

付表2 掲載軒瓦一覧表

番号	種類	文様	遺構名	色調・胎土	焼成	備考
瓦1	軒丸瓦	蓮華文	11-1区第5面掘下	N8/～N7/灰白色、砂粒若干含む	良好	平城宮6301B型式
瓦2	軒丸瓦	蓮華文	11-1区第4面掘下	N8/灰白色・表面N3/暗灰色、砂粒やや多く含む	良好	南都産
瓦3	軒丸瓦	三巴文	10-3区井戸91	10YR7/1灰白色、砂粒少量含むが緻密	良好 須恵質	播磨産
瓦4	軒丸瓦	三巴文	11-1区第3面掘下	N8/～N7/灰白色、砂粒少量含むが緻密	良好	京都産
瓦5	軒平瓦	唐草文	11-1区柱穴263	N4/灰色、緻密	良好 須恵質	播磨産
瓦6	軒平瓦	唐草文	11-1区路面120C	N6/灰色、緻密	良好 須恵質	播磨産
瓦7	軒平瓦	唐草文	11-1区第4面掘下	5YR5/2灰褐色、砂粒多く含む	良好	播磨産
瓦8	軒平瓦	唐草文	11-1区第3面掘下	2.5Y8/1灰白色、砂粒やや多く含む	やや甘い	播磨産
瓦9	軒平瓦	唐草文	11-1区土取穴掘下	10YR7/4にぶい黄橙色、砂粒少量含む	良好	播磨産
瓦10	軒平瓦	鋸歯文	11-1区第2面掘下	N5/灰色、緻密	良好 須恵質	播磨産
瓦11	軒平瓦	鋸歯文	11-1区第4面掘下	7.5Y6/1灰色、砂粒少量含むが緻密	良好	播磨産
瓦12	軒平瓦	半截華文	11-1区溝140	N8/灰白色・表面N3/暗灰色、微砂粒含むが緻密	やや甘い	播磨産
瓦13	軒平瓦	半截華文	11-1区第3面掘下	10YR8/3浅黄橙色～7.5Y5/1灰色	良好	播磨産
瓦14	軒平瓦	半截華文	11-1区PIT192	N8/灰白色・表面N3/暗灰色、緻密	良好	播磨産
瓦15	軒平瓦	剣頭文	11-1区土取穴掘下	10YR8/4浅黄橙色、砂粒をやや多く含む	良好	京都産 平瓦部凸面にヘラ記号
瓦16	軒平瓦	剣頭文	11-1区土取穴掘下	N8/灰白色・表面N2/黒色、砂粒多く含む	良好	京都産
瓦17	軒平瓦	斜格子文	11-1区土取穴掘下	2.5Y8/1灰白色～N4/灰色、砂粒多く含む	良好	京都産 平瓦部凸面にヘラ記号
瓦18	軒丸瓦	五三桐文	10-4区整地層	10YR7/1灰白色・表面10YR4/1褐灰色、砂粒多く含む	良好	
瓦19	軒丸瓦	五三桐文	10-4区整地層	10YR7/1灰白色・表面10YR3/1黒褐色、砂粒やや多く含む	良好	
瓦20	軒丸瓦	三巴文	10-3区整地層	10YR8/2灰白色・表面10YR3/1黒褐色、砂粒多く含む	良好	
瓦21	軒丸瓦	三巴文	10-2区盛土	10YR6/1褐灰色・表面N4/灰白色、砂粒多く含む	良好	
瓦22	軒丸瓦	三巴文	11-1区表土掘削中	10YR7/1灰白色・表面10YR3/1黒褐色、砂粒やや多く含む	良好	
瓦23	軒平瓦	唐草文	11-1区表土掘削中	10YR7/1灰白色・表面10YR3/1黒褐色、砂粒少量含む	良好	
瓦24	軒平瓦	唐草文	10-2区盛土	10YR7/2にぶい黄橙色・表面10YR6/2灰黄褐色、砂粒含む	良好	
瓦25	軒平瓦	唐草文	10-4区盛土	7.5Y8/1灰白色・表面10YR3/1黒褐色、砂粒含む	良好	
瓦26	軒平瓦	唐草文	柵4柱穴	10YR7/2にぶい黄橙色・表面10YR4/1褐灰色、砂粒含む	良好	瓦当表面にキラコ

付表3 掲載刻印瓦一覧表

番号	種類	遺構名	刻印の種類・位置	色調・胎土	備考
瓦27	平瓦	10-4区整地層	円形の圏線に「大」の文字、端面	5Y8/1灰白色・表面5Y5/1灰色、砂粒含む	
瓦28	丸瓦	10-4区整地層	円形の圏線に「大一」の文字、凸面	2.5Y8/2灰白色・表面N4/灰色、小礫含む	
瓦29	平瓦	10-4区整地層	円形の圏線に「大一」の文字、凹面	7.5Y8/1灰白色・表面5Y5/1灰色、砂粒含む	
瓦30	平瓦	10-3区整地層	円形の圏線に「大一」の文字、端面	7.5Y8/1灰白色・表面N5/灰色、砂粒含む	
瓦31	平瓦	10-3区整地層	円形の圏線に「大工」の文字、凹面	10Y8/1灰白色・表面N5/灰色、小礫含む	
瓦32	平瓦	10-3区整地層	円形の圏線に「吉」の文字、端面	N5/灰色、砂粒含む	燻しなし
瓦33	平瓦	10-4区整地層	円形の圏線に文字か記号、端面	10Y8/1灰白色・表面N4/灰色、砂粒含む	
瓦34	平瓦	10-2区盛土	四角形の圏線に文字か記号、端面	7.5Y8/1灰白色・表面N4/灰色、小礫含む	
瓦35	丸瓦	10-4区整地層	円形の圏線に「+」「+」の組み合わせ記号、凸面	7.5Y8/1灰白色・表面N4/灰色、砂粒含む	
瓦36	平瓦	10-4区整地土上面	円形の圏線に18と類似した記号、端面	N7/灰白色・表面N4/灰色、砂粒含む	
瓦37	平瓦	10-4区整地層	綾杉状文、端面	7.5Y7/1灰白色、表面N5/灰色小礫含む	
瓦38	丸瓦	10-4区整地土上面	円形の圏線に三角形の記号の組み合わせ、挟端部凸面	10Y8/1灰白色・表面N4/灰色、小礫含む	
瓦39	平瓦	10-2区盛土	扇形の圏線に記号、端面	7.5Y7/1灰白色・表面N4/灰色、砂粒含む	
瓦40	丸瓦	10-4区整地層	円形の圏線に無文・記号、凸面	N7/灰白色・表面N4/灰色、砂粒含む	
瓦41	平瓦	10-4区整地層	三角形の圏線に不明記号、端面	7.5Y8/1灰白色・表面N4/灰色、小礫含む	
瓦42	丸瓦	11-1区表土掘削中	雲形の圏線に不明記号、挟端部凸面	5YR6/6橙色、砂粒含む	火災瓦
瓦43	平瓦	11-1区表土掘削中	雲形の圏線に不明記号、端面	N7/灰白色・表面N4/灰色、砂粒含む	
瓦44	丸瓦	11-1区表土掘削中	菱形の圏線に点、挟端部凸面	5YR6/6橙色、砂粒含む	火災瓦

付表4 掲載石造物一覧表

番号	種類	規模(残存) cm			内容(種子・銘文など)	材質	出土地区	備考
		長	幅	厚				
石6	石仏	45.4	28.4	24.0	前面を彫り窪め如来の座像を刻す。	花崗岩	10-2区	
石7	石仏	45.3	20.4	13.5	前面を彫り窪め如来の座像を刻す。	花崗岩	10-2区	
石8	石仏	50.0	29.3	21.7	如来の座像を刻す。	花崗岩	10-2区	
石9	石仏	51.5	33.8	17.0	如来の座像を刻す。	花崗岩	10-2区	
石10	墓標	26.0	22.5	12.0	中央に「南無妙法口」と題目を刻む。	花崗岩	10-2区	
石11	墓標	30.5	16.7	8.5	頂部は三角形、首部に二条線を刻し額部と成す。中央に梵字、左下に「道口」。	花崗岩	10-2区	
石12	墓標	35.5	20.8	10.8	前面彫り窪め中央に題目を刻む。右側に「祖父妙口」左側に「祖母正信」左端「永口十二年十一月」	花崗岩	10-2区	
石13	五輪塔	29.5	21.5	20.8	上から空・風部。両部の四面に梵字を刻す。風部下には火輪と組み合わせるための突起あり。	花崗岩	10-2区	積み上げ式(空風一石)
石14	五輪塔	13.7	19.7	19.3	水部(塔身)。一面に梵字を刻す。下に窪みあり。	花崗岩	10-2区	積み上げ式
石15	五輪塔	28.0	20.6	21.0	上から空・風部。両部の四面に梵字を刻す。風部下には火輪と組み合わせるための突起あり。	花崗岩	10-2区	積み上げ式(空風一石)
石16	五輪塔	15.7	22.8	22.9	火部(笠石)。四面に梵字を刻す。上に風部と組み合わせる窪みあり。	花崗岩	10-2区	積み上げ式
石17	五輪塔	22.0	27.5	28.4	水部(塔身)。一面に梵字を刻す。上に火輪と組み合わせる窪みあり。	花崗岩	10-5区	積み上げ式
石18	五輪塔	35.2	17.8	17.7	上から空・風・火・水部。地部は欠損。一面にそれぞれ梵字を刻す。	花崗岩	10-2区	一石五輪塔
石19	五輪塔	42.5	14.9	15.4	上から火・水・地部。空・風部が欠損。	花崗岩	10-2区	一石五輪塔
石20	五輪塔	27.9	11.5	19.3	上から火・水・地部。空・風部が欠損。	花崗岩	10-2区	一石五輪塔
石21	五輪塔	32.5	12.4	12.3	上から火・水・地部。空・風部が欠損。火・水部の一面に梵字を刻む。地部の一面中央に「妙口」、左側に「三月一日」右側にも痕跡あるが不明	花崗岩	10-2区	一石五輪塔
石22	宝篋印塔	47.5	36.6	33.7	上から九輪・請花・伏鉢・露盤・隅飾突起部。宝珠・塔身・基壇部が欠損	花崗岩	10-2区	
石23	宝篋印塔	30.8	15.0	15.0	上から九輪・請花・伏鉢部。	花崗岩	10-2区	
石24	宝篋印塔	14.0	13.6	13.4	塔身部。四面に梵字を刻す。	花崗岩	10-2区	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうじゅうじどのあと・ろくはらせいちょうあと・ほうこうじあと							
書名	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-8							
編著者名	網 伸也・加納敬二・田中利津子・長宗繁一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年1月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじゅうじどのあと 法住寺殿跡 ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡 ほうこうじあと 方広寺跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 ちややまち 茶屋町527	26100	546 540 541	34度 59分 25秒	135度 46分 21秒	2008年12月 8日～2009 年3月31日 2009年9月 7日～2009 年11月13日	910m ² 260m ²	京都国立 博物館平 常展示館 建て替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法住寺殿跡	寺院跡 離宮跡	平安時代	路面、溝、門	土師器、須恵器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦類		方広寺南門・回廊の 遺存範囲を確定し、 造成過程の一端を復 元できた。また、平 安時代後期の南北路 面と西側に想定でき る邸宅の門遺構を検 出し、方広寺創建ま での歴史的変遷を明 らかにした。		
六波羅政庁跡	都城跡 邸宅跡	鎌倉時代～ 室町時代	路面、溝、門、柱 列、埋納遺構、土 坑、井戸、堀	土師器、須恵器、山茶 碗、瓦器、瓦質土器、 焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、錢貨、砥 石、木製品、井戸枘材				
方広寺跡	寺院跡	桃山時代～ 江戸時代前期	方広寺南門、回廊、 伽藍造成整地、石 罌、地業、路面、 溝、土坑	土師器、瓦質土器、焼 締陶器、輸入陶磁器、 瓦類、漆膜断片、石造 物、金属製品、錢貨				
		江戸時代後期 ～明治時代	柵、溝、井戸、土 坑、窯	染付、磁器、施釉陶器、 瓦類、錢貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009- 8
法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

発行日 2010年1月29日
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>
印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961